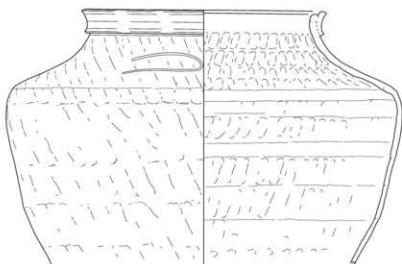


愛知県東海市

令和2年度

# 畑間遺跡発掘調査報告



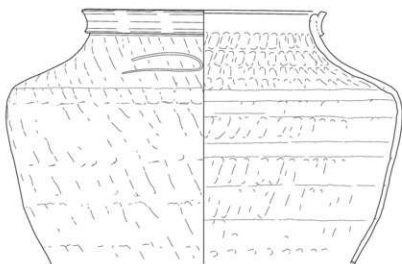
2023年

愛知県東海市教育委員会

愛知県東海市

令和2年度

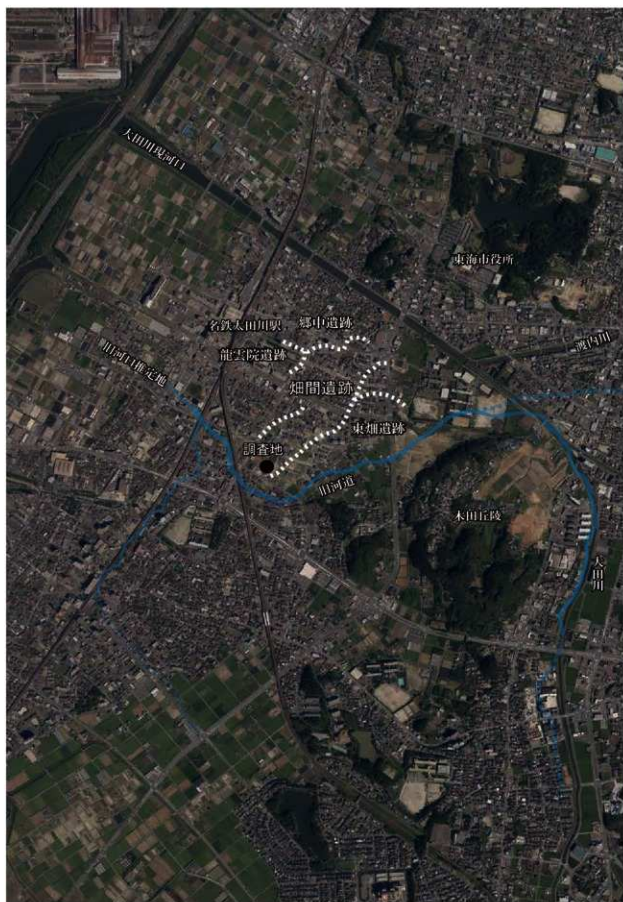
# 畑間遺跡発掘調査報告



2023年

愛知県東海市教育委員会





1 畑間遺跡の位置と調査地（上方が北）







1 1地点全景(南西から)



2 2地点全景(北東から)



3 2地点 2014SE 井戸枠検出状況(南東から)



## 序

伊勢湾に面した知多半島西岸の付け根に、私どもの愛知県東海市は位置しています。はるか昔には、あゆち潟と呼ばれた遠浅の海が広がり、その沿岸には多くの先人たちの暮らしがありました。現在、あゆち潟はわが国有数の工業地帯へとその姿を変え、海との関わり方も漁業から工業へと移ろいましたが、本市と海との繋がりは今も続いています。

こうした海との関わりの中で形成された先人たちの暮らしの跡は埋蔵文化財という形で現在も残されています。

東海市では名古屋鉄道常滑線太田川駅を中心とする区域を中心市街地と位置づけ、平成4年度（1992年度）から土地区画整理事業を実施してきました。教育委員会では、本事業区域内に所在する埋蔵文化財について、平成11年度（1999年度）から記録保存を目的とした発掘調査を実施しており、本書で報告をします令和2年度（2020年度）に行った発掘調査で22年目、土地区画整理事業に伴う調査としては最後の調査となります。

令和2年度（2020年度）は畑間遺跡の南端部を調査し、遺跡縁辺部における遺構や遺物、土層の堆積状況などを知ることが出来ました。22年にも及ぶ発掘調査の成果報告は今後の課題ではありますが、本書及び既刊の報告書が合わせて地域の歴史研究に活用され、埋蔵文化財への理解を深める一助となれば幸いです。

なお、調査に際しては、地元の皆様ならびに関係者、関係諸機関より多大なる御理解、御協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

令和5年（2023年）3月

愛知県東海市教育委員会  
教育長 加藤 千博



## 例 言

1. 本書は、愛知県東海市大田町に所在する畑間（はたま）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、東海太田川駅周辺土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査として、東海市教育委員会が同事業施行者である東海市より依頼を受け、令和2年5月26日に株式会社アコード名古屋営業所と業務委託契約を結び、「畑間遺跡発掘調査業務委託」として実施した。
3. 現地調査は、令和2年6月16日から同年8月3日まで実施した。出土遺物の洗浄・注記等の1次整理作業は現地調査終了後に開始し、同年8月18日に終了した。  
各地点の発掘調査面積は以下のとおりで、総面積は357.6㎡である。

1 地点 (HM20-1) : 153.3㎡

2 地点 (HM20-2) : 204.3㎡

4. 出土遺物の接合・実測等の2次整理作業および本書の作成は、東海市教育委員会が株式会社アコード名古屋営業所と業務委託契約を結び、「畑間遺跡発掘調査報告書作成業務委託」として令和4年8月18日から開始し、令和5年3月31日に本書の刊行をもって終了した。
5. 現地調査は、東海市教育委員会社会教育課統括主任宮澤浩司、同主事早川由香里の監督の下、株式会社アコード名古屋営業所調査技師鳥軒満、施工管理技師吉井啓二、測量技師北島誠司・尾崎裕司、調査補助員田邊好が担当した。
6. 現地調査および出土遺物の1次・2次整理作業においては、神野攻一、山崎久生、土橋六男、井上由子、藤井恵美子、下谷雅子、藤巻悦子の協力を得た。
7. 本書の執筆は、第1章第1～3節を早川由香里（東海市教育委員会）、第1章第4節～第3章第1・3・4・5節と第4章を鳥軒満、第3章第2節と付論を青木修（公益財団法人瀬戸市文化振興財団）、第3章第6節を金原裕美子・金原美奈子（一般社団法人文化財科学研究センター）が行った。編集は東海市教育委員会職員の監督の下、鳥軒が行った。
8. 出土遺物のうち、貝類・獣骨等の動物遺存体同定、金属製品（銭貨）の清掃及びレントゲン写真撮影は、一般社団法人文化財科学研究センターに依頼した。
9. 本書に掲載した写真・図面のうち、巻頭図版1は国土地理院撮影の空中写真（2020年撮影）、第3図は国土地理院撮影の空中写真（1961年撮影）、第2図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図（鳴海）を使用した。遺物写真は鳥軒と中村毅（株式会社アコード）が撮影した。
10. 今回出土した遺物、図面・写真等の記録類と各種資料はすべて東海市教育委員会で保管している。
11. 現地調査ならびに本報告書の作成にあたって、下記の方々および機関からご指導とご協力を賜った。記して感謝申し上げます。（所属・敬称略）

鈴木正貴 青木 修 坂野俊哉 樋田泰之 鶴岡堅証 中村 毅 西村匡広 吉川裕幸

門田哲侍 白樺 淳 後藤完二 知多市歴史民俗博物館 東海市中心街整備事務所

愛知県教育委員会 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター

## 凡 例

1. 遺跡の略称はこれまでの略称に今回の調査年度（西暦）を示す 20 を付した HM 20 を使用した。遺物注記や図面等の記録および本書の記述においても、上記の略称を用いている。
2. 遺構番号は地点（調査区）ごとに通し番号を付けた。
3. 遺構の種別記号は『発掘調査のてびき』文化庁文化財部記念物課編 2010 に従った。以下に主なものを記す。  
SK = 土坑   SP = 柱穴（柱痕跡や形状から判断）   SD = 溝   NR = 自然流路  
SA = 柵列   SB = 掘立柱建物   SI = 竪穴建物   SE = 井戸   SX = 不明遺構・落ち込み等
4. 本書で使用した座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、世界測地系にて表記している。方位は座標北を示す。標高は東京湾平均海面（T.P.）を使用した。
5. 遺構埋土・土層および遺物胎土の色調は『新版標準土色帖』2015 年版 農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を基準とした。
6. 土質に関しては、粒子の大きさを区分し、小さいものから以下の通りとした。  
粘土→シルト質粘土→粘土質シルト→シルト→砂質シルト→極細粒砂→細粒砂→中粒砂→粗粒砂→礫砂→砂礫
7. 本書で用いた遺物の年代観・用語等に関しては参考文献 24～31 による。
8. 本書の遺構図は 1/40・1/50・1/150 を基本とし、一部にその他の縮尺を用いている。
9. 遺物実測図は 1/4 を基本とし、大型製品は 1/5・1/6、金属製品（銭貨）は 1/1 の縮尺を用いた。
10. 参考文献は必要に応じて本文脚注などに記したものもあるが、改めて巻末にも一括して掲載した。

# 目次

<b>第1章 調査の経緯と遺跡の環境</b>	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 位置と歴史的環境	2
第3節 既往の調査	5
第4節 調査の方法	8
第5節 調査の経過	10
<b>第2章 遺構</b>	
第1節 遺構の概要と基本層序	13
第2節 1地点の遺構	14
第3節 2地点の遺構	23
<b>第3章 遺物</b>	
第1節 縄文～古墳時代の土器	43
第2節 中世の土器・陶器	44
第3節 近世の土器・陶磁器	48
第4節 土製品	50
第5節 石製品・金属製品	50
第6節 自然遺物（貝類・動物遺存体同定）	51
<b>第4章 まとめ</b>	53
遺構一覧表	58
出土遺物一覧表	62
<b>付論 畑間・東畑・郷中遺跡における井戸枠の特徴について</b>	65



## 挿図目次

第 1 図	調査地の位置	第 23 図	2077SP、2080SK
第 2 図	遺跡の位置と周辺の遺跡	第 24 図	2009・2011・2015・2016SD、 2010・2013SK
第 3 図	遺跡周辺の環境	第 25 図	2014SE
第 4 図	調査区配置図	第 26 図	30-3 地点井戸 3223SE 断面図
第 5 図	調査区・グリッド位置図	第 27 図	2048SK、2055SEa・b
第 6 図	基本層序模式図	第 28 図	2030SX
第 7 図	1 地点南東壁土層断面図	第 29 図	縄文～古墳時代の土器
第 8 図	1 地点遺構平面図	第 30 図	中世の土器・陶器①
第 9 図	1001SP、1002・1003・1008～ 1011SK	第 31 図	中世の土器・陶器② (2014SE 出土遺物)
第 10 図	1012・1016・1017・1019・10 21SK、1018SP	第 32 図	中世の土器・陶器③ (2014SE 出土遺物)
第 11 図	1005SD、1004・1006・1007SK	第 33 図	中世の土器・陶器④ (2014SE 出土遺物)
第 12 図	1020SX	第 34 図	近世の土器・陶磁器
第 13 図	2 地点遺構平面図	第 35 図	土製品・石製品
第 14 図	2 地点南東壁土層断面図	第 36 図	金属製品（銭貨）
第 15 図	2020・2039～2041SP、2052SK	第 37 図	砂堆南西部の中世区画溝群
第 16 図	2006SP、2001～2003・2005・ 2007・2008SK	第 38 図	畑間・東畑・郷中遺跡の陶器転用側式 井戸分布図
第 17 図	2023～2025SK	第 39 図	畑間・東畑・郷中遺跡の陶器転用側式 井戸①
第 18 図	2028・2032～2034SK	第 40 図	畑間・東畑・郷中遺跡の陶器転用側式 井戸②
第 19 図	2036・2037SK		
第 20 図	2042・2045・2047SP、2043SD、 2046・2079SK		
第 21 図	2056・2058・2081SP、2054・ 2057・2059・2065SK		
第 22 図	2070・2071・2074・2075SK、 2072SP		

## 表目次

表 1	既往の発掘調査報告書	表 4	2 地点遺構一覧表
表 2	貝類・動物遺存体同定結果	表 5	出土遺物一覧表
表 3	1 地点遺構一覧表	表 6	畑間・東畑・郷中遺跡の井戸一覧表

## 写真目次

写真1	調査前状況	写真7	2地点北半部表土掘削作業
写真2	仮設事務所等設置作業	写真8	2地点中央部遺構検出作業
写真3	1地点南半部表土掘削作業	写真9	2地点北半部2014SE掘削作業
写真4	1地点南半部遺構掘削作業	写真10	2地点南半部測量作業
写真5	1地点中央部遺構掘削作業	写真11	2地点全景写真撮影(高所作業車)
写真6	1地点南半部清掃作業	写真12	2地点埋戻し作業

## 写真図版目次

写真図版1	1 1・2地点全景	7	2007SK 断面
	2 1地点全景	8	2008SK 断面
	3 1地点全景	写真図版9	1 2010SK 断面
写真図版2	1 1地点北端部	2	2011SD 断面
	2 1002SK 断面	3	2011SD
	3 1003SK 断面	4	2015・2016SD 断面
	4 1002・1003SK	5	2地点北東部
	5 1008SK	写真図版10	1 2014SE 断面
写真図版3	1 1005SD、1004・1006 1007SK	2	2014SE 井戸枠1段目
	2 1004・1006・1007SK	写真図版11	1 2014SE 井戸枠1・2段目
写真図版4	1 1010SK 断面	2	2014SE 井戸枠1・2段目
	2 1011SK 遺物出土状況	写真図版12	1 2023SK・2030SX
	3 1013SP 断面	2	2023SK 断面
	4 1015SK	3	2023SK 粘粘土断面
	5 1016・1017SK 断面	4	2024SK 断面
	6 1018P	5	2033SK 断面
	7 1019SK	写真図版13	1 2036SK 断面
	8 1021SK 断面	2	2039・2040SP 断面
写真図版5	1 1地点南端部	3	2042SP 断面
	2 1020SX	4	2043SD 断面
写真図版6	1 1地点南東壁 北端部	5	2045SP 断面
	2 1地点南東壁 中央部	6	2045SP 遺物出土状況
	3 1地点南東壁 南端部	7	2046SK 断面
写真図版7	1 2地点全景	8	2046SK
	2 2地点全景	写真図版14	1 2048SK・2055SEa・b 断面
	3 2地点南端部	2	2048SK 断面
写真図版8	1 2001SK 断面	3	2055SEa 井戸枠
	2 2002SK 断面	4	2053SK 断面
	3 2003SK 断面	5	2053SK
	4 2004SP	写真図版15	1 2057SK・2081SP
	5 2005SK 断面	2	2059SK 断面
	6 2006SP 断面	3	2065SK 断面
		4	2065SK

	5	2070SK 断面		2	2地点南東壁 中央部
	6	2070SK		3	2地点南東壁 南端部
	7	2071SK 断面	写真図版 18	縄文～古墳時代の土器	
	8	2071SK		中世の土器・陶器①	
写真図版 16	1	2075SK 断面	写真図版 19	中世の土器・陶器②	
	2	2075SK	写真図版 20	中世の土器・陶器③	
	3	2074SK	写真図版 21	中世の土器・陶器④	
	4	2072SP 断面	写真図版 22	中世の土器・陶器⑤	
	5	2072SP	写真図版 23	近世の土器・陶磁器①	
	6	2077SP	写真図版 24	近世の土器・陶磁器②	
	7	2079SK 断面		土製品・石製品・金属製品	
	8	2079SK	写真図版 25	貝類・動物遺存体	
写真図版 17	1	2地点南東壁 北端部			

# 第1章 調査の経緯と遺跡の環境

## 第1節 調査に至る経緯

畑間遺跡は愛知県東海市大田町に所在する（第1図）。平成8年度から10年度にかけて愛知県教育委員会が実施した知多半島遺跡詳細分布調査<sup>1)</sup>によると、畑間遺跡は古墳時代から中世にかけて、東畑遺跡は弥生時代から中世にかけての遺物散布地とされている。

本市では、名古屋鉄道太田川駅周辺地区を東海市の玄関口として位置づけ、中心市街地としての整備を進めており、平成4年度から土地区画整理事業、連続立体交差事業及び市街地再開発事業の三つの事業を実施している。これら事業のうち、土地区画整理事業区域内に所在する埋蔵文化財包蔵地について、その範囲および性格を把握するため、平成8年度に試掘調査を実施した<sup>2)</sup>。この調査によって、事業区域内には畑間遺跡、東畑遺跡、郷中遺跡をはじめ、後田遺跡、龍雲院遺跡が存在することを確認した（第2図）。試掘調査の結果に基づき、土地区画整理事業担当当局である都市建設部中心街整備事務所と協議・調整をはかり、平成11年度から東海市教育委員会によって、主として道路整備用地の記録保存を目的とした緊急発掘調査を継続して実施している。令和2年度末時点での調査済面積は27,670㎡である。

令和2年度の調査は、原因者である東海太田川駅周辺土地区画整理事業施行者代表者の東海市長から令和2年2月26日付けにて文化財保護法第94条の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知があり、令和2年3月16日31教生第3960号にて愛知県教育委員会教育長から発掘調査指示があった。畑間遺跡範囲内の2地点計320㎡については、原因者である東海太田川駅周辺土地区画整理事業施行者代表者の東海市長から令和2年4月14日付け第2号にて発掘調査依頼があった。令和2年4月17日付け社第47号にて東海市教育委員会教育長から発掘調査を実施する旨回答し、現地調査業務及び1次整理作業について、令和2年5月26日に株式会社アコード名古屋営業所と業務委託契約を締結した。



第1図 調査地の位置

現地調査は梅雨などの影響で6月16日より着手し、社会教育課職員の監督の下、1地点、2地点の順に調査を実施した。同年8月3日に現地調査は終了し、その後、現場事務所にて1次整理作業を実施し、令和2年12月9日付けて成果品の納入を受けた。

報告書作成は令和4年度に行った。現地調査を受託した株式会社アコード名古屋営業所と2次整理作業及び報告書作成業務について、業務委託契約を令和4年8月18日に締結した。その後、社会教育課職員の監督の下、2次整理作業及び報告書作成業務を実施し、本報告書の刊行に至ったものである。

## 第2節 位置と歴史的環境

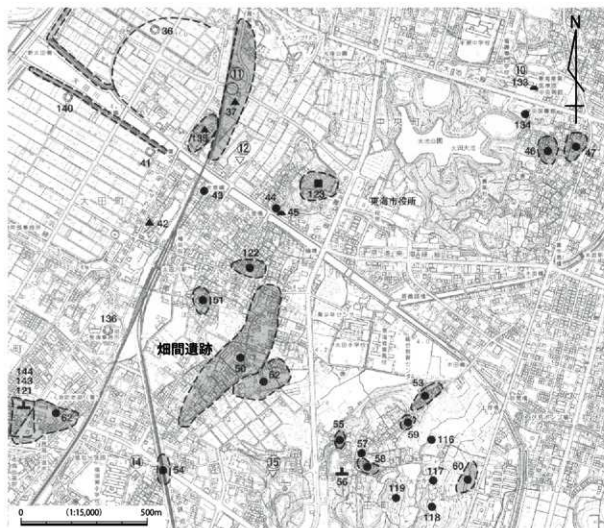
畑間遺跡は知多半島西岸の伊勢湾に面した海岸平地に展開する砂堆上に立地する遺跡である。知多半島西岸部には海岸部に向けて開けた海岸平地がいくつか展開するが、畑間・東畑遺跡の立地する東海市大田町周辺から、知多市北部の寺本にかけて南北に延びる海岸平地はその中でも最大のものである。この平地を構成する地層は沖積層であり、縄文海進の時期には水面下にあったとみられる。その証左として、畑間・東畑・郷中遺跡の東側に延びる木田丘陵上に展開する高ノ御前遺跡がある。高ノ御前遺跡の現在の海拔高は12m程であり、市内最古の縄文時代前期の土器が出土している。畑間・東畑遺跡周辺が陸地化したのは、その後、海水面が後退する縄文時代中期から後期にかけてとみられ、東畑遺跡からは当該期の縄文土器が少なからず出土する。恐らく縄文時代中期から後期には砂堆と呼ばれる砂の高まりが形成され、現在遺跡の範囲として捉えている海岸平地が陸地化していたと考えられる。

砂堆とは、伊勢湾を河口に持つ木曾川や知多半島の丘陵部から流れる小河川、波による陸地の侵食等、様々な作用によって供給された砂が、伊勢湾の沿岸流等によって運ばれて海岸に沿って堆積したものと考えられており、その形成時期の違いによって本遺跡周辺では3条の砂堆列がみられる。最も海岸から奥の砂堆列から順に第1、第2、第3砂堆と呼んでおり、畑間遺跡は第1砂堆に位置する。第1砂堆は最も東西幅が広く、大規模なものであるが、南北方向は丘陵部に規制され、1km程にとどまる。この丘陵部には北側の丘陵上に真言宗の古刹である弥勒寺が、南側丘陵上に天台宗の古刹である観福寺が所在しており、両者に挟まれた位置に畑間遺跡の集落が展開することは示唆的である。この他、第1砂堆上には、最も北側の弥勒寺が立地する丘陵山裾に王塚古墳（古墳時代・滅失）、神宮前遺跡（古墳～中世）が所在する。王塚古墳は、昭和初期の道路拡幅の際に石室などが出土したと伝えられ、出土遺物の一部（須恵器短頸壺・坏蓋）が東海市立郷土資料館に所蔵されている他は詳らかではない。同じく神宮前遺跡についても遺物散布地として知られてはいるが、発掘調査が実施されておらず、詳細は不明である。なお、王塚古墳、神宮前遺跡の両遺跡のすぐ南を流れる大田川は、江戸時代初期に尾張藩2代藩主徳川光友により、横須賀御殿の建築に際して新たに開削された流路である。現在では大田川によって断絶されているものの、王塚古墳等は近世までは畑間・東畑遺跡と同じ砂堆上にあったものであり、一体の遺跡群としてとらえる必要がある。

第2砂堆は第3砂堆と比べて幅が狭く小規模である。名鉄太田川駅の辺りから北側の大宮神社辺りまで広がっている。この砂堆上には後田遺跡（古墳～平安）が位置する。後田遺跡周辺は宅地化が進んでいるが、製塩土器が採集されており、後述する上浜田遺跡、下浜田遺跡と密接に関連した遺跡であると考えられる。この砂堆の北端に位置する大宮神社は創建時期が不詳であるが、東海市史によると平安時代に大郷（大田町周辺）が熱田神宮の荘園となるに伴って、荘園鎮守神として熱田から勧請されたと推定されている。

第3砂堆は形成時期が最も新しいが、最も規模が大きく、旧海岸線沿いに知多市北部まで延びている。知多市域ではこの第1砂堆上に弥生時代以降大規模な集落が形成された。本市域では古墳時代中期以降に著名な製塩遺跡として知られる松崎遺跡（古墳～平安）や上浜田遺跡（古墳～平安）、下浜田遺跡（奈良～平安）が存在する。

概観すると、畑間・東畑・郷中遺跡の所在する大田町周辺では、最も奥側の第1砂堆上に中心的な弥生集落が立地し、第2、第3砂堆が積極的に利用されるのは古墳時代以降ということになる。これは第3砂堆上に弥生集落が展開する知多市などとは様相を異にする。その理由としては、大田町周



36 浜新田堤防	50 畑間遺跡	59 前畑遺跡	123 弥勒寺遺跡
37 松崎遺跡	51 龍雲院遺跡	60 北広遺跡	133 丸根古墳
41 後浜新田堤防	52 東畑遺跡	62 烏帽子遺跡	134 大池北貝塚
42 下浜田遺跡	53 高ノ御前遺跡	116 上前田遺跡	135 上浜田遺跡
43 後田遺跡	54 太田川第3踏切貝塚	117 西広1号遺跡	136 御州浜庭園跡
44 神宮前遺跡	55 庄之脇遺跡	118 西広2号遺跡	140 川南新田堤防
45 王塚古墳	56 木田城跡	119 山畑遺跡	143 瀧川半斎屋敷
46 峰畑貝塚	57 木田遺跡	121 横須賀御殿跡	144 横須賀代官所
47 北屋敷遺跡	58 下畑遺跡	122 郷中遺跡	

第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡



辺では内陸側に奥まった、いわば谷状地形であったことから、第1砂堆が大きく発達し、居住に適していたことが考えられる。

この大田町周辺には上記の遺跡の他、主に弥生時代の集落である烏帽子遺跡（縄文～近世）、尾張藩2代藩主徳川光友の浜御殿である横須賀御殿跡などの遺跡が所在する。また、近世には第3砂堆の海岸部が新田開発されて埋め立てられ、川北新田、川南新田、浜新田がそれにあたり、浜新田からは圃場整備に伴い、新田堤防の<sup>いり</sup>塚が見つかった。こうした近世の新田開発や大田川の付け替えに加え、現代の埋立てにより遺跡が形成された当時の景観は失われているが、遺跡の分布や僅かに残る砂堆の痕跡などから、かつての環境を復元することができる。

### 第3節 既往の調査

畑間遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地として知られてはいたが、土地区画整理事業実施以前は試掘調査も含めて発掘調査は実施されていなかった。初めて調査が実施されたのは、第1節のとおり平成8年度の土地区画整理事業に先立つ試掘調査である。調査では、土地区画整理事業の予定区域内に20箇所のトレンチを設定して行った。このうち畑間・東畑遺跡に関するトレンチは12箇所に上る。この試掘調査によって分布範囲が不明であった各遺跡について、概略ではあるが範囲を特定することができた。当時、各遺跡の時期については畑間遺跡が中世から近世、東畑遺跡が弥生時代中期から古墳時代前期と古代から中世であることが推測された。

その後は平成11年度からの本調査によって、畑間遺跡等の様相が明らかとなってきた。既往の調査地は第4図に示した通りであるが、各年次の調査は土地区画整理事業に伴う家屋移転の進捗状況に応じて調査を実施しており、移転が進んでいなかった初期段階の調査は小規模なものとならざるを得なかった。このため調査当初は遺跡全体の様相のみならず、近隣調査区の遺構との整合を図ることすら困難であった。

発掘調査は駅前から延びる街路（駅前線）を中心に着手し始めたことから、南北方向に長く延びた畑間遺跡の中央部を東西方向に横断して調査する形となった。その後は周辺の街区道路の調査を順次実施してきた。これまでの調査では、主に縄文時代から近世にかけての幅広い時期の遺構・遺物を確認している。特筆すべき事項としては、1点目に縄文時代後期以降の縄文土器がまとまって出土したことである。畑間・東畑遺跡が立地する砂堆の形成時期を示唆する新たな知見である。2点目に弥生時代中期から古墳時代前期にかけての時期毎の生活域が分かかってきたことが挙げられる。近年は街区道路部分の調査も進んできており、遺跡内での集落の消長をたどることができるようになってきている。

なお、調査については開始時の平成11年度から19年度までは東海市教育委員会直営で調査を実施した。この間の調査成果については概要報告<sup>3)</sup>と並行して整理作業を実施し、平成25年度に報告書を刊行している<sup>4)</sup>。平成20年度以降は民間調査機関の支援を受けて調査及び報告書の刊行を行い、平成30年度には民間の開発に伴う調査が行われている。これまでに刊行した発掘調査報告書は表1のとおりである。

- 1) 『愛知県知多半島遺跡詳細分布調査報告書』愛知県教育委員会 1999
- 2) 『愛知県東海市東畑遺跡等試掘調査報告』東海市教育委員会 1997
- 3) 『伊勢湾を望む海辺の遺跡—東畑遺跡等発掘調査概要—』東海市教育委員会（永井伸明・宮澤浩司）  
『研究報告とうかい』創刊号 東海市教育委員会 2007  
『伊勢湾を望む海辺の遺跡（2）—平成19年度畑間・東畑遺跡発掘調査の概要—』東海市教育委員会（宮澤浩司）  
『研究報告とうかい』第2号 東海市教育委員会 2009
- 4) 『愛知県東海市畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告—平成11～19年度調査—』東海市教育委員会 2014





第4図 調査区配置図

調査年次	書名	発行機関	編集機関	発行年
平成8年度	愛知県東海市東畑遺跡等試掘調査報告	東海市教育委員会	東海市教育委員会	平成9年（1997年）
平成13年度	愛知県東海市畑間遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	東海市教育委員会	平成16年（2004年）
平成11年度 ～19年度	愛知県東海市畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告 ～平成11～19（1999～2007）年度調査～	東海市教育委員会	国際文化財株式会社西日本支店	平成26年（2014年）
平成20年度	愛知県東海市畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	国際航業株式会社	平成21年（2009年）
平成21年度	愛知県東海市畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	安西工業株式会社名古屋支店	平成24年（2012年）
平成22年度	愛知県東海市平成22年度畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	株式会社島田組中部営業所	平成24年（2012年）
平成23年度	愛知県東海市畑間・東畑・能雲院遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	国際文化財株式会社西日本支店	平成25年（2013年）
平成24年度	愛知県東海市平成24年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	株式会社島田組中部営業所	平成26年（2014年）
平成25年度	愛知県東海市平成25年度畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	株式会社アコード名古屋営業所	平成27年（2015年）
平成26年度	愛知県東海市平成26年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	国際文化財株式会社中部支店	平成28年（2016年）
平成27年度	愛知県東海市平成27年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	株式会社島田組中部営業所	平成29年（2017年）
平成28年度	愛知県東海市平成28年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	株式会社アコード名古屋営業所	平成30年（2018年）
平成29年度	愛知県東海市平成29年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	国際文化財株式会社中部支店	平成31年（2019年）
平成30年度	愛知県東海市平成30年度東畑遺跡発掘調査報告 ～マンション建設に伴う埋蔵文化財発掘調査～	沼澤工業株式会社	株式会社アコード名古屋営業所	平成31年（2019年）
平成30年度	愛知県東海市平成30年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	安西工業株式会社名古屋支店	令和2年（2020年）
令和元年度	愛知県東海市令和元年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	株式会社四門名古屋支店	令和3年（2021年）

表1 既往の発掘調査報告書

## 第4節 調査の方法

### 遺跡略号・調査区

遺跡略号は既往の調査を踏襲して、2020年を示す20を付し、畑間遺跡2020年度調査として「HM20」とした。図面や遺物注記などの記録はこの略号を用いている。

今回の調査地は、既往の2019年度調査区（R1-3調査区）と平成27年度調査区（27-7）に隣接する箇所（第4図）で、R1-3調査区北側の調査区を1地点（HM20-1）、南側の調査区を2地点（HM20-2）として調査を実施した。

### 遺構番号・遺構種別

遺構番号は、各地点で種別に関係無く通し番号を付けた。遺構種別は凡例に示した通りである。遺構番号は作業上の絶対性があるが、遺構種別は考古学的にも相対的であり、調査時と整理作業時で変更したものもある。よって、遺構表記は001SKのように、先に番号、後に種別を付した。また、調査時に一つの遺構としていたものを、後日分けた場合には、aやbなどアルファベット小文字を付した。なお、遺構番号は4桁で、最初の数字は地点番号を示し、以下の数字は検出順に001からの3桁の番号を付けた。1地点で検出した遺構は1001～、2地点で検出した遺構は2001～となる。なお、遺構番号を付した後に植生痕や攪乱と判明したものについては欠番とした。このため、表3・4の遺構一覧表には、欠番となった遺構番号は表示していない。

### 調査記録

遺構の図面記録は、基本的に電子平板によるデジタル測量で行ない、写真測量も併用した。重要な出土遺物は、出土状況図の作成や出土地点を座標で計測し、それぞれの遺物に取上げ番号を付けた。

写真記録は35mmサイズのカラーリバーサルフィルムと2,000万画素以上かつ撮像素子フルサイズのデジタル一眼レフカメラを使用した。調査状況の記録はデジタルカメラを使用した。

### 測量・グリッド設定（第5図）

調査における測量は2級基準点を基点とし、従来通り世界測地系座標による。また、遺物の取上げや遺構位置の記録等には、これまでと同様、5m四方のグリッドを設定した。この5mグリッドは国土交通省告示の平面直角座標系第Ⅶ系を基軸とし、7 J 10 tのように4桁のアルファベットと数字で表記される。この表記は、国土座標において1,000m×1,000mの大区画を設定し、その中で位置を示すものである。大区画をさらに100m×100mに分割し、北～南方向を1～10の数字で、西～東方向をA～Jで示す。この一例が7 Jである。次に、各100mグリッドをさらに5m×5mの小グリッドに分割し、北～南方向を1～20、西～東方向をa～tで示した。

### 遺構の検出・掘削および攪乱

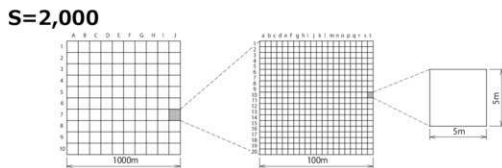
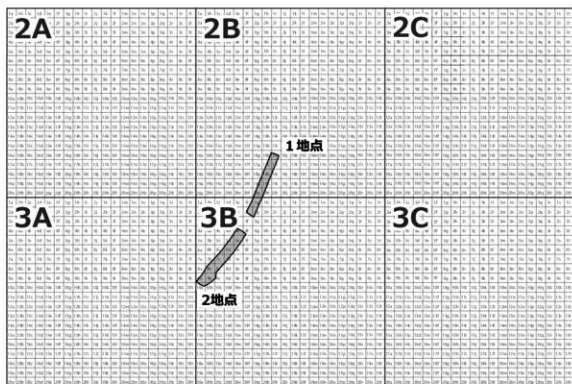
既往調査と同様に基本的には1面調査である。層序については第2章を参照されたいが、まず表土や客土などの近・現代層（Ⅰ層）と近世層（Ⅱ層）の大部分を重機によって掘削し、以下包含層（Ⅲ層）を人力によって掘り下げ、地山面（Ⅴ層上面）を調査面とした。ただし、Ⅱ層とⅢ層の分別が困難なところも多く、包含層として人力掘削したものには一部Ⅱ層も含んでいる。

### 記録整理・遺物整理・報告書作成

写真や図面等の整理業務および遺物洗浄は現地調査終了後に実施した。遺物注記は出土点数が比較的少ないことから手注記で行い、遺跡略号・グリッド・遺構番号・種別を注記した。取上げ番号を付

けた遺物は、取上げ番号も注記した。

遺物整理においては接合・復元を行ない、抽出した遺物は記録を行なった。遺物の実測は通常の手測り実測であるが、トレースはスキャナー読み取り後にデジタルトレース(Adobe社製:IllustratorCS5)で行なった。報告書の作成においては、遺構図、写真図版も含め、すべてデジタル編集(Adobe社製:PhotoshopCS5、InDesignCS5)で行なった。



第5図 調査区・グリッド位置図

## 第5節 調査の経緯

業務委託契約締結後、まずは準備作業として、仮設事務所の設置、基準点・水準点測量、調査区設定を行い、その後の令和2年(2020)6月16日から現地調査を開始した。現地調査は東海市教育委員会社会教育課職員の監督の下、行った。

調査は調査地北側に位置する1地点の表土掘削(機械掘削)から開始し、引き続き南側の2地点の表土掘削も行った。両地点とも近・現代の攪乱が地山深くまで及んでおり、特にコンクリート製建物基礎の除去・搬出に時間を要した。両地点とも遺構面の遺存状況が悪く、すでに多くの遺構が破壊されていることが予想された。表土掘削は2日間で終了し、その後は壁面整形とグリッド杭の打設、養生用の土嚢作りを行った。

6月22日から1地点の包含層掘削と遺構検出を開始した。当初の予想通り、調査区内の至る所で近・現代の攪乱がみられ、特に調査区中央部では地山深くまで大規模な攪乱が及んでいたため、安定した遺構面は調査区北端と南側を残すのみであった。こうした状況から、1地点で検出された遺構は21基と少なく、出土遺物も遺物収納コンテナ3箱程度と少ない結果となったが、中世の区画溝や大型土坑を検出するなど一定の成果を得た。

1地点の遺構掘削は6月26日に終了し、翌週の7月2日に高所作業車から全景写真撮影を行った。その後は補足調査と埋戻しを行い、翌3日に1地点の調査を終了した。

7月3日から2地点の調査を開始した。2地点においても中央部に建物基礎等の大規模な攪乱がみられ、安定した遺構面は北端と南端を残すのみであったが、常滑焼の大甕を井戸枠とした中世の井戸を検出するなど貴重な成果を得た。検出された遺構は68基で、出土遺物はコンテナ10箱程であった。なお、7月中は連日の豪雨で調査を中止せざるを得ない日が続いたが、7月29日までに遺構掘削を終え、翌30日に高所作



写真1 調査前状況



写真2 仮設事務所等設置作業



写真3 1地点南半部表土掘削作業



写真4 1地点南半部遺構掘削作業



業車から完掘後の全景写真撮影を行った。その後は、井戸の断割り等の補足調査、埋戻し作業、資材類の撤去・搬出を行い、8月3日に全ての現地作業を終了した。

出土遺物の洗浄・注記、図面・写真類の整理作業は現地調査終了後に自社施設で行い、同年12月9日付けでこれらの成果品を納入した。2次整理作業及び報告書作成業務は、新型コロナウイルス緊急事態宣言の影響で延期となったが、その後の令和4年8月18日付けで業務委託契約を締結し、出土遺物の実測・トレース等の2次整理作業、図版作成、報告書原稿執筆・編集作業などを行い、令和5年3月31日に本報告書の刊行に至った。

#### 【調査日誌抄録】

200616 (火) 晴

1地点の表土掘削(機械掘削)を開始。調査区中央部を中心に大規模な攪乱が見られ、遺構面の残りは非常に悪い。遺物も非常に少ない状況。調査区北端と南端部で東西方向の溝状遺構を検出。本日、1地点の表土掘削終了。

200617 (火) 晴

2地点の表土掘削(機械掘削)を開始。1地点と同様、広範囲に大規模な攪乱を受けており、遺構面の残りは非常に悪い。安定した遺構面は北端部と南端部にわずかに残るのみ。

200622 (月) 曇

1地点の遺構検出、北東壁(北端)・南東壁の土層断面写真撮影を行った。北端部は水道管理設時に遺構面下約80cmまで攪乱されており、以下に遺構は残存していないと判断。

200623 (火) 晴

1地点北端部の1005SD、1004・1006・1007SKの掘削と完掘写真撮影を行った。1005SDは東西方向の溝状遺構で、山茶碗、戦国期の土師器羽釜等を含む。轉属時期は中世と思われる。1006・1007SKは上層に近世後期の陶磁器類、貝類等の食物残渣を含む産土坑。1地点南東壁(北半部)の土層断面写真撮影を行った。

200624 (火) 晴

1地点南東壁(南半部)の土層断面写真撮影、調査区南半部の遺構検出写真撮影を行った。遺構平面測量後に遺構掘削を開始。1011SKの底面で扁平な河原石が出土。柱穴に伴う根石の可能性もあるが柱痕跡は確認できない。1016・1017・1018・1019SKはいずれも性格不明の浅い土坑。1地点の遺構掘削に併行して、2地点の壁面整形を開始。

200625 (木) 曇時々雨

1地点の遺構掘削、個別遺構の完掘写真撮影を行った。調査区南端で検出した大型遺構1020SXの掘削を行った。出土遺物に古瀬戸、山茶碗、常滑焼の甕を含む。1020SXを掘り込む1021SKは戦国期の土坑の可能性が高い。上部の窪みに破砕された貝殻を含む。

200626 (金) 晴ち雨

1地点南端の1020SXの掘削を行った。上層から山茶碗、常滑焼の壺・甕、中・下層から山茶碗などが出土。当初、溝状遺構かと思われたが、土坑状の遺構になる可能性が高い。



写真5 1地点中央部遺構掘削作業



写真6 1地点南半部清掃作業



写真7 2地点北半部表土掘削作業



写真8 2地点中央部遺構検出作業

200629 (月) 晴

1020SX 出土遺物の点上げ、調査区南東壁(南端部)の土層断面写真撮影を行った。

200701 (水) 曇

明日の全景写真撮影に向けて1地点の全体清掃を行った。

200702 (木) 晴時々曇

1 地点完掘後の全景写真撮影(高所作業車)を行った。全景写真撮影後、1011SK 根石の出土状況写真撮影・完掘状況写真撮影、1020SX の下層確認等の補足調査を行った。本日を以て、1地点の調査は終了。2地点の掘削掘削を行った。

200706 (月) ~ 0710 (金) 雨

連日の豪雨により現場作業は中止。排水作業に追われる。図面の編集作業を進める。

200715 (水) 曇

2 地点北半部の掘削掘削、包含層掘削、遺構検出を行った。随所に大規模な掘削がみられるため、再度重機を投入して追加の掘削掘削を行った。北半部で土坑、溝状遺構、ピット等を検出した。

200716 (木) 晴時々曇

2 地点北半部の遺構掘削を開始。周辺の既往調査と同様、茶褐色を主体とした埋土の遺構は近世、黒色味を帯びた埋土の遺構は中世に属する遺物が出土する傾向がある。現段階で建物として復元できる遺構は認められないが、柱穴の可能性の高いピットが複数認められる。

200717 (金) 曇時々雨

2 地点北半部南東壁の土層断面写真撮影を行なった。

200720 (月) 晴時々曇

2 地点北半部から中央部にかけての遺構掘削を行った。2028SK から継着した銭貨が出土。銭貨は判読できず。墓になるか不明。2030SX は竅穴状遺構と思われる。粘土土坑 2023SK はこの竅穴状遺構に伴う可能性が高い。常滑焼の大甕が埋没された2014SE は中世の井戸になる可能性が高い。

200722 (水) 晴時々曇

調査区南半部の遺構検出を行った。南半部も予想以上に掘削が多く遺構面の残りが悪いが、複数の遺構が重複しており、北半部に比べて遺構密度は高い状況。

200727 (月) 曇時々雨

2 地点南端部の遺構掘削を行った。時期の判明する遺構の多くが中・近世の遺構で、現段階で古代に遡る遺構は認められない。2045SP 掘削から古瀬戸の小皿が出土。

200728 (火) 曇

昨日に引き続き2地点南端部の遺構掘削を行った。混入品だが、中・近世の遺構内に弥生時代後期から古墳時代初期の土師器が少量含まれており、この時期の遺構が周辺に分布する可能性が高い。2048SK 付近は大型土坑が複数重複した状態で、2055SE は平面形などから井戸の可能性が高いと考えられる。2035SP で腐植した柱根が出土。

200729 (水) 曇

2048SK は井戸枠抜き取りに伴う土坑と判明。2055SE の井戸枠材は常滑焼の赤物大甕で、帰属時期は近世と考えられる。

200730 (木) 晴時々曇

2 地点完掘後の全景写真撮影を行った。写真撮影後、2014SE の断削り調査を行い、現地表面下約1.7mで井戸底とみられる地山を確認した。井戸枠内から縄文時代中期の深鉢片が出土した。

200731 (金) 晴

2 地点の補足測量と図面確認後、埋戻し作業を行なった。本日を以て、現地調査を終了した。

200803 (月) 曇

仮設事務所、資材類の撤去・搬出を終了。本日を以て、全ての現地作業を終了した。



写真9 2地点北半部 2014SE 掘削作業



写真10 2地点南半部測量作業



写真11 2地点全景写真撮影(高所作業車)



写真12 2地点埋戻し作業

## 第2章 遺構

### 第1節 遺構の概要と基本層序

#### 1. 遺構の概要

調査地は畑間遺跡が立地する第1砂堆の南西端部、大田川旧河道に面した箇所にあたる（第4図）。今回の調査区は、令和元年度調査区（R1-3区）北側の1地点と南側の2地点の2箇所である。調査前は家屋移転後の更地（平地）で、調査前の地表面の標高は1地点が3.8m、2地点が3.6mを測る。

遺構は1地点で21基、2地点で68基の計89基を検出した。内訳は柱穴・ピット17基、土坑57基、井戸3基、溝状遺構10条、性格不明遺構が2基である。1・2地点ともに遺構面の半分以上が近・現代の攪乱で破壊されていたため、遺構の遺存状況が悪く、検出できた遺構は少ない。遺構の帰属時期が判明するものでは、中世の遺構が12基、近世の遺構が23基、また、詳細な時期は不明だが、埋土の特徴などから中世以降と思われる遺構が54基ある。主要な遺構として、中世の区画溝1005SD、常滑焼大甕を井戸枠とした中世の井戸2014SEがある。

出土遺物は遺物整理用コンテナ（24ℓ）で13箱分出土した。このうちの8箱が井戸枠に用いられた中世常滑焼大甕で、他に土師器、山茶碗、瓦器、中・近世の陶磁器が4箱、また、縄文土器、弥生土器、古式土師器、土製品・石製品・金属製品、貝殻・獣骨等の自然遺物が1箱分ある。

#### 2. 基本層序と遺構検出面

基本層序は1・2地点とも共通しており、本遺跡の既往調査で示されている基本層序にほぼ一致する。調査区内の基本層序は概ね以下のⅠ～Ⅴ層に大別できる（第6図）。

Ⅰ層：現表土・盛土・耕作土、現代の攪乱層を含む堆積層。

Ⅱ層：近世の耕作土・整地層、中・近世の遺物や貝殻等の食物残滓を含む堆積層で、調査区のほぼ全域に分布する。

Ⅲ層：暗褐色細～中粒砂からなる遺物包含層で、中世以前に形成された堆積層の可能性が高い。1地点では調査区北側から中央部、2地点では標高の低い調査区中央部と調査区南端の北西壁付近にわずかに残存するのみ。Ⅰ・Ⅱ層の攪乱と削平により大半が失われた可能性が高い。

Ⅳ層：縄文～弥生時代の遺物包含層で、今回の調査区では確認できなかった。

Ⅴ層：にぶい黄褐色細～中粒砂からなる砂堆を形成する堆積層、いわゆる地山である。

既往の調査例から、遺構面は少なくとも2面以上存在することが判明しており、本来であれば古代以前の遺構面であるⅤ層上面の他、中世以降の遺構面であるⅢ層上面においても遺構検出を行うべきであるが、Ⅲ層と遺構埋土の識別が極めて困難であることや今回の調査区内では基本的にⅠ・Ⅱ層直下でⅤ層の地山が露出することから、遺構検出は地山上面のみで行った。なお、両地点ともにⅠ・Ⅱ層の削平・攪乱が地山面まで及んでいるため、旧地形を正確に反映したものは言えないが、地山面の標高は1地点の北端が3.4mと最も高く、2地点北側の井戸2014SE付近が3.1mと最も低い。大局的にみれば、砂堆中心部に近い調査地北東側から南西側に向けて緩やかに下降したのち、2地点の南端部から旧河道に向けて急激に降る地形になると思われる。



第6図 基本層序模式図



## 第2節 1地点の遺構

### 1. 概要 (第7・8図)

1地点で検出した遺構は、柱穴・ピット3基、土坑16基、溝1条、性格不明の大型遺構1基の計21基である。遺構面の半分以上が近・現代の攪乱で破壊・削平されていたため、検出できた遺構は少ない。また、調査範囲も限られるため、掘立柱建物などの建物跡に復元できた柱穴は認められなかった。

時期別に見ると、中世の遺構が3基、近世の遺構が6基あり、この他、詳細な時期は不明ながら、掘り込み面や埋土の特徴からみて、中世以降と思われる遺構が12基ある。なお、中世の遺構は、掘削深度が深いもののみが残存することから、浅い遺構は削平された可能性が高い。主な遺構として、調査区北端で検出した中世区画溝(1005SD)と南端で検出した中世の大型遺構(1020SX)がある。

出土遺物には、弥生土器、土師器、山茶碗、中世陶器(古瀬戸・常滑焼)、近世陶磁器、瓦器、土製品(管状土錘・加工円盤)、石製品(石鍋)、貝殻・獣骨等の自然遺物があり、遺物整理用コンテナで2箱分出土した。そのうちの約9割が中・近世の遺物である。以下、遺構種別ごとに報告する。

### 2. 柱穴・ピット

#### 1001SP (第9図)

調査区北東部の南東壁際で検出した柱穴である。断面観察では柱痕跡は確認できなかったが、断面形などから柱穴と判断した。規模は長軸0.35m、短軸0.13m以上、深さは約0.5mを測る。断面形はU字形を呈する。遺物は出土しなかったが、Ⅲ層上部から掘り込まれている点や埋土の特徴からみて、帰属時期は近世と思われる。

#### 1018SP (第10図 写真図版4-6)

調査区南端の南東壁際で検出した柱穴で、規模は長軸0.5m、短軸0.3m以上、深さは約0.3mを測る。断面形は碗形を呈する。柱痕跡の平面形は円形で、直径は約20cmを測る。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴からみて、遺構の帰属時期は中世以降と思われる。重複関係から1019SKに後出する。

### 3. 土坑

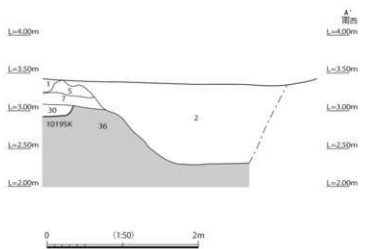
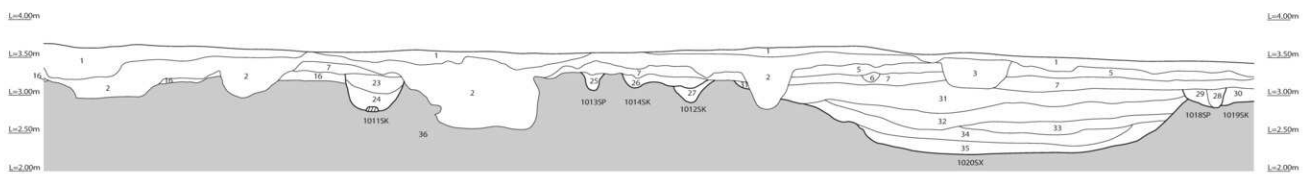
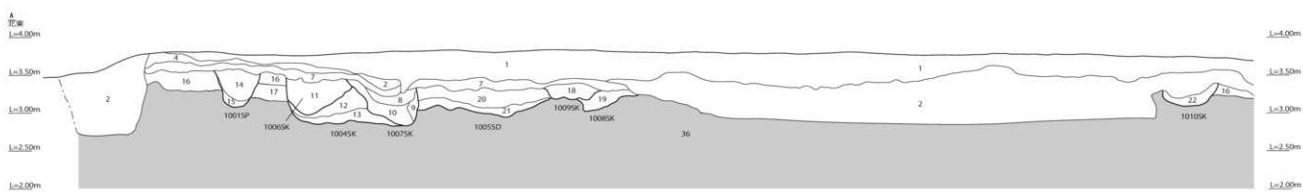
土坑は16基検出した。廃棄土坑と考えられる1006・1007SK以外に性格のわかる土坑は認められなかった。なお、土坑と分類したものの中にも、掘立柱建物などを構成する柱穴が含まれる可能性があるが、柱痕跡が確認できないものや、断面形状から柱穴と考えにくいものについては、便宜上、土坑に分類した。

#### 1002・1003SK (第9図 写真図版2-2~4)

調査区北端で検出した平面楕円形もしくは円形の土坑である。規模は1002SKが長軸0.5m、短軸0.42m、深さ約0.1m、1003SKが長軸0.37m、短軸0.23m以上、深さ約0.1mを測る。断面形はいずれも皿形を呈する。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴からみて、遺構の帰属時期は中世以降と思われる。重複関係から1002SKが後出する。

#### 1004SK (第11図 写真図版3-1・2)

調査区北側の南東壁際で検出した土坑である。1006・1007SKに破壊されているため全容は不明だが、規模は幅1.5m、深さは0.6mを測る。断面形は箱形を呈する。埋土は暗褐色あるいは黒褐色細粒砂～中粒砂の2層で、下層から近世のロクロ成形土師皿(29・30)が出土した。出土遺物から遺構の帰属時期は18世紀代と考えられる。

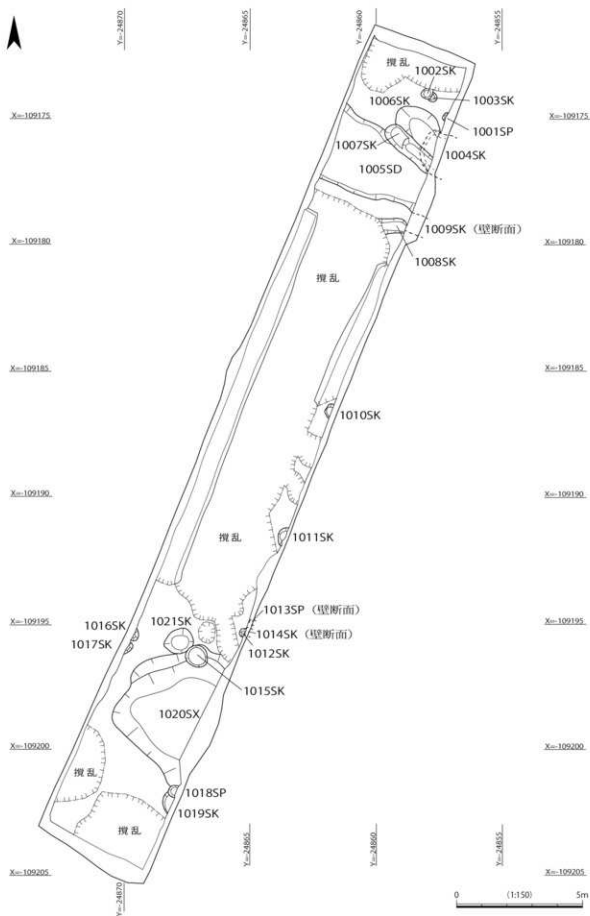


1. 表土 1層
2. 灰土 1層
3. 黄褐色10YR3/4細粒砂～中粒砂 灰黄褐色10YR4/2粘土質シルトを含む 破砕貝を多く含む 1層
4. 黄褐色10YR3/2細粒砂 黄粒の炭化物を含む 田舎土 1層
5. 黄褐色10YR3/3細粒砂 1cm以下の礫を少量含む 1層
6. 黄褐色10YR3/3細粒砂～中粒砂 破砕貝を多く含む 耕作溝
7. 黄褐色10YR3/2細粒砂 黄粒の炭化物を含む 1層
8. 黄褐色10YR3/3細粒砂～中粒砂 貝殻・陶磁器類を少量含む 1007SK
9. 黄褐色10YR3/3細粒砂 1007SK
10. 黄褐色10YR3/4細粒砂～中粒砂 黄粒の炭化物を含む 貝殻・陶磁器類を含む 1007SK
11. 黄褐色10YR3/4細粒砂～中粒砂 黄粒の炭化物を含む 貝殻・陶磁器類を多く含む 1006SK
12. 黄褐色10YR3/2細粒砂 黄粒の炭化物を含む 1004SK
13. 黄褐色10YR3/4細粒砂～中粒砂 黄粒の炭化物を含む 1004SK
14. 黄褐色10YR2/2細粒砂 炭化物を含む 1001SP
15. 黄褐色10YR3/3細粒砂 地山ブロックを含む 1001SP
16. 黄褐色10YR3/3細粒砂 炭化物を少量含む 遺物も含層 1層
17. 黄褐色10YR3/4細粒砂～中粒砂 遺物も含層 1層
18. 灰黄褐色10YR4/3細粒砂 破砕貝を多く含む 1009SK

19. 灰黄褐色10YR5/4細粒砂～中粒砂 地山ブロックを破砕貝を含む 1008SK
20. 黄褐色10YR3/2細粒砂 炭化物を少量含む 1005SD
21. 黄褐色10YR3/3細粒砂～中粒砂 炭化物を少量含む 1005SD
22. 灰黄褐色10YR4/2細粒砂 炭化物を含む 1010SK
23. 黄褐色10YR3/3細粒砂 炭化物を少量含む 1cm以下の礫を少量含む 1011SK
24. 黄褐色10YR3/3細粒砂～中粒砂 炭化物を少量含む 1011SK
25. 褐色10YR4/4細粒砂 1013SP
26. 褐色10YR4/4細粒砂 1014SK
27. 灰黄褐色10YR5/4細粒砂～中粒砂 1012SK
28. 褐色10YR4/4細粒砂 1015SP
29. 灰黄褐色10YR5/4細粒砂 1018SP
30. 灰黄褐色10YR4/3細粒砂～中粒砂 1cm以下の礫を少量含む 1019SK
31. 黄褐色10YR3/3細粒砂 炭化物を少量含む 1020SK
32. 褐色10YR4/4細粒砂 1020SK
33. 灰黄褐色10YR4/3細粒砂 1020SK
34. 灰黄褐色10YR5/4細粒砂 1020SK
35. 灰黄褐色10YR4/3細粒砂～中粒砂 1cm以下の礫を少量含む 1020SK
36. 灰黄褐色10YR6/3細粒砂 1cm以下の礫を少量含む 地山 V層



第7図 1地点 南東壁土層断面図



第8図 1地点遺構平面図

第2章 遺構  
第2節 1地点の遺構

#### 1006SK (第11図 写真図版3-1・2)

調査区北側の南東壁際で検出した平面楕円形の土坑である。規模は長軸2.3m以上、短軸1.4m以上、深さは約0.5mを測る。断面形は碗形を呈する。埋土は食物残渣の貝殻類を多く含む暗褐色細粒砂～中粒砂で、埋土から土師器の皿(28・46)・焙烙(32)、瓦器鍋(33・34)、瀬戸登窯期の陶磁器(36・38～42)、常滑焼の赤物大甕(45)、加工円盤(53・54)等が出土した。出土遺物から18世紀後半から19世紀中頃にかけての廃棄土坑と考えられる。

#### 1007SK (第11図 写真図版3-1・2)

1004・1006SKに後出する平面長楕円形の土坑である。規模は長軸2.4m以上、短軸0.7m、深さは約0.5mを測る。断面形は碗形を呈する。埋土は貝殻類を含む暗褐色細粒砂～中粒砂で、瀬戸登窯期の播鉢(43・44)等が出土した。出土遺物から18世紀代の廃棄土坑と考えられる。

#### 1008SK (第9図 写真図版2-5)

調査区北側の南東壁沿いで検出した遺構で、溝の残欠の可能性もあるが、東端部が急な立ち上がりを見せることから土坑と判断した。規模は長軸1.1m以上、短軸0.6m、深さ約0.25mを測る。断面形は片側が傾斜の緩やかな逆台形状を呈する。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から遺構の帰属時期は中世以降と思われる。重複関係から1009SK(南東壁断面で検出)に先行する。

#### 1010SK (第9図 写真図版4-1)

調査区中央部の南東壁際で検出した土坑で、規模は長軸0.7m、短軸0.25m以上、深さは約0.3mを測る。断面形は碗形を呈する。遺物は出土しなかったが、Ⅲ層上部から掘り込まれていることや埋土の特徴から、遺構の帰属時期は中世以降と考えられる。

#### 1011SK (第9図 写真図版4-2)

調査区中央部の南東壁際で検出した土坑で、規模は長軸0.75m、短軸0.3m以上、深さは約0.5mを測る。断面形はU字形を呈する。底面中央で長さ18cm、厚さ3cm程の扁平な河原石が出土した。柱穴根石の可能性が高いが、柱痕跡は確認できなかった。河原石以外に遺物は出土しなかったが、Ⅲ層上部から掘り込まれていることや埋土の特徴から、遺構の帰属時期は中世以降と考えられる。

#### 1012SK (第10図)

調査区中央部の南東壁際で検出した平面円形もしくは楕円形の土坑で、規模は長軸0.35m、短軸0.22m以上、深さは約0.3mを測る。断面形は上方が開くU字形を呈する。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から遺構の帰属時期は中世以降と思われる。重複関係から1014SK(南東壁断面で検出)に先行する。

#### 1015SK (第8図 写真図版4-4)

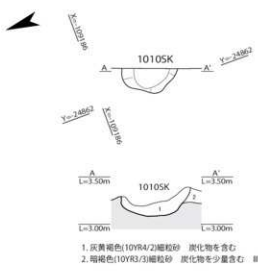
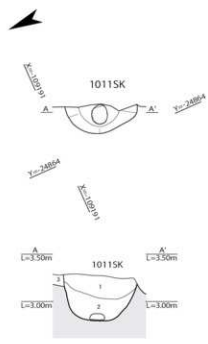
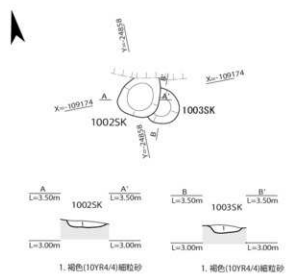
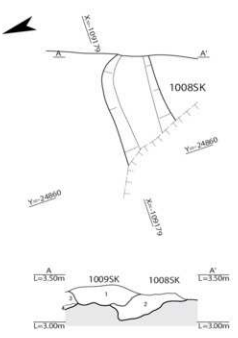
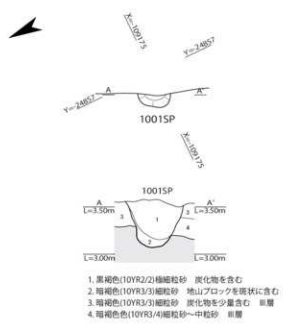
調査区南側の1020SX上面で検出した平面円形の土坑で、規模は直径0.9m、深さは約0.25mを測る。断面形は碗形を呈する。埋土から近世の土師器の細片等が出土した。詳細な時期は不明だが、出土遺物や埋土の特徴から遺構の帰属時期は近世と考えられる。重複関係から1020SX、1021SKに後出する。

#### 1016SK (第10図 写真図版4-5)

調査区南側の北西壁際で検出した土坑で、規模は長軸0.5m、短軸0.2m以上、深さは約0.5mを測る。断面形は上方が開くU字形を呈する。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から遺構の帰属時期は中世以降と思われる。重複関係から1017SKに先行する。

#### 1017SK (第10図 写真図版4-5)

調査区南側の北西壁際で検出した土坑で、規模は長軸0.54m、短軸0.18m以上、深さは約0.3m



第9図 1001SP、1002・1003・1008～1011SK

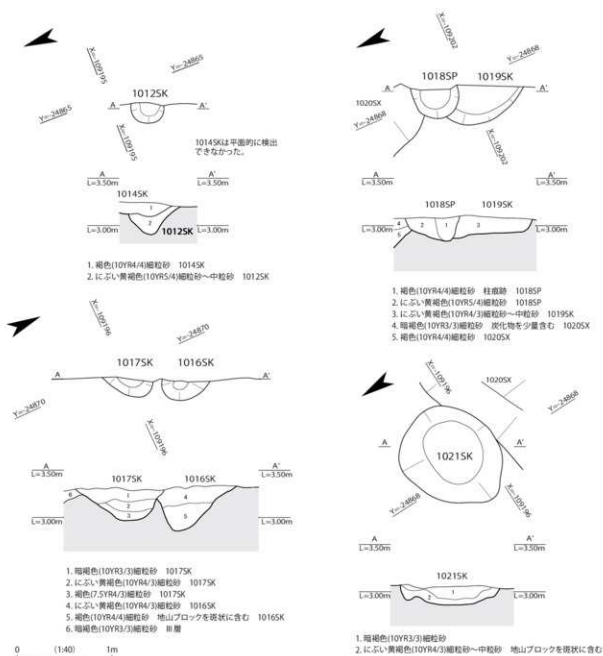
を測る。断面形は碗形を呈する。埋土から近世土師器の焙烙が出土した。出土遺物から遺構の帰属時期は近世と考えられる。重複関係から 1016SK に後出する。

### 1019SK (第10図 写真図版4-7)

調査区南端の南東壁際で検出した土坑で、規模は長軸 0.7m 以上、短軸 0.4m 以上、深さは約 0.2m を測る。断面形は皿形を呈する。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から遺構の帰属時期は中世以降と思われる。重複関係から 1018SP に先行する。

### 1021SK (第10図 写真図版4-8)

調査区南側で検出した平面楕円形の土坑で、規模は長軸 1.2m、短軸 1.0m、深さは約 0.2m を測る。断面形は浅い碗形を呈する。埋土から大窩期の播鉢等が出土した。出土遺物から遺構の帰属時期は 15 世紀末から 16 世紀代と考えられる。重複関係から 1020SX に後出し、1015SK に先行する。



第10図 1012・1016・1017・1019・1021SK、1018SP

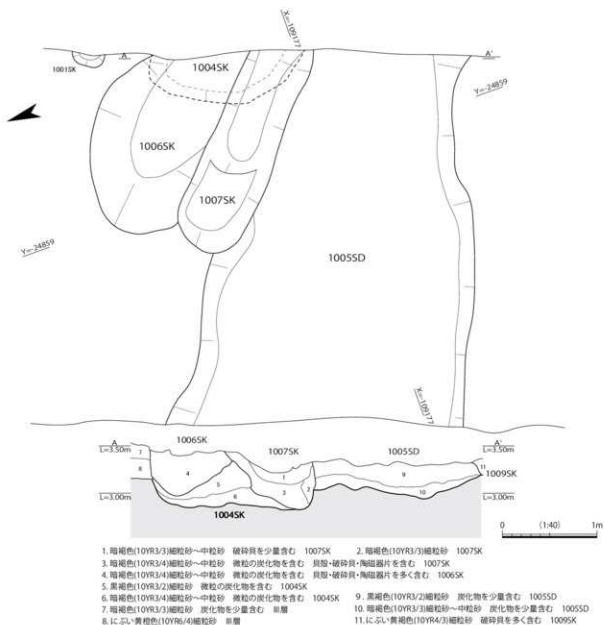
#### 4. 溝

##### 1005SD (第11図 写真図版3-1)

調査区北側で検出した北西-南東方向に延びる直線的な溝で、規模は幅3.2m、長さ3.9m以上、深さは最大で0.4mを測る。横断面形は皿状を呈する。主軸方位はN-65°-Wである。溝底のレベルは標高3.0m前後で、検出した範囲内で溝底レベルに大きな比高差は見られなかった。

埋土は上層が黒褐色細粒砂、下層が暗褐色細粒砂～中粒砂である。下層から尾張型山茶碗第8型式期の山茶碗、常滑窯編年第6b・7型式期の甕、上層で16世紀代の土師器の内耳鍋が出土した。13世紀後葉から14世紀前葉頃に開削され、その後に位置を踏襲して再掘削された可能性が高い。

既往調査では1005SDに直接つながる溝は検出されていないが、溝幅が3.2mと規模が大きいことや隣接する30-3地点の中世区画溝(3170SD等)<sup>5)</sup>及び第1砂堆南西部の中世区画溝群<sup>6)</sup>(第37図)の主軸方位に直交することから、屋敷地を分ける溝など、何らかの区画に伴う溝の可能性が高い。



第11図 1005SD、1004・1006・1007SK

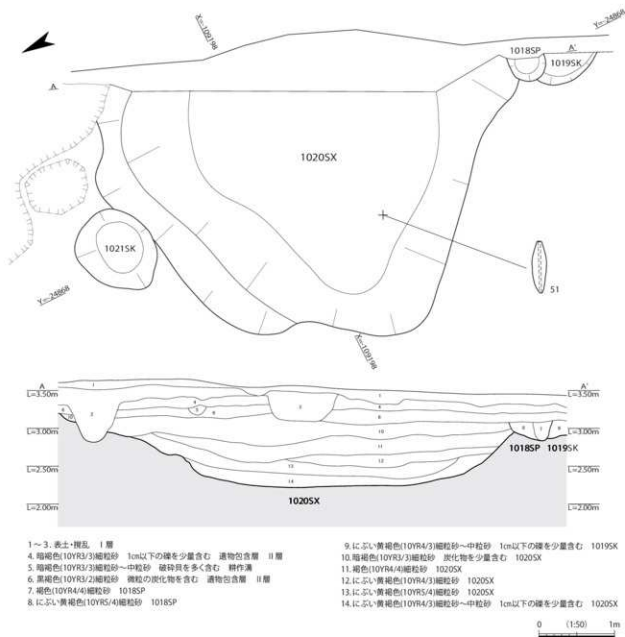
## 5. 性格不明遺構

### 1020SX (第12図 写真図版5)

調査区南側の南東壁際で検出した大型の遺構である。調査区外に連続するため全容は不明だが、溝状とならずに土坑状に収束する可能性が高い。規模は長軸 5.1m 以上、短軸 4.2m 以上、深さは最大で約 1.0m を測る。底面は平坦である。断面形は北側の肩が傾斜の緩やかな逆台形を呈する。

埋土は上層が炭化物を含む暗褐色細粒砂、中層が褐色細粒砂、下層がにぶい黄褐色細粒砂～中粒砂の自然堆積である。中～下層から古瀬戸後Ⅳ期新段階に相当する時期の緑釉小皿・鉢皿、15世紀代の東濃型山茶碗、常滑焼大甕、上層から土師質の管状土鍾(47・51)、古墳時代前期の加飾壺(4)等が出土した。出土遺物から遺構の帰属時期は概ね 15世紀代と考えられる。

遺構の性格は不明だが、湧水層に達していないため、井戸や井戸枠の抜き跡とは考えにくい。底面が平坦であるため、作業場などとして使用された竪穴状遺構、あるいは水溜り施設の可能性も考えられる。



第12図 1020SX



## 第3節 2地点の遺構

### 1. 概要

1地点と同様、遺構面の半分以上が近・現代の攪乱で破壊されていたため、検出できた遺構は本来の数の半数にも満たないと思われるが、柱穴・ピット14基、土坑41基、溝9条、井戸3基、性格不明遺構1基の計68基の遺構を検出した。なお、調査範囲が限られており、攪乱範囲も広いことから、掘立柱建物や櫛列などの建物跡に復元できた柱穴・ピットは確認できなかった。1地点に比べて遺構密度が高いが、これは、1地点に比べて遺構面（遺構検出面）の標高がわずかに低いため、Ⅱ層あるいはⅠ層の削平が地山深くまで及ばなかつたことに起因したものであろう。

遺構を時期別にみると、中世の遺構が9基、近世の遺構が17基あり、その他、詳細な時期は不明だが、掘り込み面や遺構埋土の特徴から中世以降と思われる遺構が42基ある。古代以前の遺構は検出されなかった。主な遺構として、常滑焼の大甕を井戸枠に用いた中世の井戸（2014SE）、常滑焼の赤物大甕を井戸枠に用いた近世の井戸（2055SEa）、粘土貼り土坑（2023SK）等がある。

出土物には、縄文土器、弥生土器、古式土師器、土師器、山茶碗、中世陶器（古瀬戸・常滑焼）、近世陶磁器、土製品（管状土錘・加工円盤・陶丸）、金属製品（銭貨）、貝殻・獣骨等の自然遺物があり、遺物収納コンテナで11箱分出土した。このうちの9割以上が中・近世の遺物である。

以下、遺構種別ごとに報告する。

### 2. 柱穴・ピット

先述のように、掘立柱建物や櫛列等に復元できた柱穴・ピットは確認できなかったが、柱痕跡や断面形状から柱穴と考えられる遺構を14基検出した。根石や礎板を伴うものは認められなかった。

#### 2006SP（第16図 写真図版8-6）

調査区北側で検出した平面楕円形の柱穴である。規模は長軸0.5m、短軸0.4m、深さは約0.2mを測る。断面形状はU字形を呈する。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から帰属時期は中世以降と思われる。

#### 2020SP（第15図）

調査区北東の南東壁際で検出した柱穴である。規模は長軸0.2m、短軸0.1m以上、深さは0.4mを測る。断面形状はU字形を呈する。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から帰属時期は中世以降と思われる。

#### 2039・2040SP（第15図 写真図版13-2）

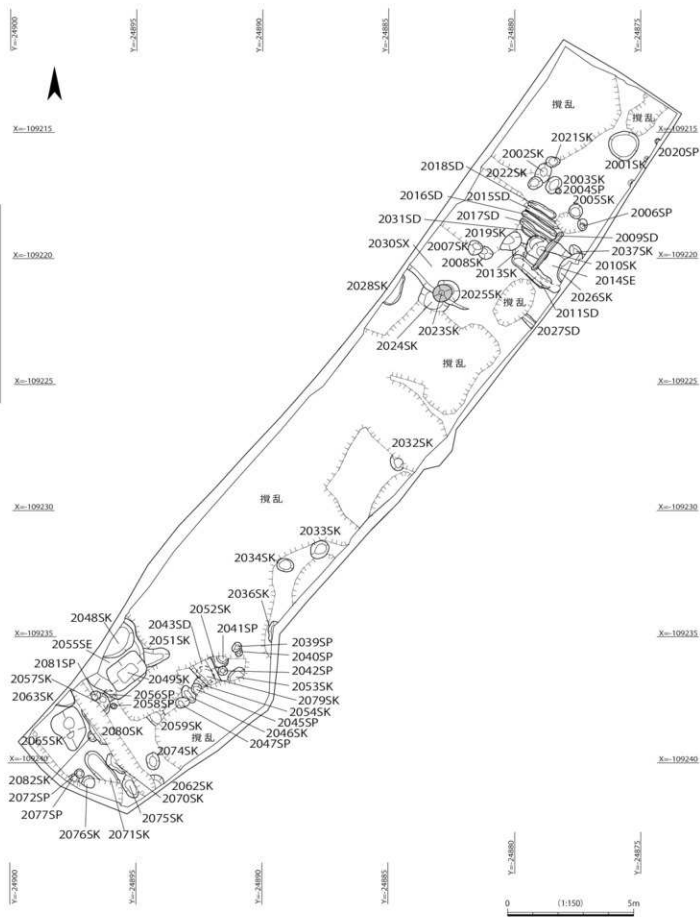
調査区南側で検出した平面楕円形の柱穴である。2039SPの規模は長軸0.4m、短軸0.3m以上、深さは約0.1mを測る。断面形状は碗形を呈する。底面で直径10cm程の柱根（丸柱）が出土した。2040SPの規模は長軸0.35m、短軸0.2m以上、深さは約0.2mを測る。断面形状は碗形を呈する。重複関係から2039SPが後出する。2039・2040SPともに遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から遺構の帰属時期は中世以降と思われる。柱根が残る2039SPは近世に属する可能性が高い。

#### 2041SP（第15図）

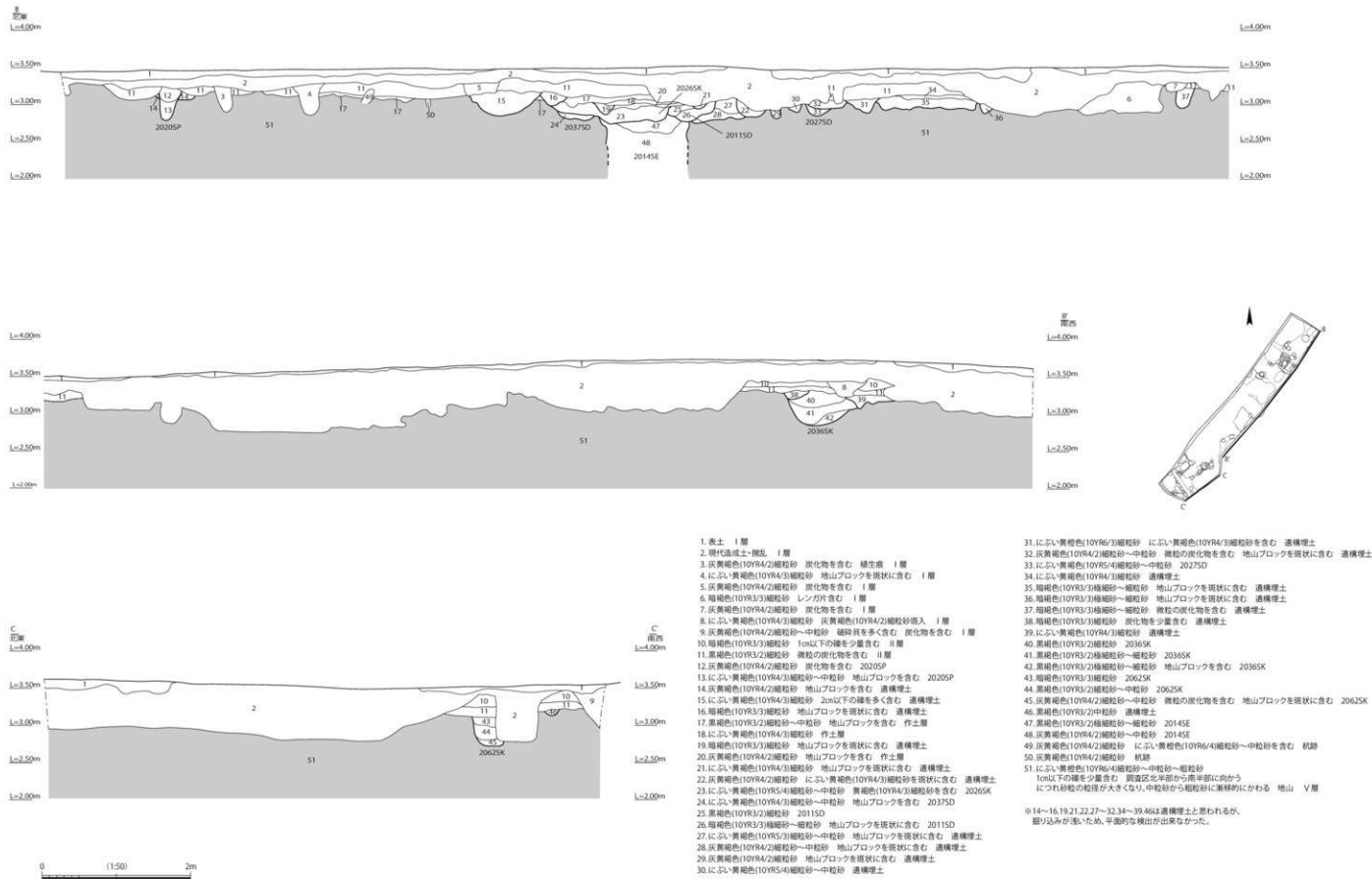
調査区南側で検出した柱穴である。規模は長軸0.45m、短軸0.25m以上、深さは0.15mを測る。断面形状は碗形を呈する。断面中央部の窪みは二段掘りあるいは柱の沈み込みによる痕跡と思われ、断面図第2層は柱痕跡の可能性が高い。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から遺構の帰属時期は中世以降と思われる。重複関係から2052SKに後出する。

#### 2042SP（第20図 写真図版13-3）

調査区南側で検出した平面円形の柱穴で、規模は直径約0.34m、深さは約0.15mを測る。断面形状

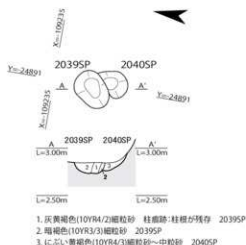
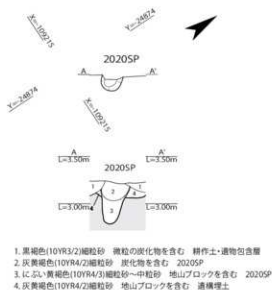


第13図 2地点遺構平面図



第14図 2地点 南東壁土層断面図

1. 表土 1層
  2. 礫状凝土・凝灰 1層
  3. 灰黄色10YR4/2細砂 炭化物を含む 積土層 1層
  4. 13.に多い黄褐色10YR4/3細砂 地山ブロックを混状に含む 1層
  5. 灰黄色10YR4/2細砂 炭化物を含む 1層
  6. 暗褐色10YR3/3細砂 レンガ片を含む 1層
  7. 灰黄色10YR4/2細砂 炭化物を含む 1層
  8. 13.に多い黄褐色10YR4/3細砂 灰黄色10YR4/2細砂混入 1層
  9. 灰黄色10YR4/2細砂 中粒砂 磁器片を含む 炭化物を含む 1層
  10. 暗褐色10YR3/3細砂 1cm以下の礫を少量含む 1層
  11. 黒褐色10YR3/2細砂 炭化炭化物を含む 1層
  12. 灰黄色10YR4/2細砂 炭化物を含む 2025P
  13. 13.に多い黄褐色10YR4/3細砂 中粒砂 地山ブロックを含む 2025P
  14. 灰黄色10YR4/2細砂 地山ブロックを含む 遺構埋土
  15. 13.に多い黄褐色10YR4/3細砂 2cm以下の礫を多量含む 遺構埋土
  16. 暗褐色10YR3/3細砂 地山ブロックを混状に含む 遺構埋土
  17. 黒褐色10YR3/2細砂 中粒砂 地山ブロックを含む 作土層
  18. 13.に多い黄褐色10YR4/3細砂 作土層
  19. 暗褐色10YR3/3細砂 地山ブロックを混状に含む 遺構埋土
  20. 灰黄色10YR4/2細砂 地山ブロックを含む 作土層
  21. 13.に多い黄褐色10YR4/3細砂 地山ブロックを混状に含む 遺構埋土
  22. 灰黄色10YR4/2細砂 13.に多い黄褐色10YR4/3細砂を混状に含む 遺構埋土
  23. 13.に多い黄褐色10YR4/3細砂 黄褐色10YR4/3細砂を含む 2025K
  24. 13.に多い黄褐色10YR4/3細砂 中粒砂 地山ブロックを含む 2037SD
  25. 黒褐色10YR3/2細砂 2011SD
  26. 暗褐色10YR3/3細砂 中粒砂 地山ブロックを混状に含む 2011SD
  27. 13.に多い黄褐色10YR4/3細砂 中粒砂 地山ブロックを混状に含む 遺構埋土
  28. 灰黄色10YR4/2細砂 中粒砂 地山ブロックを混状に含む 遺構埋土
  29. 灰黄色10YR4/2細砂 中粒砂 地山ブロックを混状に含む 遺構埋土
  30. 13.に多い黄褐色10YR4/3細砂 中粒砂 遺構埋土
  31. 13.に多い黄褐色10YR4/3細砂 13.に多い黄褐色10YR4/3細砂を含む 遺構埋土
  32. 灰黄色10YR4/2細砂 中粒砂 炭化炭化物を含む 地山ブロックを混状に含む 遺構埋土
  33. 13.に多い黄褐色10YR4/3細砂 中粒砂 2027SD
  34. 13.に多い黄褐色10YR4/3細砂 遺構埋土
  35. 暗褐色10YR3/3細砂 中粒砂 地山ブロックを混状に含む 遺構埋土
  36. 暗褐色10YR3/3細砂 中粒砂 地山ブロックを混状に含む 遺構埋土
  37. 暗褐色10YR3/3細砂 中粒砂 炭化炭化物を含む 遺構埋土
  38. 暗褐色10YR3/3細砂 炭化物を少量含む 遺構埋土
  39. 13.に多い黄褐色10YR4/3細砂 遺構埋土
  40. 黒褐色10YR3/2細砂 2036K
  41. 黒褐色10YR3/2細砂 中粒砂 2036SK
  42. 黒褐色10YR3/2細砂 中粒砂 地山ブロックを含む 2036SK
  43. 暗褐色10YR3/3細砂 2062SK
  44. 黒褐色10YR3/2細砂 中粒砂 2062SK
  45. 灰黄色10YR4/2細砂 中粒砂 炭化炭化物を含む 地山ブロックを混状に含む 2062SK
  46. 黒褐色10YR3/2中粒砂 遺構埋土
  47. 黒褐色10YR3/2細砂 中粒砂 20145E
  48. 灰黄色10YR4/2細砂 中粒砂 20145E
  49. 灰黄色10YR4/2細砂 13.に多い黄褐色10YR6/4細砂 中粒砂を含む 砂跡
  50. 灰黄色10YR4/2細砂 砂跡
  51. 13.に多い黄褐色10YR6/4細砂 中粒砂 中粒砂 1cm以下の礫を少量含む 断面北縁部から平坦部にかけて 1つづつ粒の径径が大きくなり、中粒砂から粗粒砂に漸移的にかわる 地山 V層
- ◎14～16, 19, 21, 22, 27～32, 34～39, 46は遺構埋土と思われるが、掘り込みが浅いため、平坦な層が出なかった。



第15図 2020・2039～2041SP、2052SK

は碗形を呈する。中央部で直径10cm程の円形の柱痕跡を確認した。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から遺構の帰属時期は中世以降と思われる。

#### 2045SP (第20図 写真図版13-5・6)

調査区南側で検出した柱穴である。規模は長軸0.4m、短軸0.35m以上、深さは約0.1mを測る。断面形は碗形を呈する。中央部で直径10cm程の円形の柱痕跡を確認した。柱穴掘形から古瀬戸後Ⅲ期あるいは後Ⅳ期に相当する緑釉小皿(19)が出土した。遺構の帰属時期は15世紀中葉から後葉と考えられる。重複関係から2046・2054SKに後出する。

#### 2047SP (第20図)

調査区南側で検出した平面楕円形の柱穴で、規模は長軸0.6m以上、短軸0.4m、深さは約0.2mを測る。断面形は中央部が窪んだ碗形を呈する。断面観察では柱痕跡を認識できなかったが、中央部の窪みは柱の沈み込みによる影響であろう。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から遺構の帰属時期は中世以降と思われる。重複関係から2046SKに後出する。

#### 2056SP (第21図)

調査区南側で検出した平面楕円形の柱穴である。規模は長軸0.5m以上、短軸0.4m以上、深さは約0.2mを測る。断面形は碗形を呈する。中央部で直径10cm程の円形の柱痕跡を確認した。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から遺構の帰属時期は中世以降と思われる。重複関係から2057SKに先行する。

#### 2058SP (第21図)

調査区南側で検出した平面円形の柱穴である。規模は直径0.25m、深さは約0.2mを測る。断面形はU字形を呈する。埋土から瀬戸登窯期の染付磁器碗(37)等が出土した。出土遺物から遺構の帰属時期は19世紀中頃と考えられる。

#### 2072SP (第22図 写真図版16-4・5)

調査区南端で検出した平面円形の柱穴である。規模は長軸0.4m、短軸0.3m、深さは0.15mを測る。断面形は碗形を呈する。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から遺構の帰属時期は中世以降と思われる。重複関係から2077SPに後出する。

### 2077SP (第23図 写真図版16-6)

調査区南端で検出した柱穴である。規模は長軸0.45m、短軸0.3m以上、深さは約0.15mを測る。断面形はU字形を呈する。埋土から尾張型山茶碗第8型式期に相当する山茶碗が出土したが、細片のため遺構の時期決定には至らなかった。出土遺物と埋土の特徴から、遺構の帰属時期は中世以降と考えられる。重複関係から2072SPに先行する。

### 2081SP (第21図 写真図版15-1)

調査区南側で検出した平面楕円形の柱穴である。規模は長軸0.39m以上、短軸0.35m、深さは約0.2mを測る。断面形はU字形を呈する。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から遺構の帰属時期は中世以降と思われる。重複関係から2057SKに後出する。

## 3. 土坑

土坑は41基検出した。掘立柱建物や柵列等、建物を構成する柱穴が含まれている可能性もあるが、柱痕跡が確認できないものや断面形から柱穴とは考えにくいもの、また、平面規模が径60cmを超える大型のものについては、便宜上、土坑として扱った。規模も様々に性格不明なものが大半を占める。

### 2001SK (第16図 写真図版8-1)

調査区北端で検出した平面円形の浅い土坑である。規模は長軸1.2m、短軸1.1m、深さ約0.1mを測る。断面形は皿形を呈する。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から遺構の帰属時期は中世以降と思われる。

### 2002SK (第16図 写真図版8-2)

調査区北側で検出した平面楕円形の土坑で、規模は長軸0.7m以上、短軸0.6m、深さ約0.2m、断面形は碗形を呈する。埋土から時期不明の土師器の細片が出土した。埋土の特徴から遺構の帰属時期は中世以降と思われる。

### 2003SK (第16図 写真図版8-3)

2002SKの東隣で検出した平面楕円形の土坑で、規模は長軸0.7m、短軸0.45m、深さは約0.15mを測る。断面形は片側が緩やかな碗形を呈する。埋土から大窩期の天目茶碗を素材とした加工円盤(55)が出土した。出土遺物から遺構の帰属時期は16世紀中頃に降と考えられる。

### 2005SK (第16図 写真図版8-5)

調査区北側で検出した平面円形の浅い土坑で、規模は直径0.6m、深さは約0.1mを測る。断面形は皿形を呈する。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から遺構の帰属時期は中世以降と思われる。

### 2007・2008SK (第16図 写真図版8-7・8)

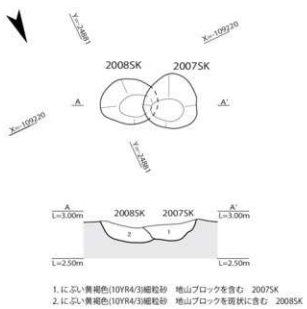
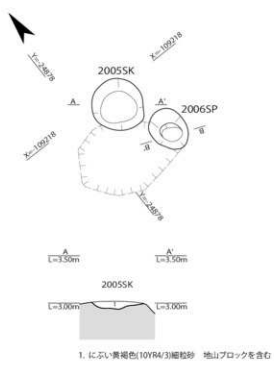
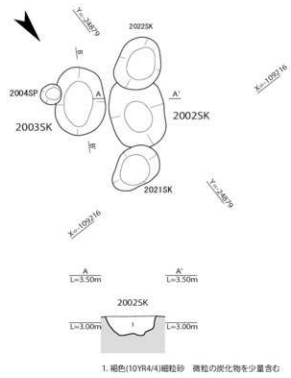
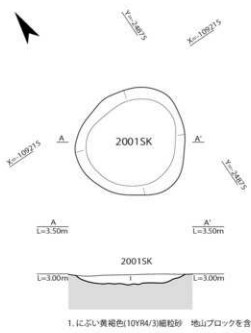
調査区北側で検出した平面円形あるいは楕円形の土坑である。規模はいずれも長軸約0.6m、短軸約0.5m、深さは約0.2mを測る。断面形は碗形を呈する。2007SKから19世紀初頭的美濃窯産の鉄軸徳利、2008SKから近世後期の染付磁器碗が出土しており、遺構の帰属時期はいずれも近世後期と考えられる。

### 2010SK (第24図 写真図版9-1)

調査区北側で検出した平面楕円形の土坑で、規模は長軸1.0m、短軸0.7m、深さは約0.2mを測る。断面形は浅い碗形を呈する。埋土から山茶碗、常滑焼大甕の胴部片が出土した。常滑焼大甕は、焼成・色調・胎土等から、下部遺構2014SEの井戸枠(1段目)に使用された大甕の破片と思われる。出土遺物や埋土の特徴から遺構の帰属時期は15世紀後半以降と考えられる。重複関係から2014SEに後出する。

### 2013SK (第24図)

調査区北側で検出した平面円形の浅い土坑で、規模は直径約0.6m以上、深さは約0.05mを測る。



第16図 2006SP、2001～2003・2005・2007・2008SK

断面形は皿形を呈する。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から遺構の帰属時期は中世以降と思われる。重複関係から2019・2010SKに先行する。

### 2019SK (第13図)

調査区北側で検出した土坑で、規模は長軸0.95m、短軸0.6m以上、深さは約0.3mを測る。断面形は碗形を呈する。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から遺構の帰属時期は中世以降と思われる。重複関係から2013SKに後出する。

### 2023SK (第17図 写真図版12-1～3)

調査区中央北側で検出した平面楕円形の粘土貼りを伴う土坑である。規模は長軸0.8m、短軸0.7m、深さは底面までが約0.2m、粘土貼り上面までが約0.1mを測る。断面形は碗形を呈する。

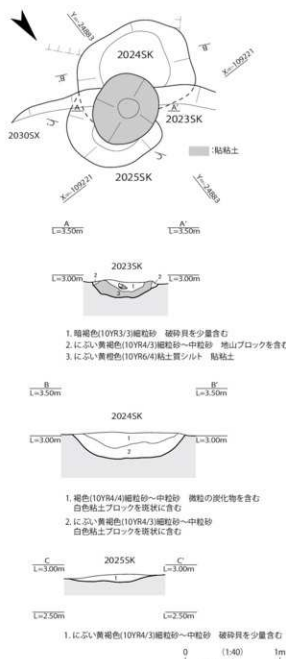
内面に5～10cm程の厚さで黄白色粘土を貼り付けており、遮水機能を持つと考えられるが、断面形が皿状で貯水容量が少ないことから水溜状態施設とは考えにくい。なお、2地点北側に隣接したR1-3地点では、水費を据えた近世のタタキ遺構(017SK)が検出されており、2023SKでは糞の破片は出土しなかったものの、粘土貼り上面の形状が糞の抜け取り痕と考えることも可能であるため、2023SKは糞胴部下半を粘土等で固定したタタキ遺構の可能性が高いと考える。後述する2030SX内に設置されたタタキ遺構であろう。なお、黄白色粘土は砂堆上に存在しない粘土であり、近隣の丘陵地等から採取した可能性が高い。

埋土は破砕貝を含む暗褐色細粒砂で、粘土貼り直上から瀬戸登窯期の腰鍬茶碗が出土していることから、遺構の帰属時期は近世後期と考えられる。重複関係から2024・2025SKに後出する。

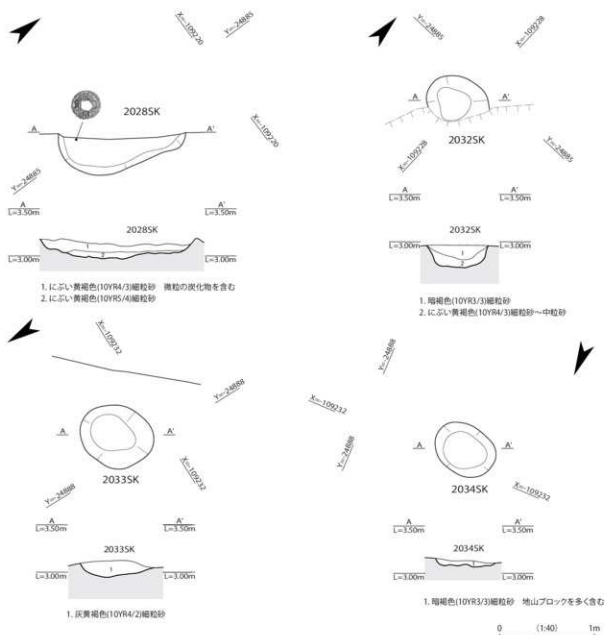
### 2024SK (第17図 写真図版12-4)

調査区中央北側で検出した平面楕円形の土坑で、規模は長軸1.2m、短軸0.6m、深さは約0.3mを測る。断面形は碗形を呈する。埋土は白色粘土ブロックを斑状に含む褐色・にぶい黄褐色細粒砂～中粒砂である。粘土を貼り付けた痕跡や破砕貝は見られなかったが、埋土に白色粘土ブロックを含み、常滑焼の赤物大糞の胴部片を多く含むことから、2023SK同様、糞設置遺構の可能性が高い。重複関係から2023SKに先行するため、2024SK 廃棄後に2023SKに造り替えられた可能性が高い。

埋土から近世常滑焼の赤物大糞のほか、瀬戸登窯期の丸碗が出土した。出土遺物から遺構の帰属時期は近世前半と思われる。



第17図 2023～2025SK



第18図 2028・2032～2034SK

### 2025SK (第17図)

調査区中央北側で検出した平面楕円形の浅い土坑で、規模は長軸 1.0m、短軸 0.6m、深さは約 0.1m を測る。断面形は皿形を呈する。埋土は破砕貝を含むにぶい黄褐色細粒砂～中粒砂である。時期の分かる遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から遺構の帰属時期は中世以降と思われる。重複関係から 2023・2024SK に先行する。

### 2028SK (第18図)

調査区中央北側の北西壁際で検出した土坑で、規模は長軸 1.4m、短軸 0.35m 以上、深さは 0.2m を測る。断面形は皿形を呈し、底面はやや起伏がある。埋土は上層が炭化物を含むにぶい黄褐色細粒砂、下層がにぶい黄褐色細粒砂である。上層から皇宋通寶 (60) を含む銭貨 2 枚が融着した状態で出土した。出土状況からみて 2028SK に伴うものではなく、混入品の可能性が高い。出土遺物から遺構の帰属時期は中世以降と考えられる。



### 2032SK (第18図)

調査区中央部で検出した平面楕円形の土坑で、規模は長軸0.7m、短軸0.5m以上、深さは約0.3mを測る。断面形は逆台形を呈する。土師器の細片が出土したが、時期は不明である。埋土の特徴から遺構の帰属時期は中世以降と思われる。

### 2033SK (第18図 写真図版12-5)

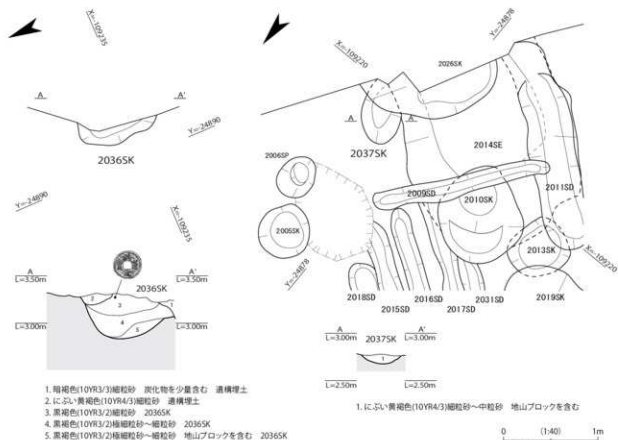
調査区中央部で検出した平面楕円形の土坑で、規模は長軸0.8m、短軸0.6m、深さは約0.15mを測る。断面形は浅い碗形を呈する。埋土から土師器焙烙が出土した。遺構の帰属時期は近世後期以降と思われる。

### 2034SK (第18図)

調査区中央部の南側で検出した平面楕円形の土坑で、規模は長軸0.7m、短軸0.5m、深さは約0.1mを測る。断面形は皿形を呈する。埋土から時期不明の常滑焼の大甕の胴部片が出土した。出土遺物からみて遺構の帰属時期は中世以降と考えられる。

### 2036SK (第19図 写真図版13-1)

調査区南側の東壁際で検出した土坑で、規模は長軸0.8m以上、短軸0.2m以上、深さは約0.5mを測る。断面形は碗形を呈する。埋土は黒褐色極細粒砂～細粒砂で、埋土上層から洪武通寶(59)が1枚が出土した。出土状況からみて2036SKに伴うものではなく、混入品と思われる。他に時期不明の土師器の細片が出土した。出土遺物から遺構の帰属時期は中世以降と考えられる。



第19図 2036・2037SK

### 2037SK (第19図)

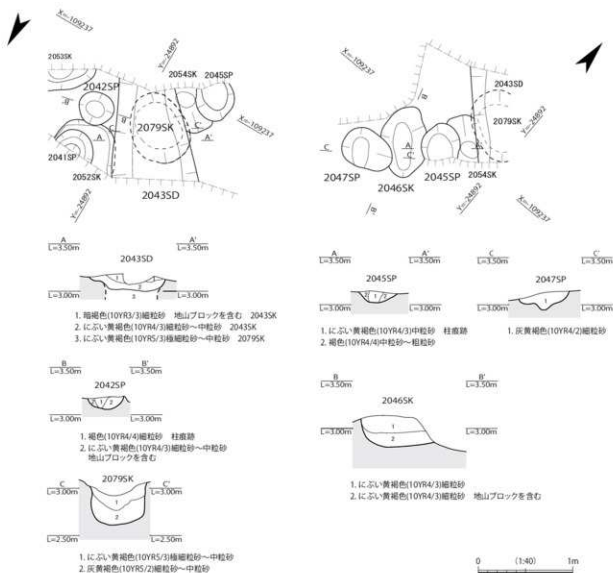
調査区北側の南東壁際で検出した平面楕円形の土坑で、規模は長軸0.6m以上、短軸0.45m、深さは約0.1mを測る。断面形は皿形を呈する。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から遺構の帰属時期は中世以降と思われる。重複関係から2026SKに先行する。

### 2046SK (第20図 写真図版13・7・8)

調査区南側で検出した平面楕円形の土坑で、規模は長軸0.75m、短軸0.5m、深さは約0.3mを測る。横断面形はU字形を呈する。埋土から山茶碗、常滑焼の甕、土師質の管状土錘等が出土した。いずれも細片のため遺構の時期決定に欠けるが、2045SPに先行することや出土遺物からみて、遺構の帰属時期は中世と思われる。

### 2052SK (第15図)

調査区南側で検出した浅い土坑で、規模は長軸0.7m以上、短軸0.24m以上、深さは約0.05mを測る。断面形は皿形を呈する。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から遺構の帰属時期は中世以降と思われる。重複関係から2041SPに先行する。



第20図 2042・2045・2047SP・2043SD・2046・2079SK

### 2053SK (第13図 写真図版14-4・5)

調査区南側で検出した平面楕円形の土坑である。規模は長軸0.8m、短軸0.5m以上、深さは約0.4mを測る。断面形は碗形を呈する。埋土から山茶碗の細片、古瀬戸後期の緑釉小皿が出土したが、細片のため遺構の時期決定には至らなかった。出土遺物から遺構の帰属時期は中世以降と考えられる。

### 2054SK (第21図)

調査区南側で検出した土坑で、規模は長軸0.5m以上、短軸0.3m、深さは約0.2mを測る。断面形は碗形を呈する。埋土から古瀬戸後期の皿類が出土した。遺構の帰属時期は14世紀後葉から15世紀後葉頃と考えられる。重複関係から2045SPに先行する。

### 2057SK (第21図 写真図版15-1)

調査区南側で検出した浅い土坑で、規模は長軸0.9m、短軸0.5m以上、深さは約0.1mを測る。断面形は皿形を呈する。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から遺構の帰属時期は中世以降と思われる。重複関係から2081SPに先行し、2056SPに後出する。

### 2059SK (第21図 写真図版15-2)

調査区南側で検出した土坑で、規模は長軸0.65m、短軸0.45m以上、深さは約0.15mを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土から土師器、山茶碗が出土したが、細片のため遺構の時期決定には至らなかった。出土遺物や埋土の特徴からみて遺構の帰属時期は中世以降と考えられる。

### 2065SK (第21図 写真図版15-3・4)

調査区南端で検出した平面楕円形の土坑で、規模は長軸1.5m、短軸1.1m、深さは約0.7mを測る。断面形は上方が開くU字形を呈する。断面観察から一度掘り直しが行われたと考えられる。埋土から土師器伊勢型鍋、15世紀後半代の常滑焼の片口鉢Ⅱ類(18)等が出土した。出土遺物からみて、遺構の帰属時期は15世紀後半頃と考えられる。

### 2070SK (第22図 写真図版15-5・6)

調査区南端で検出した土坑で、規模は長軸1.0m、短軸0.2m以上、深さは約0.4mを測る。断面形は箱形を呈する。埋土は第1層が破砕貝を多量に含む暗褐色細粒砂で、底面付近から16世紀代の土師器半球形内耳鍋(10)等が出土した。出土遺物から遺構の帰属時期は16世紀代と考えられる。

### 2071SK (第22図 写真図版15-7・8)

調査区南端で検出した平面長楕円形の土坑で、規模は長軸1.7m以上、短軸0.6m、深さは約0.4mを測る。断面形はU字形を呈する。埋土は第1層が破砕貝を含む暗褐色細粒砂で、隣接する2070SKの埋土に似る。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から遺構の帰属時期は中世以降と思われる。

### 2074SK (第22図 写真図版16-3)

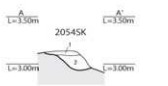
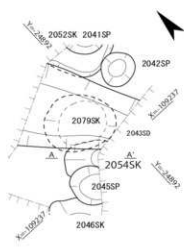
調査区南側で検出した平面楕円形の土坑で、規模は長軸0.7m、短軸0.5m、深さは約0.3mを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土から山茶碗の片口鉢Ⅰ類等が出土した。細片のため詳細な時期は不明だが、出土遺物から遺構の帰属時期は中世と考えられる。

### 2075SK (第22図 写真図版16-1・2)

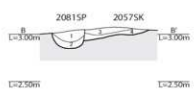
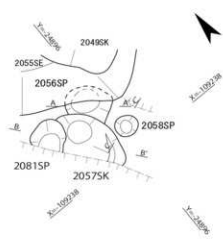
調査区南端で検出した平面楕円形の土坑で、規模は長軸1.0m、短軸0.5m以上、深さは約0.3mを測る。断面形は碗形を呈する。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から帰属時期は中世以降と思われる。

### 2079SK (第20図 写真図版16-7・8)

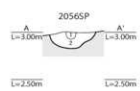
調査区南端で検出した平面楕円形の土坑で、規模は長軸0.8m、短軸0.6m、深さは約0.5mを測る。



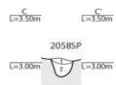
1. 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂～中粒砂
2. にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂～中粒砂



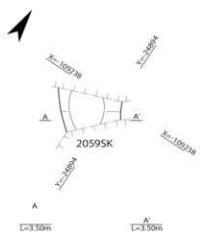
1. 暗褐色(10YR3/3)細粒砂 2081SP
2. 暗褐色(10YR3/3)細粒砂 地山ブロックを含む 2081SP
3. にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂 2057SK
4. にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂～中粒砂 2057SK



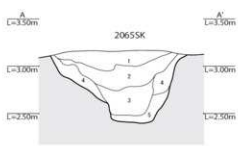
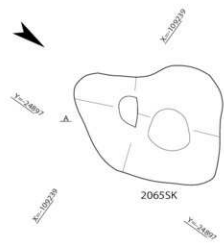
1. 暗褐色(10YR3/3)細粒砂 柱痕跡
2. にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂～中粒砂



1. 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂 炭化物を少量含む
2. にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂～中粒砂



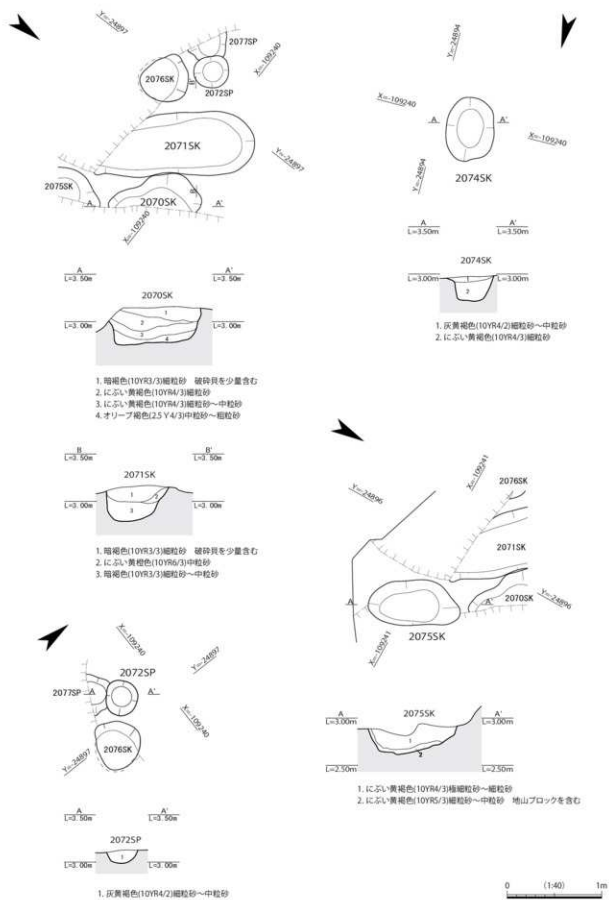
1. にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂
2. 暗褐色(10YR3/3)細粒砂 地山ブロックを含む



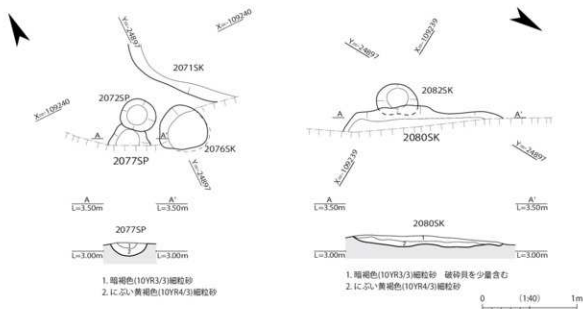
1. にぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂～中粒砂 1m以下の礫を少量含む 2065SK
2. 暗褐色(10YR3/3)細粒砂 2065SK
3. にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂 地山ブロックを含む 2065SK
4. にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂～中粒砂 2065SK
5. にぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂～中粒砂 1m以下の礫を少量含む 2065SK



第21図 2056・2058・2081SP、2054・2057・2059・2065SK



第22図 2070・2071・2074・2075SK、2072SP



第23図 20775P、20805K

断面形はU字形を呈する。埋土から時期不明の土師器、山茶碗が出土した。細片のため遺構の時期決定に欠けるが、出土遺物から帰属時期は中世以降と考えられる。重複関係から2043SDに先行する。20805K(第23図)

調査区南端で検出した浅い土坑で、規模は長軸1.7m以上、短軸0.13m以上、深さは0.12mを測る。断面形は皿形を呈する。底面はやや凹凸がある。埋土から土師器の伊勢型鍋(7)・羽釜(9)、常滑焼甕、土師質の管状土錘(49)等が出土した。出土遺物から遺構の帰属時期は中世と考えられる。重複関係から20825Kに後出する。

#### 4. 溝

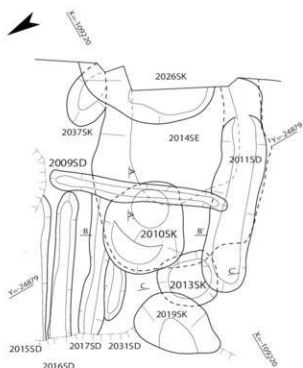
溝は9条検出した。耕作に伴う小溝群が中心で、1地点で検出したような区画溝は確認できなかった。2009・2015～2018・2031SD(第24図 写真図版9-4・5)

調査区北側で検出した小溝群で、北西-南東方向の溝5条(2015～2018・2031SD)とこれに直交する方向の溝1条(2009SD)を検出した。規模は幅約0.2～0.25m、深さは0.05～0.1mを測る。断面形は碗形あるいは皿形を呈する。主軸方位は北西-南東方向の溝がN-57°-W、これに直交する方向の2009SDがN-32°-Eを測る。小溝群直上で厚さ5～10cm程の作土層が確認できることから、畝に伴う耕作痕と考えられる。

埋土から近世後期の瀬戸登窯期の馬の目皿、近世後期の陶磁器が出土した。遺構の帰属時期は近世後期から幕末頃と考えられる。

#### 2011SD(第24図 写真図版9-2・3)

調査区北側で検出した平面形が直線的な溝である。規模は幅0.5m、長さ1.9m以上、深さは0.25mを測る。断面形は碗形を呈する。埋土は上下2層で、下層から山茶碗、中世常滑焼の甕、瓦質土器等が出土したが、これらの遺物は本来、下部遺構2014SEに伴うものと思われる。出土遺物や埋土の特徴から、遺構の帰属時期は中世以降と考えられる。重複関係から2014SEに後出する。



A L=3.50m A' L=3.50m

2009SD  
L=3.00m L=3.00m

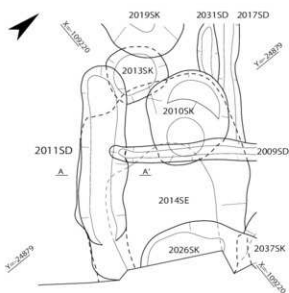
1. 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂 炭化物を含む 2009SD
2. 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂～中粒砂 2014SE

B L=3.50m B' L=3.50m  
2010SK  
L=3.00m L=3.00m

1. 灰色黄褐色(10YR5/4)細粒砂～中粒砂 2010SK
2. 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂 2010SK
3. 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂～中粒砂 2014SE

C L=3.00m 2013SK C' L=3.00m  
L=2.50m L=2.50m

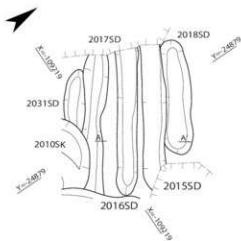
1. 灰色黄褐色(10YR4/3)細粒砂～中粒砂 地山ブロックを含む



A L=3.50m A' L=3.50m

2011SD  
L=3.00m L=3.00m

1. 黒褐色(10YR3/2)細粒砂 2011SD
2. 暗褐色(10YR3/3)極細砂～細粒砂 2011SD
3. 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂～中粒砂 2014SE



A L=3.50m A' L=3.50m

2016SD 2015SD  
L=3.00m L=3.00m

1. 暗褐色(10YR3/3)細粒砂 礫砂利を少量含む 地山ブロックを覆状に含む

0 (1:40) 1m

第24図 2009・2011・2015・2016SD、2010・2013SK

### 2027SD (第13図)

調査区北側で検出した平面形が直線的な溝で、規模は幅0.35m、長さ0.6m以上、深さは約0.1mを測る。断面形はU字形を呈する。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴からみて、遺構の帰属時期は中世以降と思われる。

### 2043SD (第20図 写真図版13-4)

調査区南側で検出した溝状遺構である。両端が攪乱されているため全容は不明だが、規模は幅0.8m、長さ1.2m以上、深さは約0.15mを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土から土師器、山茶碗、土師質の管状土錘(50)等が出土した。細片のため遺構の時期決定に欠けるが、出土遺物から遺構の帰属時期は中世以降と考えられる。重複関係から2079SKの後出する。

## 5. 井戸

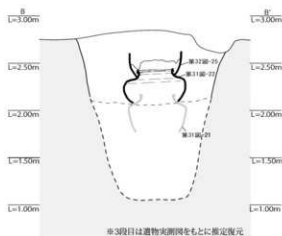
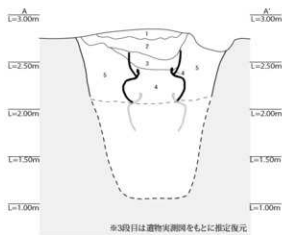
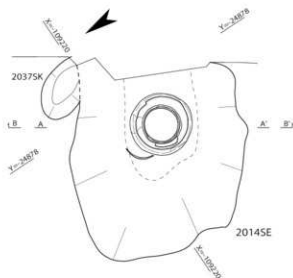
井戸は調査区北側で1基、南側で2基の計3基検出した。

### 2014SE (第25図 写真図版10・11)

調査区北側の南東壁際で検出した常滑焼の大甕を井戸枠に用いた陶器転用式井戸<sup>7)</sup>である。掘形の平面形は隅丸長方形で、掘形の規模は長軸2.1m以上、短軸1.8m、深さは約1.7mを測る。掘形の断面形はU字形を呈する。

井戸枠は上から3段目まで確認したが、湧水により井戸枠が崩壊したため、3段目以下の井戸枠の設置状況を正確に記録できなかった。ただし、1～3段目の井戸枠以外に枠内から全体の6割以上に復元可能な大甕が2個体出土していることや井戸底のレベルから推定して、5段以上の大甕が設置されていた可能性が高い。また、井戸底付近から一回り小さい中型の甕(20・27)が出土しており、最下段に設置されていた甕の可能性はある。

井戸枠は、大甕の胴部下半を打ち欠き、正位置の状態に入れ子状に積み重ねて構築しており、連結部の隙間(特に外面)に打ち欠いた甕の破片を被せることで、枠内への砂の流入を防



1. にぶい黄褐色(10YR4/3)極細砂～中粒砂 井戸枠取り崩  
井戸枠取り崩
2. にぶい黄褐色(10YR5/3)極細砂とにぶい黄褐色(10YR6/3)極細砂の互層  
井戸枠取り崩
3. 暗褐色(10YR3/3)極細砂～細粒砂 井戸枠取り崩
4. 黄褐色(10YR3/2)極細粒砂～細粒砂 2cm以下の隙を含む 井戸枠内の埋土
5. 灰黄褐色(10YR4/2)極細砂～中粒砂 掘形埋土

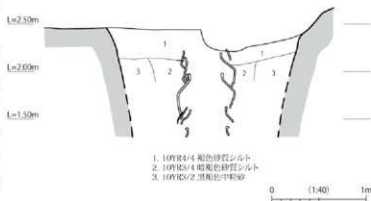


第25図 2014SE



いでいた。なお、息抜き等の祭祀に関わる施設は確認できなかった。

出土遺物には、井戸枠に用いられた常滑焼の甕(21・22・25)の他、掘形内から縄文土器(1)、弥生土器(2)、山茶碗、井戸枠内から片口鉢Ⅰ類(11～16)、片口鉢Ⅱ類(17)、常滑焼の甕(20・23・24・26・27)、陶丸(52)、被熱した自然石等が出土した。



井戸の構築時期は、井戸枠に用いられた常滑焼の甕(常滑窯編年第8・9型式期)の年代観から、概ね15世紀前半頃と考えられる。井戸枠内から出土した遺物で時期の判明する遺物は、井戸の構築時期より古い13世紀前半～14世紀後半頃の遺物に限られるため、井戸の使用・廃棄年代を推定するのは困難である。

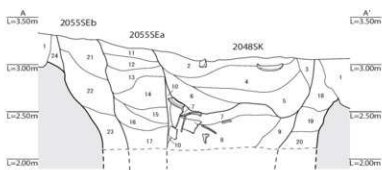
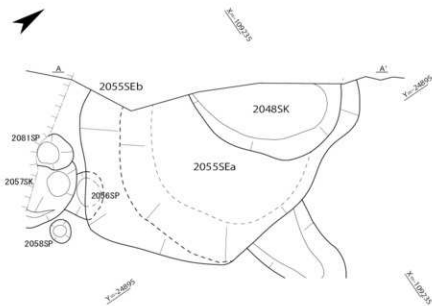
既往調査では、隣接する30-3地点において、常滑焼の大甕を井戸枠とした15世紀後半頃の井戸3223SE(第26図)が検出されている<sup>8)</sup>他、畑間遺跡に隣接した東畑遺跡21-2地点においても常滑焼の大甕を積み上げた15世紀後半頃の井戸SE1(第39図)等が検出されている<sup>9)</sup>。また、畑間遺跡から南に約4kmに位置するの知多市下内橋遺跡では、常滑焼の大甕を入れ子状に4段積み上げた15世紀後半頃の井戸(第40図)が検出されている<sup>10)</sup>等、常滑焼の生産地に近く、製品を入手し易い地域では、この時期、比較的多く採用された構築方法であったと考えられる。なお、付論において、畑間・東畑・郷中遺跡で検出された陶器転用側式井戸の構築時期等について分析しているので参照されたい。**2055SEa・b、2048SK(第27図 写真図版14-1～3)**

調査区南側の北西壁際で検出した井戸で、断面観察から井戸が2重重複した状態と考えられる。平面的に区別して調査できなかったが、重複関係からみて、北側の新しい方の井戸を2055SEa、南側の古い方の井戸を2055SEbとした。2055SEaは常滑焼の赤物大甕を井戸枠に用いた陶器転用側式の井戸で、北西部が調査区外に位置するため全容は不明だが、掘形規模は長軸2.5m以上、短軸2.1m以上を測る。深さは検出面下1.2mまで確認したが、埋設された電柱基礎を侵食する恐れがあったため、安全を考慮して更なる掘削を中止した。このため、井戸底のレベルや湧水層を確認するには至っていない。

検出した井戸枠は1段のみだが、検出したレベルからみて、上から2～3段目の井戸枠の可能性が高い。井戸枠に用いられた甕は半分以上が失われているが、復元径は約70cmを測る。井戸枠と掘形の間には、基盤層に確認できない白色粘土が残存しており、枠内に砂の流入を防ぐ目的で詰め込まれた目貼り粘土の可能性が高い。井戸枠抜き取り後の窪みは廃棄土坑(2048SK)に利用されたとみられ、貝殻・獣骨等の食物残渣の他、近世陶磁器が多く出土した。

2055SEaの構築時期は、井戸枠に用いられた赤物大甕の年代観から17世紀末から18世紀初頭頃と考えられる。井戸枠内出土遺物は細片化しており図化できなかったが、肥前系磁器のくらわんか碗等、18世紀中頃の製品が複数含まれており、2055SEaは18世紀代を中心に使用されたと推測される。

なお、2055SEbは2055SEaに破壊されており、遺物も出土しなかったため詳細な構築時期は不明だが、Ⅲ層上部から掘り込まれているため、帰属時期は中世以降と考えられる。



1. 埋土
2. 暗褐色(10YR3/3)細粒砂～中粒砂 破砕貝・獣骨・土器等を多量に含む 2048SK
3. 灰黄褐色(10YR4/2)極細粒砂～細粒砂 2048SK
4. 暗褐色(10YR3/3)中粒砂 破砕貝・獣骨・土器等を多量に含む 2048SK
5. にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂～中粒砂 破砕貝・獣骨・土器等を多量に含む 2048SK
6. 暗褐色(10YR3/3)細粒砂～中粒砂 破砕貝・獣骨・土器等を多量に含む 2048SK
7. 暗褐色(10YR3/4)細粒砂 井戸枠の陶器片を含む 2055Ea枠内埋土
8. 暗褐色(2.5Y3/3)細粒砂 井戸枠の陶器片を含む 2055Ea枠内埋土
9. 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂～中粒砂 2055Ea枠内埋土
10. にぶい黄褐色(10YR6/4)粘質土 2055Ea矩形と井戸枠の隙間の自張り粘土
11. 褐色(10YR4/4)細粒砂 2055Ea矩形埋土
12. 褐色(10YR4/4)極細粒砂～細粒砂 2055Ea矩形埋土
13. にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂～中粒砂 2cm以下の礫含む 2055Ea矩形埋土
14. 暗褐色(10YR3/3)中粒砂～粗粒砂 2cm以下の礫含む 2055Ea矩形埋土
15. にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂～中粒砂 2055Ea矩形埋土
16. 暗褐色(10YR3/3)中粒砂～粗粒砂 2055Ea矩形埋土
17. にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂～中粒砂 2055Ea矩形埋土
18. にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂～中粒砂 2055Ea矩形埋土
19. 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂～中粒砂 2055Ea矩形埋土
20. 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂～中粒砂 2055Ea矩形埋土
21. 褐色(10YR4/4)極細粒砂～細粒砂 2055Eb矩形埋土
22. 褐色(10YR4/4)細粒砂～中粒砂 2055Eb矩形埋土
23. にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂～中粒砂 2055Eb矩形埋土
24. にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂 遺物を含む Ⅲ層



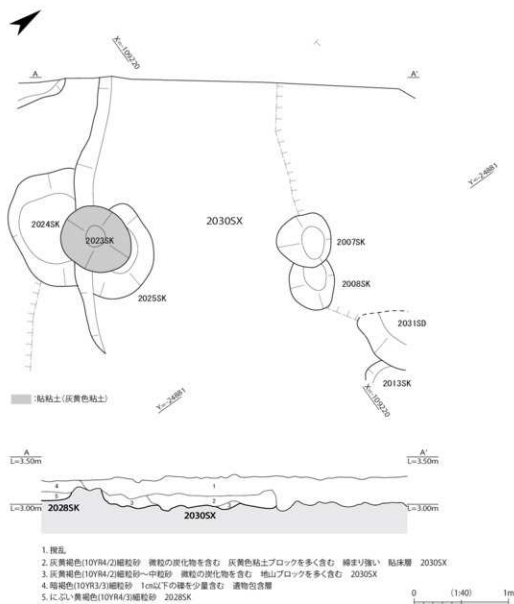
第27図 2048SK、2055Ea・b

## 6. 性格不明遺構

### 2030SX (第28図 写真図版12-1)

調査区中央北側の北西壁沿いで検出した粘土貼りを伴う遺溝である。遺構の北側が大きく攪乱され、遺構の西側が調査区外に連続するため全容は不明だが、規模は長軸2.9m以上、短軸2.6m以上、深さは約0.2mを測る。平面形は方形あるいは長方形になると思われる。底面はわずかに凹凸があるものの概ね平坦である。

土は下層が地山ブロックを含む灰黄褐色細～中粒砂、上層が灰黄色粘土ブロックを多く含む締りの強い細粒砂層で貼床と考えられる。遺物は出土しなかったが、2030SXの南西壁際で近世の埋溝遺構とみられる2023SKを検出しており、2030SXも近世に属する可能性が高い。



第28図 2030SX

# 第3章 遺物

今回の調査で出土した遺物は遺物整理用コンテナで13箱分ある。そのうちの12箱が中・近世の土器・陶磁器類で、他に縄文土器、弥生土器、古式土師器、土製品、石製品、金属製品、また、貝類・獣骨などの自然遺物が1箱分ある。なお、近隣の既往調査で古代の遺物が出土しているが、今回の調査では出土しなかった。

以下、縄文～古墳時代の土器、中世の土器・陶器、近世の土器・陶磁器、土製品、石製品・金属製品、自然遺物（貝類・動物遺存体）の順に報告する。なお、遺構出土遺物は出土数が非常に少ないことから、主要遺構以外の出土遺物については、各地点の包含層出土遺物とともに一括して報告する。出土遺物の型式や年代観は文末の基本参考文献を基準とした。

## 第1節 縄文～古墳時代の土器

縄文～古墳時代の土器には、縄文土器（1）、弥生土器（2～4）、古式土師器（5・6）がある。特筆すべき遺物に縄文時代中期後半の深鉢形土器（1）がある。

縄文～弥生土器（第29図-1～4 写真図版18-1～4）

1は波状口縁をもつ深鉢形土器と考えられ、口縁部上端に連続刺突文、胴部に貼布隆帯が認められる。中宮Ⅳ～Ⅴ式に比定でき、縄文時代中期後半の製品と考えられる。2014SEの掘形内から出土した。

畑間・東畑・郷中遺跡で出土した縄文土器のうち、現段階で最古に位置づけられる中期前葉の北裏C1式の土器（東畑遺跡出土）に続く製品であり、中・後期の出土例が少ない中では注目すべき遺物と言えよう。

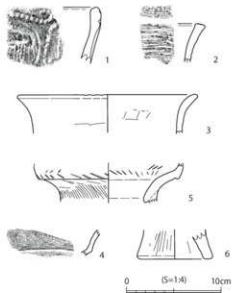
2は口縁が外反し、括れ部をもつ条痕文系の深鉢である。体部外面に横位の条痕を施す。口端面に貝殻による深い連続刺突文を施す。弥生時代前期の水神平式期の製品と考えられる。2014SE井戸枠内から出土した。

3は口縁部が外反し、括れ部をもつ甕と思われる。内外面ともに摩滅が著しい。弥生時代中期頃の製品と思われる。他、細片のため図化しなかったが、中期後葉の古井式期の壺が出土した。いずれも2地点の遺物包含層から出土した。

4は有段高杯の杯部片で、杯部上段が外罇し外面に波状文を巡らせる。弥生時代後期の山中式期の製品と思われる。2地点の遺物包含層から出土した。

古式土師器（第29図-5・6 写真図版18-5・6）

5は口縁が有段状を呈する加飾壺（柳ヶ坪タイプ）で、口縁部内外面に矢羽状の刺突を巡らせる。古墳時代前期の製品と考えられる。大型遺構1020SXから出土した。6は台付甕の脚部と思われる破片である。摩滅が著しいが、外面に縦方向のハケメを施す。古墳時代前期頃の製品であろう。2070SKから出土した。



1・2:2014SE 掘形 3・4:12 地点包含層 5:1020SX 6:2070SK

第29図 縄文～古墳時代の土器

## 第2節 中世の土器・陶器

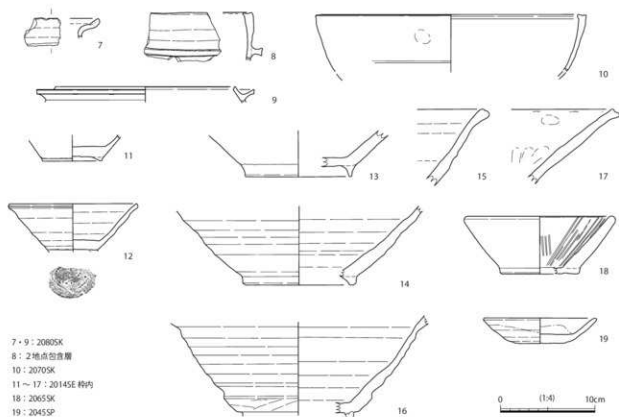
中世の土器・陶器は、土師器（7～10）、山茶碗（11・12）、片口鉢Ⅰ類（13～16）、片口鉢Ⅱ類（17・18）、常滑甕（20～27）、古瀬戸緑釉小皿（19）に分類される。このうち、11～17、20～27は、井戸（2014SE）から出土したもので、常滑甕は井戸枠として利用された。

以下、井戸（2014SE）出土遺物を優先し、各器種の特徴を記述する。

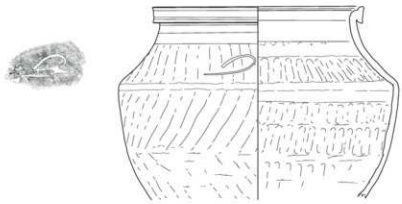
2014SE 出土遺物（第30図・11～17・第31～33図・20～27、写真図版18～22）

山茶碗（11・12）は、いずれも糸切り未調整の平底に付高台を有し、体部は直線的に立ち上がる。また、底部内面中央付近には、指押えと呼ばれる指ナデ調整が施されている。帰属時期は、いずれも尾張型第7型式（13世紀中葉）に相当する。片口鉢Ⅰ類（13～16）は、底部周辺（13・14・16）あるいは口縁部（15）の破片資料のため全体の形状は不明である。底部には付高台を有し、体部内面は比較的平滑であるのに対し、外面はロクロ成形による凹凸が明確に確認できる。体部下半付近は、横方向のヘラ削りあるいはヘラナデ調整により仕上げられている。口縁部は、体部上段付近の器壁より肥厚させ、その端部には細い沈線が一周するもの（15）である。帰属時期は、13・14・16の内、14はやや古い様相を示すが、概ね尾張型第6～7型式（13世紀前葉～中葉）の範囲にあり、15は第7型式に相当する。片口鉢Ⅱ類（17）は、壺・甕系の技法で成形され、口縁外端部が僅かに突き出し、色調は暗褐色系を呈する。帰属時期は、常滑窯編年第6b・7型式期（13世紀後葉～14世紀前葉）に相当する。なお、11～17は、いずれも常滑窯産の可能性が高い。

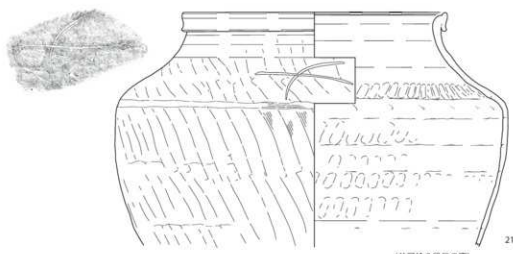
甕（20～27）は、中形（20・27）と大形（21～26）がある。井戸枠として元位置のまま検出



第30図 中世の土器・陶器①

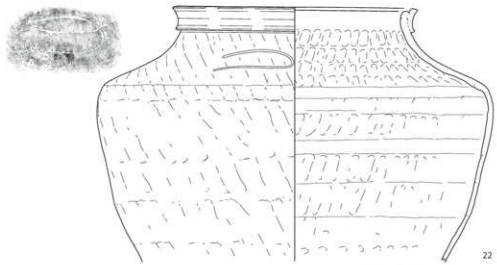


20



(井戸枠3段目の型)

21

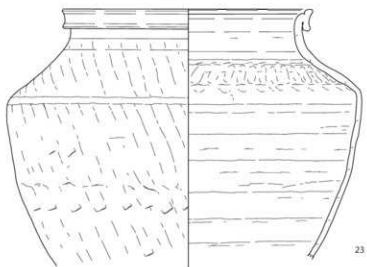


(井戸枠2段目の型)

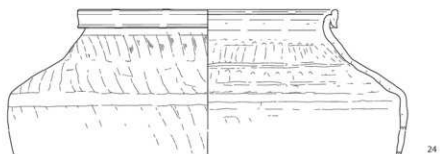
22



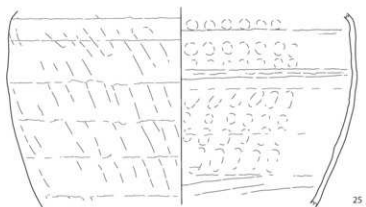
第31図 中世の土器・陶器② 2014SE出土遺物



23



24



25

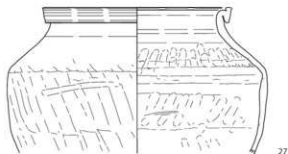
(井戸種1段目の裏)



26

0 (1/6) 20cm

第32図 中世の土器・陶器③ 2014SE 出土遺物



第33図 中世の土器・陶器④ 2014SE出土遺物

された個体は三段まであり、最上段が25、中段は22、最下段には21がそれぞれ相当する。他に、底部の資料(26)を除くと中形・大形がそれぞれ2個体あり、合計7個体の裏が井戸枠として採用された可能性がある。裏は下胴部(20～24・27)あるいは頸部から口縁部(25)を打ち欠いた後、利用したと考えられる。器形は、胴部上段の肩部付近に最大径を有し、肩部から頸部へ向けて窄まり、直立気味に立ち上がる頸部上端には、粘土紐を一周させて貼り付け、幅広の緑帯を有する口縁部を成形している。緑帯の下半部は、頸部との僅かな隙間が認められるもの(20・24・27)、頸部に密着するもの(21～23)に分類可能である。成形は、粘土紐の輪積み成形を基本とし、各段の繋ぎ目は指圧により接合させ、外面は縦あるいは斜め方向のヘラナデを多用した調整が施されている。文様は、20～22の肩部の一角所に認められ、棒状器具により簡略化したヘラ記号が認められる。焼成は、全て良好であり、肩部に付着する自然釉を除けば一律に暗明に分かれる赤褐色系の色調を基本として発色するが、21は還元炎の影響で灰色系を呈している。帰属時期は、20・21・24・27が第8型式期(14世紀後半)、22・23は第9型式期(15世紀前半)にそれぞれ相当する。従って、井戸枠としての構築は、15世紀前半以降の可能性が有力である。

#### 2065SK 出土遺物(第30図-18、写真図版18-18)

片口鉢Ⅱ類(18)は、小形の器形に含まれ、内面には卸目を伴う点が特徴である。ただし、破片資料のため注ぎ口の有無は不明である。成形は、粘土板により底部を設定し、その外縁に沿って粘土紐を積み上げ、縦方向を基本とするヘラナデ調整により器壁の内外面を整え、口縁部付近は横方向の指ナデ調整により丸く仕上げられている。内面には、4から5本を単位とする櫛状器具により体部下端から口縁部付近まで卸目が施されている。底部内面及び体部中段付近までは、使用痕と考えられる摩滅した状態が顕著に確認できる。帰属時期は、常滑窯編年第10型式期(15世紀後半)に相当する。

#### 2045SP 出土遺物(第30図-19、写真図版18-19)

緑釉小皿(19)は、古瀬戸製品である。形状は、糸切り未調整の平底を有し、体部は直線的で口縁部の外反は認められない。口縁端部は、丸く仕上げられている。成形は、ロクロ回転を多用した回転ナデが採用され、体部の内外面は丁寧な仕上げが施されている。釉薬は、口縁部の内外面を対象として、灰釉が施され、緑黄色系に発色している。帰属時期は、古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期(15世紀中葉～後葉)に相当する。

#### 2080SK 出土遺物(第30図-7・9、写真図版18-7・9)

土師器鍋(7)は、いわゆる伊勢型鍋と呼ばれ、口縁部を折り返し受け口状に成形している。帰属時期は、13世紀代に相当する。土師器羽釜(9)は、口縁部下に後付けの鈎を有する内彎形の羽釜である。鈎の端部付近には煤が付着している。帰属時期は、14世紀後半～15世紀代に相当する。



### 2070SK・包含層出土遺物（第30図-8・10、写真図版18-8・10）

土師器羽釜（8）は、包含層出土資料である。形状は、直立気味の口縁部下に後付けの鐙を有する。口縁部付近を除き煤が付着している。帰属時期は、16世紀前半に相当する。土師器内耳鍋（10）は、2070SK出土資料で、口縁部であるが耳部が欠落している。形状は半球形を呈し、体部中段には不明瞭ながら沈線が一周している。体部外面には煤が付着している。帰属時期は、16世紀前半頃に相当する。

## 第3節 近世の土器・陶磁器

近世の土器・陶磁器には、土師器（28～32）、瓦器（33・34）、陶磁器類（35～45）がある。以下、種別ごとに述べる。

### 土師器（第34図-28～32 写真図版23-28～32）

土師器には皿（28～31）、焙烙（32）がある。28～31はいずれもロク口成形土師皿で、焼成は良好である。28は器壁が薄手の浅い皿で、底部外面に回転系切痕が残る。1006SKから出土した。29・30は口縁部がわずかに外反する皿で、外面に回転系切痕が残る。いずれも1004SKから出土した。18世紀代の製品と思われる。31は底部中央付近に焼成前穿孔が見られるが、用途は不明である。底部外面に回転系切痕が残る。2地点の遺物包含層から出土した。32は焙烙で内面に使用痕が認められる。外面に多量の煤が付着する。18世紀代の製品と思われる。

### 瓦器（第34図-33・34 写真図版23-33・34）

瓦器には鍋（33・34）がある。33は内面に板ナデ及び横方向のヘラケズリ、外面にユビオサエの痕と多量の煤が付着する。34は三方向に扁平な耳をもつ双耳鍋で、内面に板ナデ、外面にユビオサエの痕と煤が付着する。いずれも18世紀から19世紀中頃の製品と思われる。1006SKから出土した。陶磁器類（第34図-35～45 写真図版23-35～24-45）

陶磁器類には、瀬戸窯産の小皿（35）・湯呑（36・37）・仏供（38）・腰錆碗（39）・片口（40）・徳利（41・42）・搦鉢（43・44）、常滑焼の赤物大甕（45）がある。

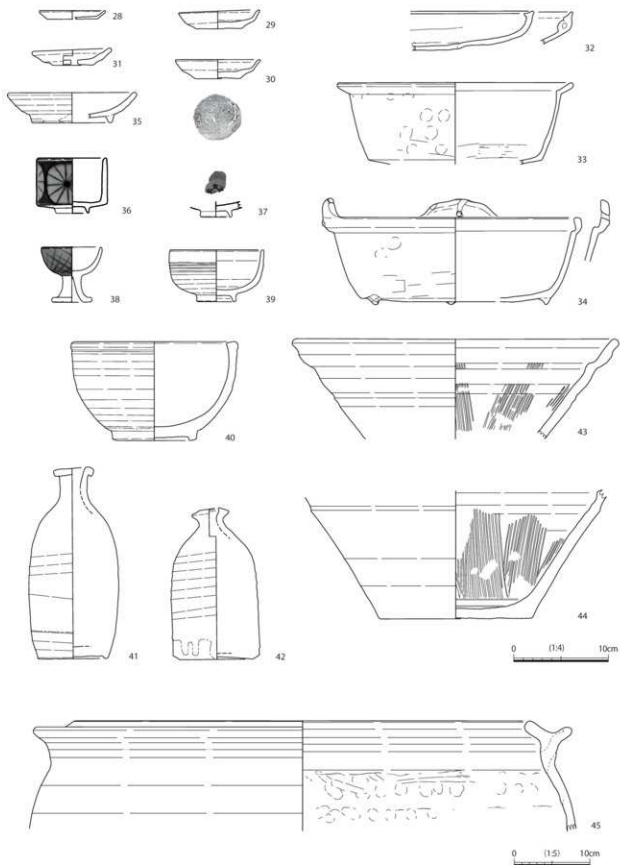
35は灰軸小皿で、高台内側が露胎となっている。瀬戸・美濃登窯編年第1期あるいは第2期の製品で、17世紀前半頃の製品と考えられる。2地点の井戸2055SEaから出土した。36は箱形湯呑で、外面に菊花文、内面見込み部に五弁花文を施す。瀬戸・美濃登窯編年第10小期の19世紀中頃の製品と考えられる。1006SKから出土した。37は染付湯呑で、内面見込み部に五弁花文を施す。瀬戸・美濃登窯編年第10小期の製品と考えられる。2058SPから出土した。

38は仏供で、瀬戸・美濃登窯編年第10小期の製品と考えられる。1006SKから出土した。39は腰錆碗である。口縁部と内面にかけて灰軸、口縁部以下の外面に錆軸を施す。高台端面の軸は拭き取る。瀬戸・美濃登窯編年第8小期の18世紀後葉頃の製品と考えられる。1006SKから出土した。

40は片口である。内外面に胎釉を施す、高台は削り込み高台である。内面に重ね焼きに伴うトチン跡が残る。瀬戸・美濃登窯編年第7小期の18世紀中頃の製品と考えられる。1006SKから出土した。

41・42は徳利である。41は灰軸徳利で瀬戸・美濃登窯編年第7小期、42は鉄軸徳利で底面付近の軸を拭き取る。瀬戸・美濃登窯編年第8小期の製品と考えられる。いずれも1006SKから出土した。

43・44は搦鉢I類で、いずれも全面に錆軸を施す。43は瀬戸・美濃登窯編年第7小期の18世紀中葉、44は同第6小期の製品で18世紀前葉の製品と考えられる。いずれも1007SKから出土した。45は常滑焼のいわゆる赤物大甕で、17世紀末から18世紀初頭の製品と考えられる。1006SKから出土した。



28・32～34・36・38～42・45：10065K 29・30：10045K 31：2地点包倉層 35：20555Ea 37：20585P 43・44：10075K

第34図 近世の土器・陶磁器

## 第4節 土製品

土製品には、ミニチュア土器(46)、土鍾(47～51)、陶丸(52)、加工円盤(53～57)がある。

ミニチュア土器(第35図-46 写真図版24-46) 46は口径2.5cmの小型の土師皿である。手捏ね成形で製作されており、各部に指頭圧痕が認められる。18世紀代の製品と思われる。1006SKから出土した。

土鍾(第35図-47～51 写真図版24-47～51) 47～51は土師質の管状土鍾である。いずれも中央部が膨らむ紡錘形を呈する。長さ3cm前後、重さ3～4g前後の小型品(47～49)と、長さ5cm前後で、重さ10～12g前後の中型品(50・51)とがある。1020SXで2点、また、2043SD、2080SK、2地点の遺物包含層からそれぞれ1点ずつ出土した。

陶丸(第35図-52 写真図版24-52) 52は直径2cm、重さ12gをはかる陶丸である。手捏ね成形で製作されており、随所に指頭圧痕が残る。2014SEの井戸枠内から出土した。

加工円盤(第35図-53～57 写真図版24-53～57)

53～57は加工円盤である。いずれも側面が丁寧に打ち欠かれている。53・57の側面の一部は滑らかで、加工時の研磨あるいは使用痕と考えられる。56は両面、57は片面に浅い凹みが認められる。穿孔途中で止めたのかもしれないが、意図は不明である。53・56・57は14世紀から15世紀代の常滑焼の裏の胴部、54は古瀬戸後IV期古段階の天目茶碗の底部、55は大窯第3段階の天目茶碗の底部をそれぞれ素材としている。53・54は1006SK、55は2003SK、56・57は2地点の遺物包含層から出土した。

加工円盤(第35図-53～57 写真図版24-53～57)

53～57は加工円盤である。いずれも側面が丁寧に打ち欠かれている。53・57の側面の一部は滑らかで、加工時の研磨あるいは使用痕と考えられる。56は両面、57は片面に浅い凹みが認められる。穿孔途中で止めたのかもしれないが、意図は不明である。53・56・57は14世紀から15世紀代の常滑焼の裏の胴部、54は古瀬戸後IV期古段階の天目茶碗の底部、55は大窯第3段階の天目茶碗の底部をそれぞれ素材としている。53・54は1006SK、55は2003SK、56・57は2地点の遺物包含層から出土した。

## 第5節 石製品・金属製品

石製品には石鍋(58)、金属製品には銅銭(59・60)がある。

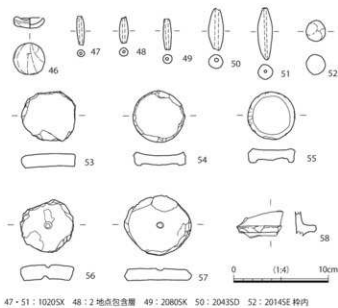
石鍋(第35図-58 写真図版24-58)

58は滑石製の鑄付石鍋である。断面形が縦長長方形の鑄が巡る。12～13世紀代の製品であろう。1地点の遺物包含層から出土した。

銭貨(第36図-59・60 写真図版24-59・60)

59・60は銅銭である。59は洪武通寶(初鑄1368年)、60は銭貨が2枚融着しており、このうちの1枚は皇宋通寶(初鑄1039年)である。もう1枚の銭貨は不明である。59は2036SK、60は2028SKからそれぞれ出土した。

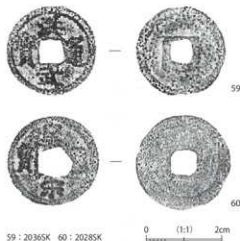
59は2036SK、60は2028SKからそれぞれ出土した。



47・51: 1020SX 48: 2地点包含層 49: 2080SK 50: 2043SD 52: 2014SE 枠内  
46・53・54: 1006SK 55: 2003SK 56・57: 2地点包含層 58: 1地点包含層

第35図 土製品・石製品

第36図 金属製品(銭貨)



## 第6節 自然遺物（貝類・動物遺存体同定）

### 1. はじめに

一般に日本の国土は、火山灰性の酸性土壤に広く覆われ、高温多湿というモンスーン気候ともあいまって貝類などの動物遺存体の保存状態には恵まれていない。そのため、ほとんどの乾燥地遺跡では動物や植物性の遺物は分解されて残らず、遺跡で動物遺存体が出土するのは、貝塚、石灰岩地帯の洞穴や岩陰が代表的であるが、近年では湿地環境の遺跡や遺構からも多くの動物遺存体が報告されつつある。なお、ほとんどの動物遺存体が腐食し、土に還ってしまっているが、例外的に消失を免れ、発掘で取り上げられるものもある。そうした断片的な試料を集積することによって、その遺跡を残した人々の動物利用、食生活などを解明する手掛かりとすることができ、それに加え貝類では生息環境の情報から水域環境の復原や生息水深を知ることができ、ひいては当時の自然環境や人間の適応の歴史を明らかにすることができる。

### 2. 試料

試料は、1006SK（1地点）、2023SK（2地点）の土坑から出土した動物遺存体 282 点である。

### 3. 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴及び現生標本との対比によって同定を行った。

### 4. 結果

(1) 分類群 同定された和名および部位を表2に示し、主要な分類群を写真（写真図版 25-1～15）で示す。また、以下に同定の結果を遺構別に報告する。

#### 1) 1地点（1006SK）

オオタニシ2点、ウミナナ科39点、アカニシ9点、軸2点、マイマイ類破片1点、ハイガイ左12点、右4点、左右2点、サルボウガイ左25点、右24点、ナミマガシワ科2点、マガキ7点、ヤマトシジミ左4点、右5点、シオフキ左39点、右41点、アサリ左18点、右10点、ハマグリ左16点、右13点、ネコ下顎骨右1点、海獣類肋骨1点、哺乳類頭蓋骨破片1点が同定された。なお、哺乳類頭蓋骨では解体痕が観察された。

#### 2) 2地点（2023SK）

アカニシ軸2点、サルボウガイ右1点、不明貝類破片1点が同定された。

### 5. 考察

同定されたのは貝類のオオタニシ、ウミナナ科、アカニシ、マイマイ類、ハイガイ、サルボウガイ、ナミマガシワ科、マガキ、ヤマトシジミ、シオフキ、アサリ、ハマグリ の 12 種類、哺乳類のネコ、海獣類、哺乳類の3種類、計15種類である。

貝類のほとんどが海水生のものであり、ウミナナ科、ハイガイ、サルボウガイ、シオフキ、アサリ、ハマグリは内湾の干潟や潮間帯下の泥底に、アカニシ、ナミマガシワ科は岩礁または砂地、砂泥地に、マガキは内湾から河口域の潮間帯から潮下帯の岩礁に生息する。また、ヤマトシジミは河川の河口など淡水と海水が入り混じる汽水域に生息し、流れの穏やかな河川や用水路、オオタニシは溜池や湖などの水量と水質が安定した場所に生息する。シオフキが最も多く同定されたが、他のウミナナ科、ハイガイ、サルボウガイ、アサリ、ハマグリが同様の生息域のため、網漁やじょれん曳、採取などで種

表2 貝類・動物遺存体同定結果

遺構等	結果 (学名/和名)	部位	部分	左右	個数	備考
1地点 1006SK	<i>Cipangopaludina japonica</i>	オオタニシ		略完		2
	Batillariidae	ウミニナ科		略完		39
	<i>Rapana venosa</i>	アカニシ		略完		9
				軸		2
	Pulmonata, order, fam., gen. et sp. indet.	マイマイ類		破片		1
	<i>Tegillarca granosa</i>	ハイガイ		略完	左	12
				略完	右	4
				略完	左右	2
	<i>Scapharca kagoshimensis</i>	サルボウガイ		略完	左	25
				略完	右	24
	Anomidae?	ナミマガシワ科?		略完	左	2
	<i>Ostrea denselamellosa</i>	マガキ		略完		7
	<i>Corbicula japonica</i>	ヤマトシジミ		略完	左	4
				略完	右	5
	<i>Maetra veneriformis</i>	シオフキ		略完	左	39
				略完	右	41
	<i>Ruditapes philippinarum</i>	アサリ		略完	左	18
				略完	右	10
	<i>Meretrix lusoria</i>	ハマグリ		略完	左	16
			略完	右	13	
<i>Felis sibiricus catus</i>	ネコ	下顎骨	略完	右	1	
Pinnipedia / Cetacea?	海獣類?	肋骨	近位端		1	
Mammalia	哺乳類	頭蓋骨	破片		1	
					1	
2地点 202SK	<i>Rapana venosa</i>	アカニシ		軸		2
	<i>Scapharca kagoshimensis</i>	サルボウガイ		略完	右	1
	Shell	貝類	不明	破片		1

類を特定せずに一気に漁獲されたと考えられる。マガキは素潜りなどで、アカニシは網漁で漁獲される。なお、ナミマガシワ科は岩や貝類などに付着して生育する特徴があり、漁獲された他の貝類に付着したのと考えられる。ヤマトシジミは桁網漁や掻刺漁など海底を掻き起こして行われる漁法で漁獲されることが多い。オオタニシは河川や溝などからの採取である。また、いずれの貝類も古くから食用とされてきた貝類であり、旬は主に春である。食用として利用した後、不要となった貝殻を土坑へ投棄したのと考えられる。マイマイ類は陸生の貝類で、湿度のあるところや海岸、畑地や山地から平野に広く分布し、食用とされるクチベニマイマイなどもある。本遺跡では1点のみの出土のため食用としたとは考えにくく、土坑に投棄されたまたは周囲からの混入と考えられる。

ネコは奈良時代頃に中国から輸入されたとされ、平安時代には愛玩動物として『枕草子』などに登場する。江戸時代初期まではネコは少なく貴重な動物だったと考えられる。海産物の捨て場となった土坑に食料を求めてきたネコが死んだか、他の場所で死んだネコを土坑に投棄したと考えられる。海獣類は肋骨、哺乳類は解体痕の残る頭蓋骨であり、いずれも食用として利用した後には不要となった骨を投棄したと考えられる。

本遺跡から出土した動物遺存体のほとんどはシオフキやサルボウガイの海水生の貝類および海獣類であり、食用として利用した後には不要となった部分を土坑に投棄したものが出土した。本遺跡の南西に位置する伊勢湾の干潟や岩礁地、河口付近からの漁獲と考えられる。主に春が旬のものが多く、春に漁獲された海産物と考えられる。また、マイマイ類やネコなどは食用としたものではなく、死んだものを投棄した可能性が高い。

## 【参考文献】

- 阿部永 1994 『日本の哺乳類』 東海大学出版会, 195p.  
 奥谷喬司 2001 『日本近海産貝類図鑑』 東海大学出版会  
 増田修・内山りゅう 2004 『日本産淡水貝類図鑑 ②汽水域を含む全国の淡水貝類』 株式会社ビーシーズ, 240p.  
 望月賢二 2005 『魚と貝の事典』 魚類文化研究会, 433p.

## 第4章 まとめ

今回の調査は、東海太田川駅周辺土地区画整理事業に伴い、平成11年度(1999年度)から令和2年度(2020年度)までの計22年間、実施してきた緊急発掘調査の最終年度にあたる。

今年度の調査は、畑間遺跡の南西端、大田川旧河道に面した1・2地点の2ヶ所で実施した。調査の結果、いずれの調査区でも近代以降の攪乱・変化が著しく、掘立柱建物や櫓列等の建物跡は確認できなかったが、1地点で中世の区画溝や大型の土坑状遺構、2地点では常滑焼の大甕を井戸枠とした中世の井戸を検出するなど、主に中世の屋敷地割や遺構分布を考える上で、貴重な成果を得た。

出土遺物には、縄文土器、弥生土器、古式土師器、土師器、山茶碗、中世陶器(古瀬戸・常滑焼)、瓦器、近世陶磁器(瀬戸・美濃・常滑焼等)、土製品(管状土錘・加工円盤・陶丸)、石製品(石鍋)、金属製品(銭貨)、自然遺物(貝類・獣骨)がある。このうちの8割以上が中・近世の陶磁器類である。

以下では、今回の調査成果を時期別に整理することで、本報告のまとめとしたい。なお、時期区分については、2014年刊行の平成11～14年度調査報告において、I～V期までの区分が提示されているが、本報告ではV期(中世以降)を更に細分し、これにVI期(近世)を加えて記述する。

### I期(縄文時代～弥生時代前期)

この時期の遺構は検出されなかったが、井戸2014SEの掘削内から縄文時代中期後半の中富式の深鉢形土器が出土した。既往の畑間・東畑・郷中遺跡の調査では、現在までのところ縄文時代の遺構は確認されていないが、主に遺物包含層から縄文時代中期から晩期にかけての土器が出土しており、特に大田川旧河道に面した東畑遺跡で晩期を中心とした土器が多く出土している<sup>11)</sup>。現段階最古の資料としては、東畑遺跡出土の中期前葉に位置づけられる北裏C1式土器が知られている<sup>12)</sup>が、今回の出土資料を含めて中期まで遡る資料は希少であり、第1砂堆における縄文時代の遺跡分布を考える上で注目すべき遺物と言えよう。

弥生時代前期の遺物としては、水神平式期の深鉢形土器が数点出土したが、隣接する既往の調査区ではこの時期の遺物は出土していないため、調査地周辺では活発な活動は行われなかったとみられる。

### II期(弥生時代中期)

この時期の遺構は検出されなかったが、遺物包含層から弥生時代中期後葉の古井式の壺や甕が数点出土した。隣接するR1-3地点の遺物包含層からも同時期の壺が数点出土している<sup>13)</sup>ほか、1地点北側の27-7・6地点では弥生時代中期の竪穴住居等が複数棟確認されており<sup>14)</sup>、当該期の集落が周辺に展開していたと考えられる。

### III期(弥生時代後期～古墳時代前期)

この時期の遺構は検出されなかったが、1・2地点の遺物包含層や中世の遺構に混入する形で、弥生時代後期の山中式期の高杯、古墳時代前期の加飾壺等が出土した。既往の周辺の調査では、1地点の北に隣接した27-7地点で古墳時代初頭と推定される方形周溝墓2基<sup>15)</sup>、29-4地点で同時期の方形周溝墓1基が検出されている<sup>16)</sup>他、1地点の北東約120～150mの29-2地点で弥生時代の方形周溝墓3基、29-3地点では同時期の方形周溝墓2基が検出されており<sup>17)</sup>、周辺に当該期の墓域が広く展開していたと考えられ、調査地周辺にも同様の遺構が展開していた可能性も考えられる。

## IV期（古墳時代後期～古代）

この時期の遺構・遺物は検出されなかったが、隣接するR1-3地点でO-10号窯式期前後の須恵器壺、27-7地点で古代の須恵器蓋等が出土している。ただし、いずれの地点でも明確な遺構は検出されておらず、出土遺物も少ないことから、今回の調査地周辺では、この時期、活発な活動は行われなかったとみられる。

## V期（中世）

この時期の主要な遺構には、東西方向の区画溝1005SD、大型の土坑状遺構1020SX、常滑焼の大甕を井戸枠とした井戸2014SEがある。柱穴・ピットも多く検出したが、広範囲に攪乱が及ぶことや調査範囲も限られるため、掘立柱建物や柵列などの建物跡は確認できなかった。

今回の調査では1005SDに平行あるいは直交する溝は確認できなかったが（攪乱で破壊されている可能性が高い）、溝幅が3.2mと規模が大きいかことや隣接する30-3地点の区画溝3170SD（幅2.5m、深さ0.3m、16世紀以降）等に直交すること、また、第1砂堆南西部の中世区画溝群のうち、区画A・C（推定30m四方：第37図）を構成する南北溝（13世紀代）の主軸方位にほぼ直交することから、全体的な規模・構造は不明だが、屋敷地を囲む溝など、何らかの区画に伴う溝の可能性が高い。

帰属時期としては、溝底で13世紀後葉から14世紀前半頃の遺物が多く出土したことから、この頃に開削されたと思われるが、上層で16世紀代の土師器内耳鍋が出土しているため、埋没後に位置を踏襲して再掘削され、この頃まで使用された可能性が高い。

1地点の南端で検出された土坑状遺構1020SXは、長軸5.1m以上、短軸4.2m以上、深さは最大で約1.0mを測る大型の遺構である。性格不明だが、底面が平坦であるため、竪穴状遺構あるいは水溜り施設の可能性もある。15世紀代の遺物を含む。

2地点で検出した井戸2014SEは、常滑焼の大甕の胴部下半を打ち欠き、入れ子状に3段以上（推定5～6段）積み重ねて井戸枠とした陶器転用割式井戸（15世紀前半）である。隣接した30-3地点でも同様の構築方法の井戸3223SE（15世紀後半頃）が検出されており、屋敷地割は不明だが、中世の掘立柱建物跡も複数確認されていることから、屋敷地内に設置された井戸と考えられる。2014SEも同じく屋敷地内に設置された井戸であろう。

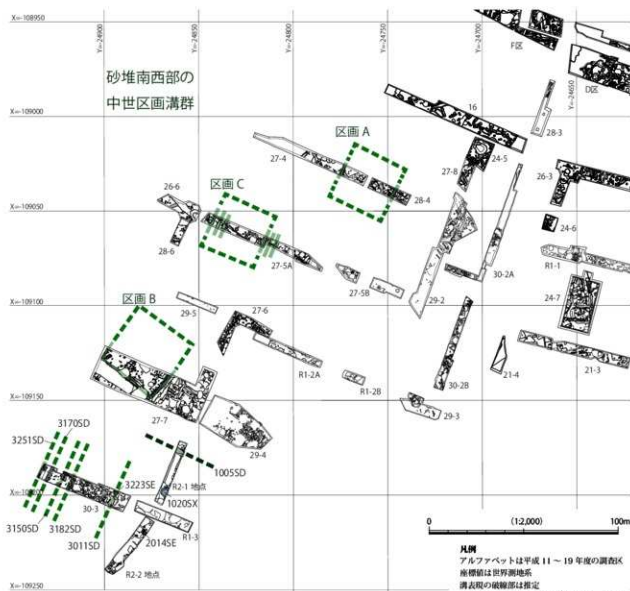
この時期の出土遺物には、土師器の皿・内彎形羽釜・伊勢型鍋・半球形内耳鍋、尾張・東濃型山茶碗・小皿・片口鉢Ⅰ類、古瀬戸の緑釉小皿・平碗・大皿、常滑焼の壺・甕・片口鉢Ⅱ類、管状土錘・加工円盤・陶丸、石鍋、銭貨などがある。全体的な傾向としては高級陶磁器を含まず、日常雑器が主体である。出土遺物の時期としては13世紀後葉から16世紀代までの遺物を含むが、出土量としては14世紀代の遺物は少なく、15世紀代の遺物が多くを占める。

## VI期（近世）

江戸時代の主要な遺構には、廃棄土坑1006・1007SK、粘土貼り遺構2023SK・2030SX、常滑焼の赤物大甕を井戸枠とした井戸2055SEa、畠に伴う耕作痕（2009・2015～2018・2031SD）がある。柱穴・ピットも検出したが、掘立柱建物や柵列などの建物跡は確認できなかった。

出土遺物は、土師器の皿・焙烙、瓦器鍋、近世陶磁器の小皿・湯呑・仏供・腰錆碗・片口・徳利・搦鉢・常滑焼の赤物甕などの日常雑器が主体で、この他に食物残渣とみられる貝類・獣骨等も出土した。時期としては、17世紀前半から19世紀中頃までの遺物を含む。出土遺物は日常雑器が主体で、高級陶





第 37 図 砂堆南西部の中世区画溝群

磁器等を含まないことや食物残渣を含む廃棄土坑や井戸が重複して見られること、また、畠の耕作痕がみられることから、今回の調査地は一般庶民の居住域・生産域であった可能性が高い。

17 世紀中頃には、尾張藩 2 代藩主の徳川光友（1625～1700）の横須賀御殿の造営を機に大田川の付け替え工事が行われたとされ、この際に大田川旧河道一帯は埋められ、田畠あるいは湿地化していったと考えられる。その後の 18 世紀中頃から 19 世紀代にかけては、大規模新田開発に伴い沿岸部の干拓工事が進められ、寛延三年（1750）に河口部前面に浜新田、寛政九年（1797）には河口部南側に後浜新田等が完成している。

今回検出された江戸時代の遺構・遺物は、17 世紀代の遺構・遺物は少なく、18 世紀代から遺構・遺物ともに増加する傾向が見られることから、大規模新田開発に伴う生産人口の増加等に伴い、新たに居住域や生産域として開発が進められた地域であった可能性が高い。今後は文献資料を踏まえて、当地域の遺構の変遷や土地利用がより具体的に復元・解明されていくことに期待したい。



## 【註】

- 1) 愛知県教育委員会 1999『愛知県知多半島遺跡詳細分布調査報告書』
- 2) 東海市教育委員会 1997『愛知県東海市東畑遺跡等試掘調査報告』
- 3) 永井伸明・宮澤浩司 2007「伊勢湾を望む海辺の遺跡—東畑遺跡等発掘調査概報—」『研究報告とうかい』創刊号  
東海市教育委員会  
宮澤浩司 2009「伊勢湾を望む海辺の遺跡(2) —平成19年度畑間・東畑遺跡発掘調査の概要—」『研究報告とうかい』  
第2号 東海市教育委員会
- 4) 永井伸明・坂野俊哉ほか 2014『畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告-平成11～19年度調査』東海市教育委員会
- 5) 30.3地点で検出された南北方向の区画溝3170SD(幅2.52m、深さ0.33m)は、主軸方位がN25～27°Eで、1005SDの溝方位N65°Wにほぼ直交する。  
宮澤浩司・早川由香里・久富正登・新山王諒太ほか 2020『畑間・東畑遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
- 6) 中村毅・宮澤浩司ほか 2015『畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会  
中村毅・安津由香里ほか 2018『畑間遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
- 7) 「大型陶器の底部を打ち欠くことにより、筒形の陶製品を造り、これを積み重ねて井戸側とするもの」と定義されている。  
鈴木正貴 2017「第4節 井戸」『資料編5 考古5 鎌倉～江戸』愛知県
- 8) 宮澤浩司・早川由香里・久富正登・新山王諒太ほか 2020『畑間・東畑遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
- 9) この他、東畑3地点においても常滑焼火糞を7段積み重ねて井戸枠とした14世紀後半頃の井戸(SE1)が検出されている。  
有馬啓介・宮澤浩司ほか 2012『畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
- 10) 名古屋大学文学部考古学研究室ほか 1996『知多市文化財資料33 下内橋遺跡』知多市教育委員会
- 11) 坂野俊哉 2014「付載2 東畑遺跡出土の縄文土器 その2」『畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告-平成11～19年度調査』東海市教育委員会
- 12) 坂野俊哉 2013「付載1 東畑遺跡出土の縄文土器」『畑間・東畑・龍雲院遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
- 13) 坂野俊哉・早川由香里・石黒立人・新美倫子・樋田泰之ほか 2021『畑間・東畑遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
- 14) 丹生泰雪・宮澤浩司ほか 2017『畑間遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
- 15) 方形周溝墓SZ7270・7311の2基  
宮澤浩司・安津由香里・西野順二・伊藤敬太郎ほか 2019『畑間・東畑遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
- 16) 方形周溝墓246SZ  
宮澤浩司・安津由香里・西野順二・伊藤敬太郎ほか 2019『畑間・東畑遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
- 17) 29.2地点では方形周溝墓203～205SZ(弥生時代中期以降)と古墳時代後期の円墳1基(206SZ)、29.3地点では方形周溝墓074・075SZ(弥生時代中期以降)が検出されている。  
宮澤浩司・安津由香里・西野順二・伊藤敬太郎ほか 2019『畑間・東畑遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会

## 【引用・参考文献】

- 1 知多市誌編さん委員会編 1981『知多市誌 本文編』知多市
- 2 大府市誌編さん委員会 1986『大府市誌』大府市
- 3 平田市誌編さん委員会編 1989『平田市誌』平田市
- 4 東海市史編さん委員会編 1990『東海市史 通史編』東海市
- 5 東海市教育委員会 1997『愛知県東海市東畑遺跡等試掘調査報告』
- 6 愛知県教育委員会 1999『愛知県知多半島遺跡詳細分布調査報告書』
- 7 立松彰・永井伸明 2004『愛知県東海市畑間遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
- 8 棚山秀徳・宮澤浩司・坂野俊哉ほか 2009『畑間・東畑遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
- 9 有馬啓介・宮澤浩司ほか 2012『畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
- 10 箕和也・宮澤浩司ほか 2012『畑間・東畑遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
- 11 坂野俊哉・宮澤浩司ほか 2013『畑間・東畑・龍雲院遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
- 12 箕和也・宮澤浩司ほか 2014『畑間・東畑遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
- 13 永井伸明・坂野俊哉ほか 2014『畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告-平成11～19年度調査』東海市教育委員会
- 14 中村毅・宮澤浩司ほか 2015『畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
- 15 坂野俊哉・宮澤浩司・石黒立人ほか 2016『畑間・東畑遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
- 16 丹生泰雪・宮澤浩司ほか 2017『畑間遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会

- 17 中村毅・安津由香里ほか 2018『畑間遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
- 18 宮澤浩司・安津由香里・西野順二・伊藤敬太郎ほか 2019『畑間・東畑遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
- 19 菅原政徳・川鍋知秋 2019『東畑遺跡発掘調査報告』沼澤工業株式会社
- 20 宮澤浩司・早川由香里・久富正登・新山王諒太ほか 2020『畑間・東畑遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
- 21 坂野俊哉・早川由香里・石黒立人・新美倫子・榎田泰之ほか 2021『畑間・東畑遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
- 22 永井伸明・宮澤浩司「伊勢湾を望む海辺の遺跡―東畑遺跡等発掘調査概報―」『研究報告とうかい』創刊号  
東海市教育委員会 2007
- 23 宮澤浩司「伊勢湾を望む海辺の遺跡(2)―平成19年度畑間・東畑遺跡発掘調査の概要―」『研究報告とうかい』第2号  
東海市教育委員会 2009
- 24 愛知県史編さん委員会編 2003『資料編2 考古2 弥生』愛知県
- 25 愛知県史編さん委員会編 2005『資料編3 考古3 古墳』愛知県
- 26 愛知県史編さん委員会編 2010『資料編4 考古4 飛鳥～平安』愛知県
- 27 愛知県史編さん委員会編 2017『資料編5 考古5 鎌倉～江戸』愛知県
- 28 愛知県史編さん委員会編 2007『別編 窯業2 中世・近世瀬戸系』愛知県
- 29 愛知県史編さん委員会編 2012『別編 窯業3 中世・近世常滑系』愛知県
- 30 石黒立人・加納俊介編 2002『弥生土器の様式と編年 東海編』木耳社
- 31 中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 32 中野晴久 2013『中世常滑窯の研究』愛知学院大学学位請求論文
- 33 名古屋大学文学部考古学研究室ほか 1996『知多市文化財資料33 下内橋遺跡』知多市教育委員会
- 34 阿部永 1994『日本の哺乳類』東海大学出版会
- 35 奥谷壽司 2001『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会
- 36 増田修・内山りゅう 2004『日本産淡水貝類図鑑② 汽水域を含む全国の淡水貝類』株式会社ビーシーズ
- 37 望月賢二 2005『魚と貝の事典』魚類文化研究会

表3 1 地点遺構一覧表

番号	標記号	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	平面形	断面形	理 工	出土遺物	備 考
1001	SP	2B15-16i	35	(13)	50	-	U字形	断面図参照	無し	
1002	SK	2B15	51	42	10	円形	壘形	断面図参照	無し	
1003	SK	2B15	37	(23)	10	円形	壘形	断面図参照	無し	
1004	SK	2B15	-	150	60	-	箱形	断面図参照	近世土師器、山茶碗	
1005	SK	2B15-16h, 16i	(360)	320	40	直線形	壘形	断面図参照	中世土師器、山茶碗、常滑焼	
1006	SK	2B15-16i	(230)	(140)	50	楕円形	壘形	断面図参照	近世土師器、近世陶磁器、瓦器、加工内壘、貝殻・獣骨等	
1007	SK	2B16i	(240)	70	50	長楕円形	壘形	断面図参照	近世陶磁器、貝殻・獣骨等	
1008	SK	2B16i	(110)	60	25	-	逆台形	断面図参照	無し	
1009	SK	2B16i	59	(24)	15	-	逆台形	断面図参照	無し	
1010	SK	2B18h	70	(25)	30	-	壘形	断面図参照	無し	
1011	SK	2B19h	75	(30)	50	-	U字形	断面図参照	無し	
1012	SK	2B20g	35	(22)	30	楕円形	U字形	断面図参照	無し	眼石有
1013	SP	2B19h	-	30	24	-	U字形	褐色(10YR4/4)細粒砂	無し	
1014	SK	2B20g	-	115	19	-	壘形	褐色(10YR4/4)細粒砂	無し	
1015	SK	2B20g	90	90	25	円形	壘形	灰黄褐色(10YR5/2)シロト質粘細粒砂	近世土師器、山茶碗、常滑焼等	
1016	SK	2B20g	50	(20)	47	-	U字形	断面図参照	無し	
1017	SK	2B20g	54	(18)	32	-	壘形	断面図参照	近世土師器、山茶碗等	
1018	SP	3B1g	52	(30)	30	-	壘形	断面図参照	無し	
1019	SK	3B1g	(70)	(40)	21	-	壘形	断面図参照	無し	
1020	SK	2B20g-3B1g	(510)	(420)	100	-	逆台形	断面図参照	古式土師器、山茶碗、常滑焼、古瀬戸、管状土師等	
1021	SK	2B20g	120	100	20	楕円形	断面図参照	断面図参照	大聖明の陶器	

表4 2地点遺構一覧表

番号	標記号	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	平面形	断面形	埋土	出土遺物	備考
2001	SK 3B4e		120	110	11	円形	皿形	無し		
2002	SK 3B4e		(71)	60	20	楕円形	碗形	断面図参照	土師器	
2003	SK 3B4e		70	45	15	楕円形	碗形	断面図参照	加工凹盤	
2004	SP 3B4e		23	22	31	円形	U字形	褐色(10YR4/6)細粒砂	無し	
2005	SK 3B4e		60	58	10	円形	皿形	断面図参照	無し	
2006	SP 3B4e		50	38	20	楕円形	U字形	断面図参照	無し	
2007	SK 3B4d		59	45	22	円形	碗形	断面図参照	常滑焼、近世陶器	
2008	SK 3B4d		60	47	22	円形	碗形	断面図参照	常滑焼細片、中世土師器、近世染付磁器	
2009	SD 3B4e-3B5e		190	19	8	直線形	碗形	断面図参照	近世陶器	
2010	SK 3B4e		104	72	17	楕円形	碗形	断面図参照	山茶碗、常滑焼	
2011	SD 3B4e-3B5e-3B5d		(188)	48	25	直線形	碗形	断面図参照	古式土師器、土師器、常滑焼、山茶碗、瓦質土器、	
2013	SK 3B4e		(63)	(56)	5	円形	皿形	断面図参照	無し	
2014	SE 3B4e-3B5e		(208)	182	(170)	隅丸長方形	U字形	断面図参照	縄文土器、弥生土器、古式土師器、山茶碗、中世土師器、常滑焼、陶瓦、菅状土鏝	
2015	SD 3B4e		(148)	24	4	直線形	皿形	断面図参照	中世土師器、山茶碗、近世陶器	
2016	SD 3B4e		(163)	21	5	直線形	皿形	断面図参照	弥生土器、常滑焼、近世陶器	
2017	SD 3B4e		(148)	(17)	5	直線形	碗形	断面図参照	弥生土器、土師器、山茶碗、中世土師器、古瀬戸、常滑焼、近世陶器	
2018	SD 3B4e		121	25	9	直線形	碗形	断面図参照	無し	
2019	SK 3B4d-3B4e		95	(61)	33	-	碗形	褐色(10YR4/6)細粒砂	無し	
2020	SP 3B4f		22	(10)	40	-	U字形	断面図参照	無し	
2021	SK 3B4e		57	(41)	21	楕円形	碗形	褐色(10YR4/6)細粒砂	無し	
2022	SK 3B4e		58	46	24	楕円形	碗形	褐色(10YR4/6)細粒砂	無し	
2023	SK 3B5d		80	68	18	楕円形	碗形	断面図参照	近世陶磁器	
2024	SK 3B5d		123	60	28	楕円形	碗形	断面図参照	土師器、山茶碗、近世陶器(瀬戸・美濃、常滑焼)	
2025	SK 3B5d		102	60	10	楕円形	皿形	断面図参照	無し	
2026	SK 3B4e-3B5e		144	(56)	20	-	皿形	にふい黄褐色(10YR5/4)細粒砂~中粒砂	弥生土器、古式土師器、土師器、山茶碗、常滑焼	
2027	SD 3B5e		(57)	35	16	直線形	U字形	にふい黄褐色(10YR5/4)細粒砂~中粒砂	無し	
2028	SK 3B5c-3B5d		140	(35)	21	-	皿形	断面図参照	銭貨2枚(産者うち1枚は皇未遺寶)	
2030	SK 3B4d-3B5d		(290)	(260)	20	方形・長方形	-	断面図参照	無し	
2031	SD 3B4e		(60)	(22)	8	直線形	碗形	断面図参照	無し	
2032	SK 3B6d		70	(51)	28	楕円形	逆台形	断面図参照	土師器	
2033	SK 3B7c		79	60	15	楕円形	碗形	断面図参照	近世土師器	

番号	種別記号	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	平面形	断面形	埋 土	出土遺物	備 考
2034	SK	3B7c	67	51	9	楕円形	皿形	断面図参照	常滑焼	
2036	SK	3B7c・3B8c	(83)	(20)	48	-	碗形	断面図参照	土師器、銭貨(洗式通貨)	
2037	SK	3B4e	(64)	45	10	楕円形	皿形	断面図参照	無し	
2039	SP	3B8B	40	(30)	10	楕円形	碗形	断面図参照	無し	柱状残存
2040	SP	3B8B	35	(20)	20	楕円形	碗形	断面図参照	無し	
2041	SP	3B8B	45	(25)	15	-	碗形	断面図参照	無し	
2042	SP	3B8B	38	34	15	円形	碗形	断面図参照	無し	
2043	SD	3B8B	(120)	78	16	-	逆台形	断面図参照	土師器、山茶碗、管状土罐	
2045	SP	3B8B	40	(34)	11	-	碗形	断面図参照	古瀬戸	
2046	SK	3B8B	75	50	30	楕円形	U字形	断面図参照	山茶碗、常滑焼、管状土罐	
2047	SP	3B8B	(60)	40	20	楕円形	碗形	断面図参照	無し	
2048	SK	3B7・8a	(165)	(82)	(96)	-	U字形	断面図参照	山茶碗、土師器、古瀬戸、近世陶器(瀬戸・美濃)、中・近世土師器、中世常滑焼、近世磁器	
2049	SK	3B8a・3B8B	154	(103)	42	楕円形	碗形	褐色(10YR5/1)中粒砂	常滑焼	
2051	SK	3B8B	(102)	60	67	-	箱型	褐色(10YR5/6)細粒砂～中粒砂	山茶碗、常滑焼	
2052	SK	3B8B	72	(24)	5	-	皿形	断面図参照	無し	
2053	SK	3B8B	78	(50)	40	楕円形	碗形	暗褐色(10YR3/3)細粒砂	山茶碗、古瀬戸	
2054	SK	3B8B	(51)	30	19	-	碗形	断面図参照	古瀬戸	
2055	SE	3B7・8a、3B8B	(250)	(210)	(120)	-	U字形	断面図参照	中世土師器、山茶碗、常滑焼、近世陶磁器	
2056	SP	3B8a	(50)	(41)	19	楕円形	碗形	断面図参照	無し	
2057	SK	3B8a	90	(50)	11	-	皿形	断面図参照	無し	
2058	SP	3B8a	25	24	19	円形	U字形	断面図参照	中・近世土師器、近世磁器	
2059	SK	3B8B	65	(46)	14	-	逆台形	断面図参照	土師器、山茶碗	
2062	SK	3B8B	(55)	(37)	48	-	-	灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂～中粒砂	無し	
2063	SK	3B8a	(82)	(46)	10	-	皿形	褐色(10YR5/1)中粒砂	無し	
2065	SK	3B8a	148	108	70	楕円形	U字形	断面図参照	山茶碗、中世土師器、常滑焼1号	
2070	SK	3B8a、3B9a	100	(22)	40	-	箱形	断面図参照	中世土師器、常滑焼	
2071	SK	3B8a、3B9a	(170)	62	36	長楕円形	U字形	断面図参照	無し	
2072	SP	3B9a	39	33	14	円形	碗形	断面図参照	無し	
2074	SK	3B8B、3B9B	68	51	27	楕円形	逆台形	断面図参照	山茶碗	
2075	SK	3B9a	98	(50)	30	楕円形	碗形	断面図参照	無し	
2076	SK	3B9a	(51)	(47)	12	-	皿形	-	無し	

番号	種別記号	グリッド	高輪 (cm)	厚輪 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	埋土	出土遺物	備考
2077	SP	3B9a	45	(30)	15	-	断面形 U字形	断面図参照	山茶碗	
2079	SK	3B8B	76	60	50	楕円形	U字形	断面図参照	土師器、山茶碗	
2080	SK	3B8a	(170)	(13)	12	-	皿形	断面図参照	中世土師器、常滑焼、管状土鏡	
2081	SP	3B8a	(39)	35	20	楕円形	U字形	断面図参照	無し	
2082	SK	3B8a	(45)	33	22	円形	碗形	暗褐色(10YR3/3)細粒砂	無し	

表 5 出土遺物一覧表

順番 番号	産地・材質	器種	調査区	クワット	遺構	階位	積存率	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法等の特徴	胎土	色調	備考
1	縄文土器 深鉢	2	3B5a	301ASE(庫内)	5%以下	-	(6.1)	-	-	-	内面・磨滅のため不明 外面・縄文、連続部突文	内:2.5YR7/1灰白 外:2.5Y7/2灰黄	口端部に2%の連続部突文	
2	弥生土器 深鉢	2	3B5a	301ASE(庫内)	5%以下	-	(4.0)	-	-	-	内面・ナガ 外面・一枚目条痕	10YR7/4に5%黄		
3	弥生土器 甕	2	3B5a	包含層	5%	包含層	(18.8)	-	-	-	内面→写状具によるナガ 外面→条痕文	5YR6/6橙		
4	弥生土器 高杯	2	3B4a	包含層	5%以下	-	(2.0)	-	-	-	内面→写状 外面→写状、波状文	7.5YR7/4に5%黄		
5	古式土器器 加脂蓋	1	2B20a	1020SX	10%	中層	(42)	-	-	-	内面・ナガ 外面→ハゲム、ナガ、連続部突文	内:10YR6/4に5%黄 外:2.5YR6/3に5%黄		
6	古式土器器 台付甕	2	3B9a	2070SK	5%	-	(3.1)	(7.4)	-	-	内面・ナガ 外面→ハゲム	2.5YR6/4に5%黄		
7	中世土器器 伊勢型鍋	2	3B8a	2060SK	5%以下	-	(2.0)	-	-	-	内外面・横ナガ	2.5YR6/6灰黄		
8	中世土器器 羽釜	2	3B9a	包含層	5%以下	-	(6.1)	-	-	-	内面・ナガ、指印正痕 外面・横ナガ	10YR7/3に5%黄橙		
9	中世土器器 羽釜	2	3B8a	2080SK	5%	包含層	(19.0)	-	-	-	内外面・指ナガ、横ナガ	内:7.5YR7/4に5%黄 外:10YR7/3に5%黄橙	外面に横行着	
10	中世土器器 平口鉢小皿	2	3B9a	2070SK	15%	-	(27.0)	(6.0)	-	-	内面・凹底ナガ 外面・凹底ナガ、指印込え	内:10YR7/2に5%黄橙 外:10YR4/1灰黄		
11	山茶碗 碗	2	3B5a	301ASE(庫内)	30%	-	(2.3)	6.1	-	-	内面→コクロナガ 外面→コクロナガ、凹底条切可痕	7.5Y7/1灰白	底の付台高台	
12	山茶碗 碗	2	3B5a	301ASE(庫内)	30%	-	(13.4)	5.3	-	-	内面→コクロナガ 外面→コクロナガ、凹底条切可痕	7.5YR7/1灰白	底の付台高台	
13	山茶碗 片口鉢小皿	2	3B5a	301ASE(庫内)	30%	-	(4.8)	(11.0)	-	-	内面→コクロナガ、凹底→ウ削り 外面→コクロナガ、凹底→ウ削り	7.5YR6/1灰	底の付台高台	
14	山茶碗 片口鉢小皿	2	3B5a	301ASE(庫内)	20%	-	(8.3)	(11.0)	-	-	内面→コクロナガ、凹底→ウ削り 外面→コクロナガ、凹底→ウ削り	5Y5/1灰	底の付台高台	
15	山茶碗 片口鉢小皿	2	3B5a	301ASE(庫内)	15%	-	(8.1)	-	-	-	内面→コクロナガ 外面→コクロナガ、凹底→ウ削り	内:7.5YR6/1灰 外:7.5YR7/1灰白	底の付台高台	
16	山茶碗 片口鉢小皿	2	3B5a	301ASE(庫内)	20%	-	(8.9)	(13.0)	-	-	内面→コクロナガ 外面→コクロナガ	内:7.5YR7/1灰白 外:7.5YR6/1灰	高台剥離	
17	常滑焼 片口鉢小皿	2	3B5a	301ASE(庫内)	30%	-	(8.9)	-	-	-	内面→コクロナガ、凹底正痕 外面→コクロナガ、横ナガ	10YR3/2暗茶褐		
18	常滑焼 片口鉢小皿	2	3B8a	2065SK	30%	-	(15.3)	6.1	(8.0)	-	内面→20目15条(庫内位) 外面→コクロナガ	2.5YR4/2灰赤	よく使用されていて磨込み	
19	古瀬戸 縁飾小皿	2	3B9a	2045SP	40%	-	(11.9)	2.7	(5.2)	-	内面→コクロナガ、凹底条切可痕 外面→コクロナガ、指印正痕	内:7.5Y7/1灰白 外:10YR6/3灰黄橙		
20	常滑焼 甕	2	3B8a	301ASE(井戸内)	60%	-	(33.6)	(30.7)	-	-	内面→横ナガ、指印正痕 外面→→ハゲム	黄白(48%) 少量赤(2)		口端部に1%の連続部突文、外面に条痕

標本番号	産地・材質	器種	調査区	クワッド	遺構	層位	残存率	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法等の特徴	胎土	色調	備考
21	常滑焼	大甕	2	3B8a	2014SE井戸枠	2段目	60%	(42.2)	(37.1)	-	内面→ツナギ、指頭圧痕 外面→ツナギ	精良(胎土 少量含む)	外面:5YR7.3/4暗赤褐色	標本表面→7.5YR2.3/暗赤褐色
22	常滑焼	甕	2	3B8a	2014SE井戸枠	2段目	60%	(38.8)	(40.5)	-	内面→横ナギ、指頭圧痕 外面→ツナギ	精良(胎土 少量含む)	外面:7.5YR2.3/暗赤褐色	標本表面→7.5YR2.3/暗赤褐色
23	常滑焼	大甕	2	3B8a	2014SE井戸枠		60%	(39.8)	(39.7)	-	内面→横ナギ、指頭圧痕 外面→ツナギ・横ナギ	精良(胎土 少量含む)	外面:5YR7.3/3暗赤褐色	外面:自然釉
24	常滑焼	大甕	2	3B8a	2014SE井戸枠		50%	(41.7)	(23.0)	-	内面→横ナギ、指頭圧痕 外面→ツナギ・横ナギ	精良(胎土 少量含む)	外面:5YR7.3/4暗赤褐色	外面:自然釉
25	常滑焼	大甕	2	3B8a	2014SE井戸枠	1段目	50%	-	(30.8)	-	外面→ツナギ、指頭圧痕 外面→ツナギ	精良	外面:10YR6.6/明赤褐色	
26	常滑焼	大甕	2	3B8a	2014SE井戸枠		10%	-	(8.7)	17.8	外面→ツナギ		外面:7.5YR3.3/暗赤褐色	外面:自然釉
27	常滑焼	甕	2	3B8a	2016SE井戸枠内		40%	(30.0)	(23.4)	-	内面→横ナギ、指頭圧痕 外面→ツナギ・横ナギ	精良	外面:7.5YR3.3/暗赤褐色	外面:自然釉
28	近世土師器	皿	1	3B8a	1006SK		40%	(6.9)	(5.2)	0.9	内面→クロナギ 外面→クロナギ、回転湯切り痕	精良	2.5YR6.6/橙	
29	近世土師器	皿	1	2B161	1004SK		95%	8.7	2	4.9	内面→クロナギ 外面→クロナギ、回転湯切り痕	精良	7.5YR7/4にぶい、橙	
30	近世土師器	皿	1	2B161	1004SK		70%	8.4	1.9	4.9	内面→クロナギ 外面→クロナギ、回転湯切り痕	精良	5YR5.6/明赤褐色	
31	近世土師器	皿	2	3B8a		包含層	60%	(8.1)	1.5~1.8	4.4	内面→クロナギ、回転湯切り痕 外面→クロナギ	精良	5YR7/6/橙	焼成前穿孔有
32	近世土師器	付帯	1	2B161	1006SK		20%	-	(4.1)	-	内面→ツナギ 外面→ツナギ	精良	内:7.5YR7/1にぶい、橙 外:10YR2/1黒	外面にスス付着
33	瓦器	鍋	1	2B161	1006SK		10%	(24.5)	(8.0)	(18.2)	内面→ツナギ 外面→指押さへ、横ナギ	精良	内:10YR4/1灰 外:10YR2/1黒	外面にスス付着
34	瓦器	双耳鍋	1	2B161	1006SK		70%	(25.2)	9.1	(20.0)	内面→ツナギ、指頭圧痕 外面→横ナギ	精良	内:NS/1/黄灰 外:1.5/黒	
35	灰釉小皿	小皿	2	3B8a	2055SEa		20%	(13.4)	3.2	(8.0)	内面→クロナギ、灰釉施釉 外面→クロナギ、回転湯切り痕	精良	5YR3/8/黄	
36	瀬戸・美濃	筒形湯呑	1	2B161	1006SK		100%	7.2	5.8	3.3	内面→クロナギ、湯付 外面→クロナギ、湯付	精良	7.5Y7/1	
37	瀬戸・美濃	湯呑	2	3B8a	2058SP		10%	-	(1.6)	(3.0)	内面→クロナギ、湯付(五弁文) 外面→クロナギ、湯付	精良	10Y8/灰白	
38	瀬戸・美濃	仏飯具	1	2B161	1006SK		70%	6.2	5.8	3.9	内面→クロナギ、湯付	精良	5Y8/灰白	
39	瀬戸・美濃	鹿柄碗	1	2B161	1006SK		95%	9.8	5.5	4.3	内面→灰釉施釉 外面→ツナギ、へらナギ、上方鉄軸、下方鉄軸	精良	灰釉:7.5Y2/灰白 鉄軸:2.5Y2/1黒	
40	瀬戸・美濃	片口	1	2B161	1006SK		60%	17.0	10.5	8.6	内面→クロナギ、湯付施釉 外面→回転湯切り痕・灰釉施釉	精良	釉:2.5Y8/25C白 漆漣:2.5Y7/4灰黄	標本表面→内面(外側)にスス付着





## 付 論 畑間・東畑・郷中遺跡における井戸枡の特徴について

青木 修（公益財団法人 瀬戸市文化振興財団）

鳥軒 満（株式会社 アコード）

本稿は、畑間・東畑・郷中遺跡から検出された井戸枡の特徴について、特に中世常滑窯産の甕を利用した「陶器転用側式井戸」と呼ばれる構造の事例をまとめた覚書として提示するものである。なお、本稿の参考となる第38～40図に掲載した図版及び一覧表は鳥軒の作成によるが、これを含め本稿における文責はすべて青木に帰属している。

東海市太田川駅周辺を対象とした土地区画整理（区画街路整備）事業が計画され、その範囲は南北約600m、東西約500mに及び、当該地には畑間・東畑・郷中・龍雲院遺跡が所在<sup>1)</sup>する。中心部の大半は、畑間遺跡が占め、その南東側に東畑遺跡、対して北西側には南から龍雲院遺跡と郷中遺跡がそれぞれ隣接して登録・管理されてきた。当該事業に関連する発掘調査は、平成11年度以降継続的に実施され、令和2年度の案件である本報告書の内容をもって完結の運びとなり、これまでの総調査面積は27,670㎡と報告されている。調査対象となったこれらの遺跡群は、伊勢湾に面した海岸砂堆上に形成された点に立地上の特徴があり、縄文時代以降、中近世・近代に至るまでの各時代に営まれた集落跡としての種別が代表的な評価となり得るであろう。

さて、本題に従う江戸時代を除く遺構は、畑間遺跡（4地点）、東畑遺跡（6地点）、郷中遺跡（1地点）の合計11地点が挙げられ、郷中遺跡の事例を除くと対象域の南半区に集中している点が指摘できるが、未調査域も含まれるため遺構の分布については暫定的な所見である点は否めない。

以下、南側の遺構から簡単に紹介するが、いずれも砂堆上に形成された遺構のため非常に軟弱な検出状況であり、調査時の安全性から完掘に至っていない事例も散見でき、一律に比較分析が難しい場合も否定できない。また、本文中で扱う大形甕と中形甕の区分の定義は、厳密な評価からすれば非常に曖昧で視覚的な要素が強く、概ね最大胴径50cm前後を境界として大形と中形を分類する所見を採用している。

- ① 2014SE 本報告で扱う遺構のため詳細は省略するとして、中形甕2点、大形甕5点を数え、元位置のものは3段（3点）まで確認できる。いずれも大形甕であり、最上段は口縁部から肩部を、中段と最下段は底部から胴部下半を打ち欠いた個体が利用されていた。常滑窯編年第8・9型式期に相当し、15世紀前半頃の構築と考えられる。
- ② 3223SE 最下段は不明としながら最大で5段まで確認できる。各個体は未接合のまま報告されているため詳細を欠くが、少なくとも大形甕4点を数える。常滑窯編年第8～10型式期に相当し、15世紀後半頃の構築と考えられる。
- ③ 002SE 元位置のものは2段（2点）まで確認できる。いずれも大形甕であり、両者はほぼ同じ法量値を示す。上段に配置された甕は、肩部付近に穿孔が施されている。常滑窯編年第10・11型式期に相当し、上段のものが新しく16世紀前半頃の構築と考えられる。
- ④ 028SE 大形甕3点を数え、元位置のものは2段（2点）まで確認できる。常滑窯編年第7・8型式期に相当し、14世紀後半頃の構築と考えられる。
- ⑤ SE7065 大形甕3点を数え、3段（3点）まで確認できる。いずれも底部から胴部下半を打ち欠いた個体が採用され、最下段と中段の個体には、胴部中段に穿孔が施され、最上段のものにはそれが

確認できない。穿孔方法は、胴部内側からの打点と報告されているが、内側のみにレンズ状の剥離痕が認められるため、外側からの施しとする見方に修正が必要である。常滑窯編年第 6a 型式期に相当し、13 世紀中頃の構築と考えられる。

⑥ SE1 推定される掘方の深さは 1.93m を測り、底部から下胴部を打ち欠いた個体が 7 段 (7 点) まで確認できる。やや中形に近い甕 2 点を含め大形甕は 5 点を数える。概ね常滑窯編年第 6a ~ 8 型式期に相当し、14 世紀後半頃の構築と考えられる。

⑦ SE1 中形甕 1 点、大形甕 2 点を数え、3 段 (3 点) まで確認できる。最下段は、中形甕を採用し、底部から口縁部まで残存する個体となるが、胴部下端の立ち上がり付近には穿孔が施されている。中段と最上段は大形甕で底部から胴部下半を打ち欠いた個体利用されている。常滑窯編年第 8・10 型式期に相当し、最下段と中段の個体は第 10 型式期であり、15 世紀後半頃の構築と考えられる。

⑧ CO32SE 中形甕 1 点、大形甕 2 点を数え、3 段 (3 点) まで確認できる。最上段は中形甕、その他は大形甕であり、最上段と中段は底部から胴部下半を、最下段は底部のみ打ち欠いた個体利用されている。また、最下段のものは胴部下半付近に穿孔が施されている。常滑窯編年第 8・10 型式期に相当し、最上段のみ第 10 型式期であり 15 世紀後半頃に構築されたと考えられる。

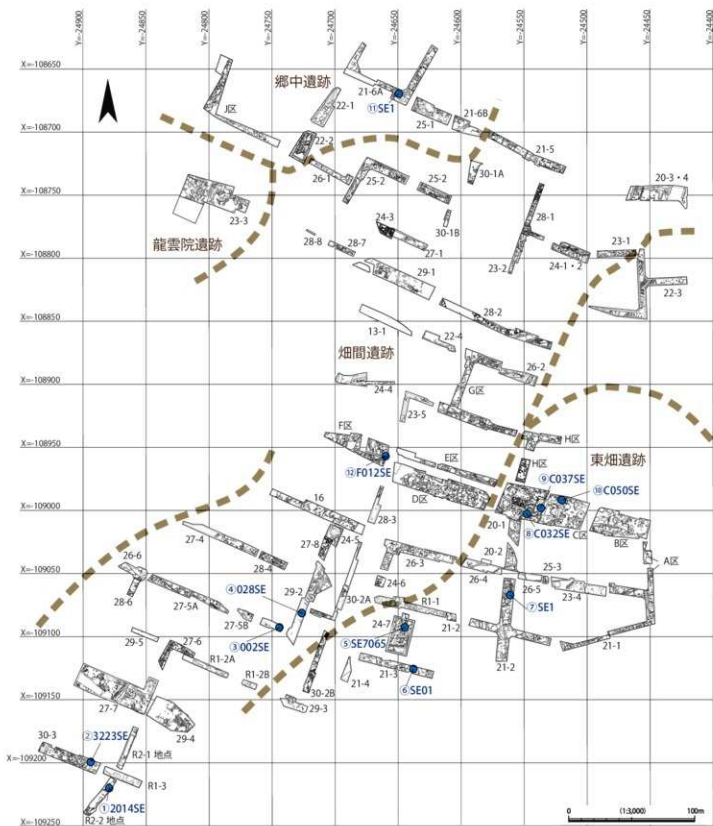
⑨ CO37SE 円形の掘方を有する。大形甕 1 点を数え、1 段のみ確認できる。底部から胴部下段を打ち欠いた個体利用されている。常滑窯編年第 6a 型式期に相当し、13 世紀中葉頃の構築と考えられる。

⑩ CO50SE 円形の掘方を有する。大形甕 2 点を数え、2 段 (2 点) まで確認できる。いずれも底部から下胴部を打ち欠いた個体利用されている。常滑窯編年第 5・6a 型式期に相当し、13 世紀中葉頃に構築されたと考えられるが、上段の個体が古い様相を示している。

⑪ SE1 大形甕 6 点、5 点を数え、3 段まで確認され、最下段には曲物が設置されていた。常滑窯編年第 6a・6b 型式期に相当し、13 世紀中葉から後半頃の構築と考えられる。

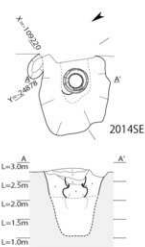
次に、平成 6 年 (1994)、知多考古学研究会・名古屋大学文学部考古学研究室により発掘調査が行われた知多市に所在する下内橋遺跡<sup>2)</sup>の事例を紹介する。検出された井戸は、楕円形の掘方を有し、井戸枠の四方には柱が残存し、井戸に伴う上屋施設の存在が想定される所見である。井戸枠には、中形甕 1 点と大形甕 4 点利用され、4 段まで確認されているが、最上段には 2 個体分が含まれるため、最大で 5 段の可能性も考えられる。最下段は、底部から口縁部まで残存する中形甕が設置され、胴部下端には穿孔、加えて底部の半分程度は打ち欠きがそれぞれ施されている。他は、全て底部から胴部下半を打ち欠いた大形甕が利用され、下から順にやや大きめの個体が積み重ねられている。最上段の 1 点と二段目と三段目は、常滑窯編年第 9 型式期、残る最上段の 1 点は同第 8 型式期に相当し、14 世紀後半から 15 世紀前半に帰属する。また、最下段は常滑窯編年第 10 型式期に相当するため、構築時期は 15 世紀後半頃と考えられる。

以上、畑間・東畑・郷中遺跡から検出された井戸枠の事例を紹介したが、利用された常滑窯産甕の生産地年代のみで評価すれば、⑩の常滑窯編年第 5 型式期がもっとも古く、③の同 11 型式期が最も新しい型式に相当する。ただし、⑩の事例は、下段に同 6a 型式期のものが使用されており、上段のそれは転用されたと考えられるため、総合的に判断した構築年代では、13 世紀中頃から 16 世紀前半頃までに相当するが、相対的には 13 世紀後半 ~ 14 世紀代に多く帰属する傾向にある。ただし、井戸枠に採用された甕は、一定の使用期間を経て転用されたもの、あるいは井戸枠の作り替えも想定されるため、厳密な構築時期あるいは稼働期間を特定するのは困難な状況にある点は明白である。対し

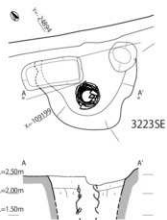


●—陶器転用側式并戸（常滑焼大甕を并戸枠にした并戸）  
 ①～⑫は、図39・40及び表6の并戸一覧表の番号に対応  
 ※平成28・30年度 細間・東畑遺跡発掘調査報告から転載、修正・加筆

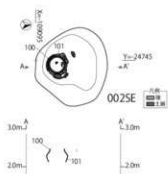
第38図 細間・東畑・郷中遺跡の陶器転用側式并戸分布図



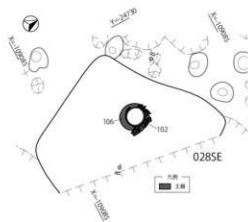
①井戸2014SE (R2-2地点)



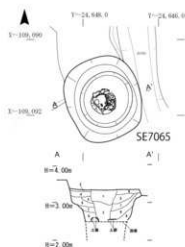
②井戸3223SE (30-3地点)



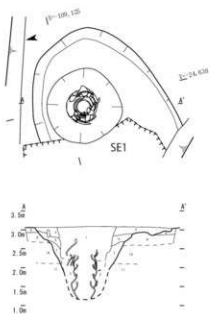
③井戸002SE (29-2地点)



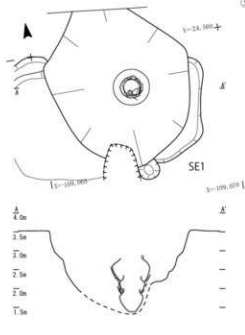
④井戸028SE (29-2地点)



⑤井戸SE7065 (24-7地点)



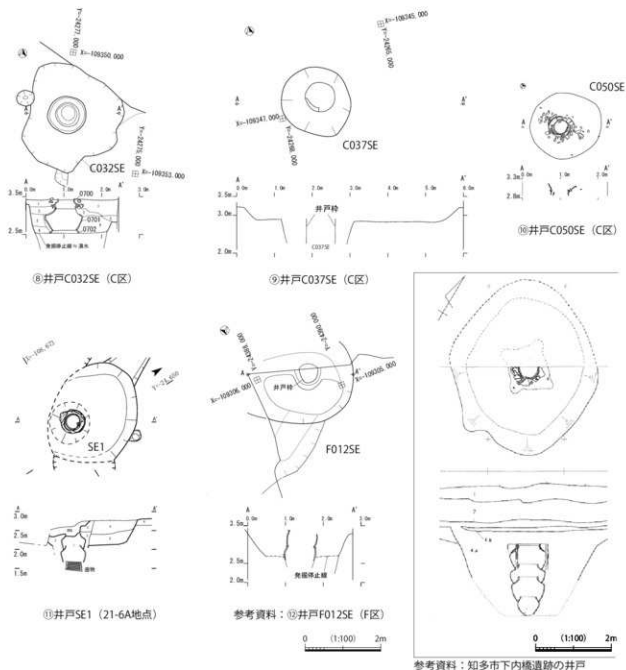
⑥井戸SE1 (21-3地点)



⑦井戸SE1 (21-2地点)



第 39 図 畑間・東畑・郷中遺跡の陶器転用側式井戸①



第40図 畑間・東畑・郷中遺跡の陶器転用側式井戸②

て、裏の中には使用の痕跡がほとんど認められない個体も含まれており、構築に至る経緯は一律では無い可能性も考えておきたい。また、焼成による歪を根拠として、その個体を粗悪品あるいは二級品とする報告内容も提示されているが、こうした解釈あるいは定義にも十分な検証が必要であろう。

最後に、当該遺跡内における「陶器転用側式井戸」の採用については、やはり砂堆を基盤とする脆く浸食されやすい地質が大きく影響したと推察され、井戸枠には硬質で強固な素材である常滑窯産の裏が優先的に選択された可能性を提示しておきたい。

【註】

- 1) 当該土地区画整理事業地内には、他に後田遺跡が含まれている。
- 2) 『下内橋遺跡 知多市文化財資料第33集』1996 知多市教育委員会

表 6 畑間・東畑・郷中遺跡の井戸一覧表

No	遺跡名	調査年度	調査地点	遺構番号	井戸枠の形態	井戸枠の段数	掘削平面形状	掘削行程 (1は残存層、長軸(m)・短軸(m)・深さ(m))	常滑窯編年	構築年代
1	畑間	令和2年	R2-2地点	2014SE	陶器転用式井戸	3段以上設置	隅丸長方形	(2.10) 1.80	第8・9型式	15世紀前半頃
2	畑間	平成30年	30-3地点	3223SE	陶器転用式井戸	5段以上設置	楕円形	2.39	(1.21) 第8~10型式	15世紀後半頃
3	畑間	平成29年	29-2地点	002SE	陶器転用式井戸	2段以上設置	円形	2.06	1.91 (0.59) 第10・11型式	16世紀前半頃
4	畑間	平成29年	29-2地点	028SE	陶器転用式井戸	2段以上設置	円形	3.86	3.81 1.92 第7・8型式	14世紀後半頃
5	東畑	平成24年	24-7地点	SE7065	陶器転用式井戸	3段以上設置	隅丸方形	2.20	2.02 (2.67) 第6a型式	13世紀中葉頃
6	東畑	平成21年	21-3地点	SE1	陶器転用式井戸	7段設置	楕円形	3.80	3.52 1.93 第6a~8型式	14世紀後半頃
7	東畑	平成21年	21-2地点	SE1	陶器転用式井戸	3段以上設置 (推定5段以上)	楕円形	4.45	3.71 2.25 第8・10型式	15世紀後半頃
8	東畑	平成11~19年	C区	C0325E	陶器転用式井戸	3段以上設置 (縁上段や小形の数)	不整形	2.85	2.50 (0.88) 第8・10型式	15世紀後半頃
9	東畑	平成11~19年	C区	C0375E	陶器転用式井戸	1段以上設置	円形	1.90	1.78 (0.60) 第6a型式	13世紀中葉頃
10	東畑	平成11~19年	C区	C0505E	陶器転用式井戸	2段以上設置	円形	2.10	1.95 (0.33) 第5・6a型式	13世紀中葉頃
11	郷中	平成21年	21-6a地点	SE1	陶器転用式井戸	3段以上設置 (縁下段曲物)	楕円形	2.62	2.35 (1.50) 第6a・6b型式	13世紀中葉~後半頃
12	畑間	平成11~19年	F区	F012SE	陶器転用式井戸	3段以上設置	楕円形	2.80	(1.46) -	17世紀代
13	畑間	令和2年	R2-2地点	2055SEa	陶器転用式井戸	1段以上設置	-	(2.50) (2.10)	(1.20) -	17世紀末~18世紀初頭頃
14	東畑	平成11~19年	C区	C0365E	不明	不明	円形	2.60	2.30 (0.28) -	12世紀後半頃
15	畑間	平成20年	20-4地点	0385E	不明 (取寄り溝か)	-	円形	2.66	1.30 (0.91) -	12世紀後半頃
16	東畑	平成22年	21-2地点	SE2	素掘り式井戸か	不明 (土管状井筒)	円形	2.97	2.19 (1.00) -	13世紀後半頃
17	郷中	平成22年	22-1地点	SE1012	素掘り式井戸か	-	円形	(2.00) -	-	近代~現代
18	郷中	平成22年	22-1地点	SE1012	素掘り式井戸か	-	楕円形	(1.05) 0.81	0.50 -	近世以降
19	畑間	平成22年	22-4地点	SX4038	不明 (取寄り溝か)	-	円形	1.80	(1.20) -	近世以降
20	東畑	平成30年	2018地点	SE01	不明 (取寄り溝か)	-	円形	(0.80) (0.47)	-	近代以降
21	東畑	平成30年	2018地点	SE02	不明 (取寄り溝か)	-	楕円形	(1.50) (1.30)	-	近代以降 中・近世
22	畑間	平成30年	30-3地点	002SE	素掘り式井戸か	-	楕円形	2.10	(1.00) -	18世紀以降
23	畑間	平成30年	30-1地点	051SE	不明	-	円形	1.80	(0.52) -	16世紀以降
24	畑間	平成30年	30-1地点	060SE	不明	-	円形	1.28	(0.78) -	16世紀以降
25	畑間	平成30年	30-1地点	069SE	不明	-	円形	2.12	(0.27) -	不明 (13世紀代に埋没)
26	東畑	平成30年	30-2地点	2001SE	不明	-	楕円形	3.59	(0.82) -	中世
27	畑間	平成30年	30-2地点	2203SE	不明	-	楕円形	1.37	(0.56) -	中世
28	畑間	平成30年	30-3地点	3010SE	不明	-	楕円形	3.16	(1.45) -	15~16世紀
29	畑間	平成30年	30-3地点	3019SE	不明	-	楕円形	3.22	(0.69) -	15世紀
30	畑間	令和元年	R1-3地点	井戸	陶器管式井戸	4段以上設置 (土管状井筒)	円形	2.60	2.30 -	幕末~近代

No. 1~12は、第38~40図の①~③に対応。

陶器転用式井戸・陶器管式井戸の用途・分類は、引用・参考文献 27を参考とした。

# 写真図版







1 1・2地点全景（北東から）



2 1地点全景（南西から）



3 1地点全景（北東から）



1 1地点北端部（北西から）



2 1002SK 断面（南西から）



3 1003SK 断面（南東から）



4 1002・1003SK（南西から）



5 1008SK（北西から）



1 1005SD、1004・1006・1007SK（北西から）



2 1004・1006・1007SK（南東から）



1 1010SK 断面（北西から）



2 1011SK 遺物出土状況（北西から）



3 1013SP 断面（北西から）



4 1015SK（南西から）



5 1016・1017SK 断面（南東から）



6 1018SP（北西から）



7 1019SK（北西から）



8 1021SK 断面（北西から）



1 1地点南端部（北西から）



2 1020SX（北西から）





1 1地点南東壁北端部（北西から）



2 1地点南東壁中央部（西から）



3 1地点南東壁南端部（西から）



1 2地点全景（北東から）



2 2地点全景（南西から）



3 2地点南端部（南東から）





1 2001SK 断面 (南西から)



2 2002SK 断面 (北東から)



3 2003SK 断面 (南東から)



4 2004SP 断面 (南東から)



5 2005SK 断面 (南東から)



6 2006SP 断面 (北東から)



7 2007SK 断面 (北東から)



8 2008SK 断面 (北東から)



1 2010SK 断面（北西から）



2 2011SD 断面（南東から）



3 2011SD（南から）



4 2015・2016SD 断面（南東から）



5 2 地点北東部（南から）



1 2014SE 断面（南東から）



2 2014SE 井戸枠 1 段目（北西から）



1 2014SE 井戸枠 1・2段目（北西から）



2 2014SE 井戸枠 1・2段目（北西から）



1 2023SK・2030SX (南東から)



2 2023SK 断面 (北東から)



3 2023SK 粘粘土断面 (北東から)



4 2024SK 断面 (南西から)



5 2033SK 断面 (北西から)





1 2036SK 断面 (西から)



2 2039・2040SP 断面 (南西から)



3 2042SP 断面 (南から)



4 2043SD 断面 (北西から)



5 2045SP 断面 (南東から)



6 2045SP 遺物出土状況 (南東から)



7 2046SK 断面 (南西から)



8 2046SK (南西から)



1 2048SK・2055SEa・b断面（南東から）



2 2048SK 断面（南東から）



3 2055SEa 井戸枠（南東から）



4 2053SK 断面（南東から）



5 2053SK（南東から）



1 2057SK・2081SP (南西から)



2 2059SK 断面 (南西から)



3 2065SK 断面 (北から)



4 2065SK (北西から)



5 2070SK 断面 (北東から)



6 2070SK (北東から)



7 2071SK 断面 (北西から)



8 2071SK (北西から)





1 2075SK 断面 (北東から)



2 2075SK (北東から)



3 2074SK (北西から)



4 2072SP 断面 (南東から)



5 2072SP (北西から)



6 2077SP (北東から)



7 2079SK 断面 (北西から)



8 2079SK (北西から)



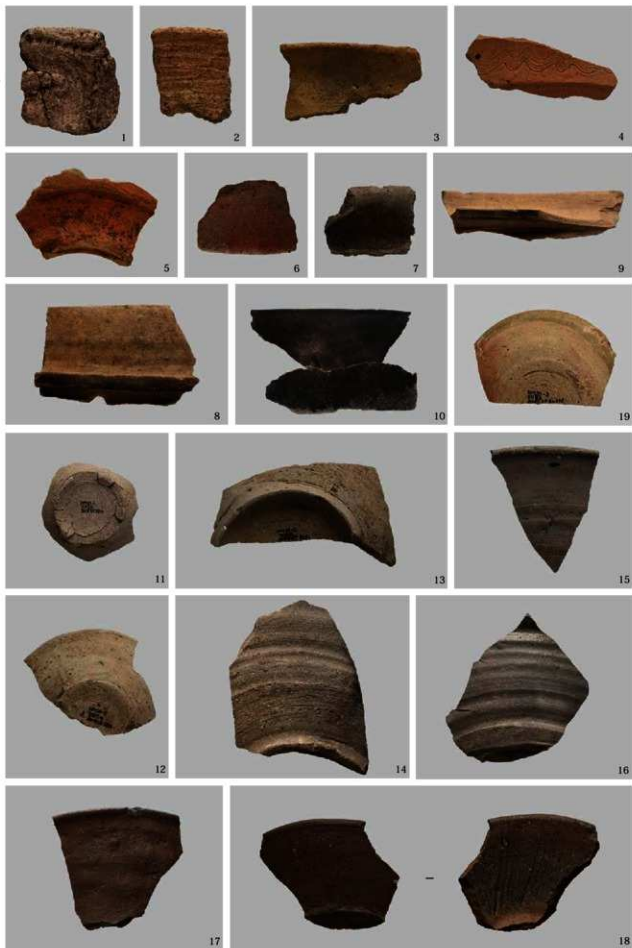
1 2地点南東壁北端部（西から）



2 2地点南東壁中央部（西から）



3 2地点南東壁南端部（西から）







23



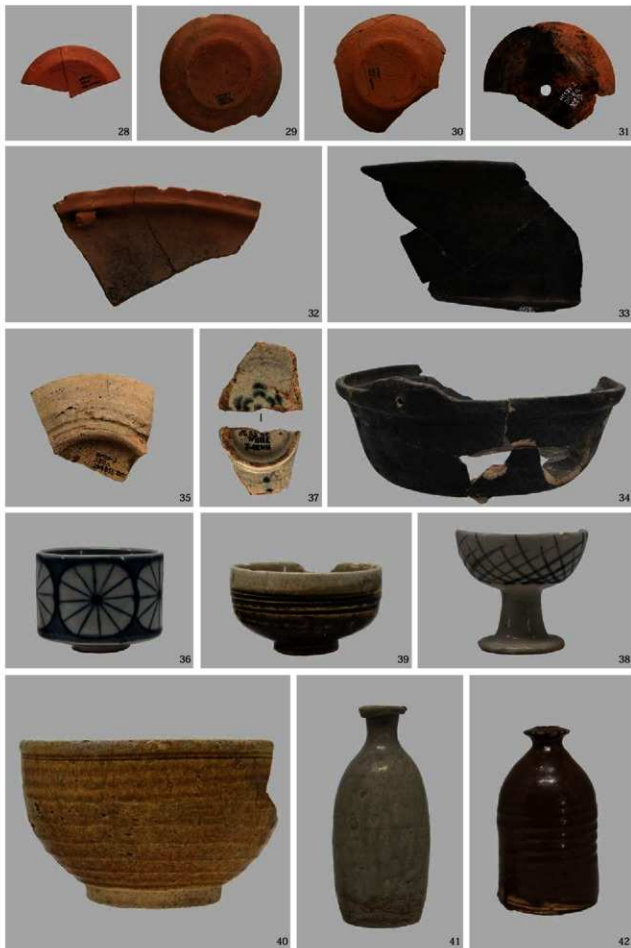
24



25 (2014SE 井戸枠1段目の裏)











・貝類



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12

- 1 オオタニシ  
2 ウミニナ科  
3 アカニシ  
4 マイマイ類  
5 ハイガイ 左  
6 サルボウガイ 左

- 7 ナミマガシワ科? 左  
8 マガキ  
9 ヤマトシジミ 左  
10 シオフキ 左  
11 アサリ 左  
12 ハマグリ 左

3 — 1.0cm  
1,4-12 — 1.0cm  
2 — 1.0cm

・動物遺存体



13



14



15

- 13 ネコ 下顎骨 右  
14 海獣類? 肋骨  
15 哺乳類 頭蓋骨 破片

— 1.0cm



## 報告書抄録

ふりがな	れいむ2ねんど はたまいせきはつつちようさほうこく						
書名	令和2年度 畑間遺跡発掘調査報告						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	島軒 満 早川由香里 青木 修 金原裕美子 金原美奈子						
編集機関	株式会社アコード名古屋営業所						
所在地	〒498-0021 愛知県弥富市平島町大脇12-3-202 ℡ 0567-65-6082						
発行機関	愛知県東海市教育委員会						
所在地	〒476-8601 愛知県東海市中央町1丁目1番地 ℡ 052-603-2211						
発行年月日	令和5年(2023年) 3月31日						
所収遺跡名	所在地	市町村 コード 遺跡	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
畑間遺跡	愛知県 東海市 大田町	23222 43050	35 01 52	136 89 41	20200616 ～ 20200803	357.6	土地区画 整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
畑間遺跡	集落	中世 近世	土坑・井戸 溝状遺構 土坑・井戸 柱穴	縄文土器・弥生土器・土師器 山茶碗・中世陶器（古瀬戸・ 常滑焼）・近世陶磁器・瓦器 土製品・石製品・瓦類・金属 製品（銭貨）・自然遺物 （貝類・獣骨等）		中世区画溝、常滑焼大 甕を井戸枠とした中世 の井戸跡を検出	
要約	<p>畑間遺跡は、愛知県東海市に位置する縄文時代から近世に至る集落遺跡である。令和2年度の調査では、遺跡の南西端部、大田川旧河道に面した2箇所で開催し、主に中世から近世にかけての遺構・遺物を検出した。中世の遺構としては、屋敷地の区画に伴うと思われる区画溝や常滑焼大甕を井戸枠とした中世の井戸跡を検出した。遺跡の南西端においても中世の屋敷地が展開していたと考えられ、当該期の遺構の分布や屋敷地割を考える上で貴重な成果を得た。近世の遺構には、粘土貼り遺構や常滑焼赤物大甕を井戸枠とした井戸跡を検出した。</p> <p>出土遺物には、土師器、山茶碗、中世陶器（古瀬戸・常滑焼）、近世陶磁器、瓦器、土製品・石製品・金属製品等の他、縄文時代中期後半の中富式の深鉢形土器、弥生時代前期から古墳時代にかけての遺物も出土しており、遺跡の縁辺部にも当該期の遺構が分布していた可能性が高い。</p>						

---

愛知県東海市

令和2年度

畑間遺跡発掘調査報告

令和5年3月10日印刷

令和5年3月31日発行

- 編集 株式会社アコード名古屋営業所  
〒498-0021 愛知県弥富市平島町大脇 12-3-202  
Tel.0567-65-6082
- 発行 愛知県東海市教育委員会  
〒476-8601 愛知県東海市中央町1丁目1番地  
Tel.052-603-2211
- 印刷・製本 株式会社明新社  
〒630-8141 奈良県奈良市南京終町3丁目464番地  
Tel.0742-63-0661
-